

569-61



1200501517037

569

1

32.5.10

世界大衆文學全集

オヴリャー・ツウスイト

馬場孤蝶譯



改造社





なるけかを勞苦になんこに私、アゲリオ、わたけつめとつや、お  
(照參頁六十三百、L... てん

## 序



者 譯

チャアルズ・ディッケンスは千八百十二年に英國ボオツマスの近くのランドポオトで生れ、千八百七〇年七月九日にロオチエスタアの近くのゴツツヒルで死んだ世界的大小説家である。

父ジョン・ディッケンスは始め海軍主計局の書記であつたが、後に新聞探訪となつた。チャアルズは私立學校で初等教育を受け、公證人の書記となつたが、千八百三十五年に「ロンドン・モオニングクロニクル」の探訪となつた。

作の方では、千八百三十三年に「マンズリイ・マガジン」に「ア・ディンナア・イン・ポブラア・ウォーク」といふ短篇を載せたが、他の短篇を纏めて、千八百三十六年に「スケッチス・バイ・ボズ」を公けにした。ジョージ・ホガアスの娘カザリンと結婚したのも同年である。名高い「ピクウィック・ベエバアズ」の作が成つたのは同年から翌三十七年へかけてであるが、これでディッケンスの名聲は確立した。以後連年續々大作を出して、絶筆は千八百七十年に出た「ミステリイ・オフ・エドウィン・ヅルウド」(未完篇)であつた。「オリヴァー・ツイスト」の出たのは千八百三十八年であり、「テエル・オフ・ツウ・シティーズ」は千八百五十九年の作である。

ディッケンズは最も廣く讀まれた、且つ今も尙廣く讀まれる作家である。従つて、所謂

る大陸の諸作家の作風にも可なりな感化を及ぼしたやうである。佛蘭西のアルフォンス・ドオデエの如きは、大分ディッケンスを模倣してあると言はれたくらゐであるし、露西亞のドストエフスキイの如きにさへディッケンスの感化は可なり及んで居らうと思ふ。

「オリヴァー・ツイスト」「アラア・ミユウチユアル・フレンド」「テエル・オフ・ツウ・シテイーズ」などに於ける下層社會、貧民窟、悪黨の宿などの描寫は實に見事である。今の探偵、冒險の作家でこれに追従し得べき人が果して幾人あるであらうか。ジイ・ケエ・チェスタアトンを除いては一寸その人があらうとは思はれぬ。コオナン・ドイルでは少し筆が明る過ぎるであらう。

「オリヴァー・ツイスト」はその作年が示す如く、今から九十年程前の作品であるに拘らず、今日吾々が讀んでも決して古いとは感ぜられぬ叙述が編中隨所に見出される。作家の力量、古今に互る藝術的根柢、さういふものは時代の新舊を超越して存在するものである。

本譯篇は本筋に當る大切な且つ最も興味のある部分は残らず譯出し得たと信ずる。

千九百二十九年臘月

馬場 孤蝶

目次

一、救貧院	八
二、孤兒預り所	二二
三、煙突掃除人	二六
四、葬儀屋	三三
五、貧民窟	四九
六、義憤	五三
七、病兒の祝福	七一
八、かげろふ小僧	八三
九、不思議な遊戯	九四
十、「泥坊をつかまへろ」	一〇二

十一、警察法廷	.....	一一〇
十二、犬を連れた男	.....	一一〇
十三、素人に化けた女	.....	一一〇
十四、再び悪魔の巢へ	.....	一四〇
十五、商賣の話	.....	一五五
十六、屋尻切りの家	.....	一七〇
十七、夜の路	.....	一八三
十八、銃聲	.....	一九一
十九、黄金の品	.....	二〇四
二十、失敗の情報	.....	二二三
二十一、女の影	.....	二二八
二十二、事件の翌朝	.....	二四〇

二十三、救ひの策略	.....	二四五
二十四、厨房議會	.....	二六〇
二十五、倫敦の警官	.....	二七三
二十六、恩人の家	.....	二八六
二十七、病める女	.....	二九七
二十八、若き紳士	.....	三〇六
二十九、猶太人と不思議な男	.....	三二二
三十、別れ行く戀人	.....	三二七
三十一、救貧院の世話役	.....	三三二
三十二、雷雨の夜	.....	三三二
三十三、立聞く女	.....	三五三
三十四、女の天性	.....	三七二



オリヴァー・ツウイスト

三十五、再	會	.....	三三七
三十六、日曜の夜半		.....	四〇三
三十七、間	者	.....	四一七
三十八、橋の上で待つ女		.....	四二三
三十九、猶太人の煽動		.....	四四四
四十、何時までも附いて来る影		.....	四六〇
四十一、遺言書		.....	四七五
四十二、廢屋の捕物		.....	四九七
四十三、故郷の旅館		.....	五一七
四十四、猶太人の最後の夜		.....	五四六
四十五、團圓		.....	五六一



# オリヴァー・ツイスト

## 一、救貧院

さる市、その名は言はないことにする方が先づよからうと思ふし、さればと言つて假名は附けないで置くが、さういふ市の公共の建物の中に、大きいにせよ、小さいにせよ、大抵の市には、何處でも古くからある建物がある。即ちそれは救貧院だ。で、この救貧院で、別段今の所、何年の何月何日と、判然と言ふ必要も無いから、それは言はぬが、兎に角或る日のこと、一人の人間が生れた。それは、この章の一番初めに書いてある名の人間である。

一體人間に取つて、救貧院で生れるといふことが、それ自體で最も好運な羨む可きことがらだと主張する積りはないのであるが、それにしても、この特別の場合では、救貧院で生れるといふことさへ、オリヴァー・ツイストに取つては、一番運の宜しいことであつたと言ひたいと思ふ。この世に生れて、呼吸をしだすといふ仕事は、なかく面倒なことではあるが、吾々が其後安々と世の中に生きて行く爲には、是非服さなければならぬ習慣である。所が、オリヴァーをして、この呼吸の仕事に従事せしめるには、なかく骨が折れた。さういふ風で、オリヴァーが、この世とあの世との間に、いや、彼の世の方へ却つて近くと言つてい、位に、さまよひながら、小さい毛屑入りの敷蒲團の上で、喘いでゐる間、これが若し身分のいゝ人の兒で、大心配の祖母さん達や、伯母さん達や、幾人もの熟練な看護婦や、深い知識の醫者等に取巻かれてゐたのであつたら、オリヴァーは、何んなことがあつても必ず殺されて終つたであらう。けれども實際その場合は、オリヴァーに附いてゐる者と言つては、麥酒を何時もよりは餘計に引つかけたが爲に、却つて悲しい氣持になつてゐるといふやうな、院内の婆さんと、請負で院内の治療を引き受けてゐる教區醫者と、さうたつた二人きりであつたのでオリヴァーと、天然とが、人混ぜもせず、生死の闘ひをし抜かうとした譯であつた。其結果として、少しの悶躁きをなしてから、オリヴァーは、呼吸をし、噴嚏をし、そして、三分と四分の一よりずつと長い時の間、人間に取つて極く必要な附屬物、即ち聲を持つてゐなかつた男の孩兒相當の聲で、自分の生存を告げ知らしたが、それはその兒の生れたことによつて、新たな負擔が、その教區區へかゝるといふ事實をば、救貧院内の人々に、普く宣言したことになるのであつた。

オリヴァーが、さういふ風に、彼の肺が自由に、相當に働くことの最初の證據を表はすといふと、鐵の寢臺の上に無雑作に投げ掛けられてゐた綴ぎ合せの掛蒲團がさら／＼と動いて、若い女の蒼ざめた顔が、枕から弱々と上がつた。そして弱い幽かな聲が、やう／＼と言つた。

「孩兒を見せて、死なして下さい。」  
醫者は、煖爐の方へ顔を向けて坐つて、手の掌を暖めるのと、擦り合すのとを、交り番毎にやつてゐた。若い女の言葉を聞くと、彼は立ち上つて、寢臺の頭の方へ進んで行つて、思ひの外親切に、

「いや、死ぬるなどと言つては不可ないですよ、未だ」  
隅の方で、緑の硝子罎の中のもの、如何にも甘さうに味はつてゐた婆さんの看護婦は、その罎を  
手早く衣囊へ押し込んで言を挟んだ。

「あゝ、この女は可愛さうですよ、いゝえさ、この女は可愛さうで御座いますよ、先生、私のやうに  
長生きを、十三人も産んで、二人限り残してみんな死んでしまひ、その二人が私と一緒に救貧院に  
はひつてゐるのですもの。私のやうな身の上になることを考へたら、この女なんざア、こんなに歎か  
すに、この儘になつてしまつた方が、いくら優しだか、知れアしませんわね。子持になるといふこ  
とも、竝大抵のことぢやありませんわ。本當に苦しい世の中だつちやアありませんものね」  
母親となることの行末が、どういふものかといふこの慰めらしい言葉も、死に行く女の心には、  
何の効めもなかつた。女は、頭を振つて孩兒の方へと手を差し出した。

「女は、頭を振つて孩兒の方へと手を差し出した。女は孩兒の額へ熱烈に冷たい白い唇を押しつけた。自分の顔を手で  
撫でるやうにし、もの狂ほし氣に周圍を見廻し、身慄ひし、ぐたりとなつて——死んでしまつた。醫  
者と看護婦は、女の手や胸や、額を摩擦した。が、血はもう常久に止まつてしまつた。

「もうどうも仕方がない。ミセス・シンガミー」  
たうとう醫者がさう言つた。

「おゝ。本當に可愛さうに。もう何うにもね。」

看護婦はさう言ひながら、孩兒を取り上げようと身を踞めて、枕の上に着ちてゐた緑の罎の栓の  
コルクを拾ひ上げて、

「あゝ、可愛さうに」

「孩兒が泣いても、私を呼びに来るには及ばんぜ、看護婦さん」

如何にも緩るゝと手袋をはめながら醫者は言つた。

「どうも、大分厄介だらうと思ふね。餘り泣くやうなら、少し粥でもやつて置くんだね」

帽子を被り、戸口へと行きながら、寢臺の側で止まつた。

「なか／＼いゝ器量の娘だつたんだが。一體何處から來たのかね」

「昨宵連れて來たんですよ、監督さんの命令でね。街路で倒れてゐたんださうですよ。靴がボロ／＼  
になつてたさうですから、可なり遠くから歩いて來たものでせう。何處から來て、何處へ行く積りだ  
つたのか、誰も知つてゐるものはありませんわ」

醫者は屍骸の上へと身を屈めて、その左の手を持ち上げた。

「あゝ、よくあるやつだ」

頭を振つて、

「結婚指輪が無いね。あゝ。お寢み」

醫者は夕食を食ひにと、家の方へ歩み去つた。看護婦は、もう一度緑の罎からあほつて置いて、暖

爐の前の低い椅子に腰を下して、孩兒に着物を着せ始めた。

若いオリヴァー・ツイストの場合は、着物といふものゝ力が、何れ程大いなるものであるかといふ事を示す絶好の實例であつた。それまで彼の身體を包んでゐたものは、一枚の毛布きりであつたがそれに包まれてゐる間は、彼は貴族の孩兒であるか、乞食の孩兒であるか、どちらとも分るものではなかつた。何んな高飛車に物を定めてしまふ高慢な男がやつて來ても、只一ト眼見ただけでは、この孩兒が社會の何ういふ階級に本來屬すべきものであるかを定めてしまふことは、なかく出來ることではなかつたらう。しかし、今オリヴァーが、度々使はれたので黄色くなつた古いキヤラコの着物で包まれて終ふといふと、もう彼の身分はしつかりと定められてしまつた。即ち彼は直ちに教區保育の孩兒——救貧院の孤兒——賤しい、食物もロクに當てがはれぬ厄介者の位置へ落ちてしまつて、生涯どこへ行つても、打たれ、蹴られ——誰からも輕蔑され誰からも憐れられない身分になつたのであつた。

オリヴァーは盛んに泣いた。だが、若し、彼にして、彼が教會番人や、監督達のなすが儘に任せられた孤兒だといふことを知り得たのであつたら、多分彼はもつと聲高く泣いたであらう。

## 二、孤兒預り所

それからの十月程の間といふもの、オリヴァーは、全く組織立つた欺慥の犠牲にされてゐた。彼は勿論、人工榮養で育てられた。幼兒の榮養が足りないといふことは、救貧院の役員から教會區の役員へと報告された。教會區の役員は又救貧院の役員の資格を以つて、院内の住居者でオリヴァーに榮養と慰藉をば授け得べき女性があるや否やを、救貧院役員へ照會したが、救貧院役員が謹んでさういふ女性のないことを答ふるに至つて、教會區役員は満場一致で、しかも、慈悲深くも、オリヴァーを「預ける」ことにしてしまつた。言葉を換へて言へば、その市から三哩ばかり離れたところに、救貧院の分院とも見るべきものがあつて、其處では、一人の老女の監理の下に、何時も二三十人の孤兒が床の上を轉げ廻つてゐるのであつたが、其所へオリヴァーを預けるといふのであつた。

その孤兒一人頭の入費は一週六片半といふのであつたから、それだけの錢では、幼兒は皆不快になるくらゐにまで満腹させられ得る筈であつたのだが、その老女は世智にも經驗にも長けた一筋縄ではいかぬ女であつたので、幼兒等には何れだけにすればいいものであるか、何うすれば何れだけが自分の利徳になるかといふやうな點をば詳細にはつきりと知つて居つた。で、老女は幼兒等の費用の大部分をば自分の懐中へ入れてしまつて、幼兒等の諸費用を本來の高よりグツと切り詰めたのだ。詰まり、さういふ風にして、この老女は、物の下の深所の先きに、なほ一層の底の深所があるものだといふことをば發見したのであつて、自身が其所で偉大なる實驗派哲學者であることをしめしたわけであつた。

昔時或る實驗派哲學者があつて、馬は何も食はずに生きてゐることが出来るものだといふ學説をば

唱導し、馬が一日に薬一本で生きてゐられるといふところまではその學説を證明し、今一步で馬は全く何も食はずに勢ひ好く飛び跳ねることのできる動物であるといふ生きた實例をば何等の疑點なく世上に提示することができる筈であつたのだが、惜しいかな、その馬は空氣といふ飼料の最初の旨さをば味はひ得るに先だつこと二十四時間にして、バツタリ死んでしまつたといふ話は、誰でも知つてゐるであらう。運悪くも、オリヴァー・ツイストの世話を依託された女性の實驗哲學にあつても、大抵何時もこの馬の運命と同じやうな結果が老女の方法の實行には伴ふのであつた。即ち、一人の幼児ができるだけ最も榮養の少い食物のできるだけ最も少い量で生存し得るやうに自ら處置することができた丁度その刹那に、意地悪くも、十中八半ぐらゐの割り合ひで、その兒は榮養不良とか、感冒とかで倒れるとか、付き添ふ者がなかつたがために火のなかへ落ちるとか、運悪くも何うかして半窒息になつてしまつたとか、いふやうな事が起つて、さういふ場合には、何時でも、哀れた幼ない者どもは大抵彼の世へと喚ばれて行つて、其處で、この世では名も顔も知らなかつた父親たちの膝の下へと集められてしまふのであつた。

時々寝臺掃除の時に幼児のあることを忘れて、教會區の幼児を押し潰してしまつたとか、家の洗ひ日であつたがために幼児が都合悪くも煮湯のなかへ落ちて、大火傷で死んだとかいふやうな場合には、尤も、洗ひ日に似寄つたやうなことは此所の幼児預り所では極く稀有であるので、火傷の場合には先づ餘りない事であるのだが、さういふ場合には、何時にもない一般の興味を惹く検屍裁判が開かれ、陪審官は面倒な審問をしようと思ひだし、教會區の住民は住民で、反抗的に詰問書に署名はするにはする。けれども、權威者に對するさういふ干犯の行爲は、醫者の鑑定と教區吏の證言で一と堪りもなく壓倒されてしまふのだ。詰まり、醫者の方は何時も幼児の屍體を切り開いて見るが、中には何もない、(物をロクに食はせてないのだから、それは先づ大抵腹のなかは空虚であるべきはずである)それから教區吏の方はといふと、これは何時も變らず、教會區の人々が教區吏の口をとほして言はせたと思ふ通りの證言をする。教會區の人々は皆自分の區の體面ばかり重んじてゐるのだから、事實通りの證言などを誰も要しはしないのだ。幼児虐待といふやうな事實はこの教會區には決してないといふ證明がよし表面だけでも立てばそれで宜しいのであつた。その外、教區委員が幼児預り所へ定時の視察をすることになつてゐたが、何時もその前日に教區吏をやつて自分たちの翌日行くことを知らせるのであつた。だから、委員たちが視に行つた時には、幼児等は何時も小綺麗なのだ、誰が見てももうそれで澤山であつた譯だ。

かういふ育兒所の方法が、極く非常な盛な收獲を齎らすものだと誰も思はぬであらう。オリヴァー・ツイストは九回目の誕生日を迎へたが、顔の蒼い瘡せた兒童で、身長も幾らか低く、胴廻りも餘程細かつた。が、天然か、遺傳か、オリヴァーの胸には善い確乎した元氣が植ゑつけられてゐた。この育兒所の食ひ物の少なかつたことのお蔭でもあらうが、オリヴァーの胸の内はさういふ元氣が膨脹するだけの十分な餘地があつた。で、或ひは、オリヴァーが九回目の誕生日をさへ迎へることがで

きたのは、さういふ事情のお蔭であつたかも知れぬのだ。が、そんな事は何うでもいゝとして置いて、とにかく、それはオリヴァーの九回目の誕生日であつて、彼は他の二人の若い紳士（幼児のこ）と共に特に選び出されて、石炭貯蔵の穴倉で、その誕生日を祝つてゐたのだ、詰り、その三人の児童は、大膽不敵にも腹がすいたなどと言ひだした罪によつて、散々打ちのめされた後で、その穴蔵へ閉ぢ籠められてゐたのであつた。ところが、丁度その時、家の主婦のミセス・マンの眼に、庭門の網代戸を押し開けようとしてゐる教區吏ドンブル氏の姿が忽然として入つたのだ。

「あら、まア、バンブルさんですわねえ」

ミセス・マンは如何にも嬉しさを装つて、窓から、顔を突き出して言つて置いて、室内の方へは極く小聲で、

「それ、スウザンや、お前、直ぐオリヴァーとあと二人の頑童共をさ、早く二階へ引きずつてつて、綺麗に洗つておくれよ、さ早くさ」

それから、バンブル氏の方へ向いて、

「あら、まア、嬉しいですわねえ。何うもまア好くいらしつてくださいましたわね、まア、ほんたうに」

ところが、バンブル氏は肥つた短氣な男なので、ミセス・マンのお世辭たらんくの言葉を耳にも掛せず、開かない網代戸を、揺ぶつたり、蹴たりしてゐた。

もうそれまでには児童の始末をつけさしてしまつたので、十分安心したミセス・マンは家のなかから駆けだして行つて、

「あら、まア、あたし、何うしたらいいでせう。ほんとに何うしたらいいでせう。児童たちが大切なんで、門をなから締めて置いたのを、すつかり忘れてしまつてましたわね。さア、まア、お入りください、さア、すつとお入りください、バンブルさん、さア何うぞ」

いかな無愛想な教區番人の心でも和げ得るやうなこの愛嬌たつぶりの挨拶でも、この教區吏ハンブル氏の不機嫌は直らなかつた。

「これ、ミセス・マン、教區の役員が、教區の孤兒に就いての用務で参つた時に、それを庭戸の外へ締め出して待たして置くのは、無禮な怪しからんことだとは、あんた思ひなさらんかな？」ミセス・マン、あんたは、教區の雇員で、手當を受けてゐなさらんことを忘れさしやつたかな？」

バンブル氏は、杖をしつかり握つて、さう言つた。

「イエ、それはもう、バンブルさん、あたしは、ほんとに、貴下、貴下をお好き申してます。可愛い児童たちに、貴下がおいでなさることを話して聞かして居りましたんですわ」

ミセス・マンは、極くうやくしい態度でさう答へた。

「あア、あア、ミセス・マン。まア、それはあんたの言ふ通りかも知れん。ともあれ、家内へ案内さつしやい、わしは用務で來ましたで、話もありますでな」

バンプル氏も、ずつと静な聲になつた。

ミセス・マンは、教區吏をば小さい客間へと案内した。そして、兒童の病氣の時に、薬に混ぜるのだがと言つて、ジン酒をバンプル氏に差めた。バンプル氏は、水を割つたジン酒を啜りながら用談を始めた。

バンプル氏は柔皮の手帳を出して、

「さて、そこで、用事なんぢやが——オリヴァー・ツイストといふ名で、假洗禮を受けさせたあの童は、今日丁度九歳になりましたわい」

「ほんとに可愛さうな童ですわ」

と、ミセス・マンが、エプロンの隅で左の眼を擦り赤めながら、言を挾れた。

「初めは十磅、後ではそれを二十磅に増して賞金を懸けたですわい。さういふ風にこの教會區の方で、最高の努力をしたですけれども、彼童の父親も、母親の住居も、名も、身分も一切分らんぢやつた」

それで、オリヴァー・ツイストといふ名は、バンプル氏は、無名の孤兒に名を附ける時に、何時もABC順で附けるので、オリヴァーの番が丁度Iの番に當つたので、バンプル氏が、ツイストと名附けたといふのであつた。

「あら、まア、貴下ほんとに文學者でいらつしやいますわね」

ミセス・マンはさう褒めそやした。

「いや、いや」

そのお世辭でひどく満足したらしい教區吏は、

「さうかも知れんです。それはさうかも知れんですわい、ミセス・マン」

バンプル氏は、そこでジン酒を飲み終つて、それから話しを續けた。それは、オリヴァーはもうこの育兒所に置く年齢を越えてしまつてゐるので、役員會は、オリヴァーをば救貧院へ連れて歸らうといふことに決した。それでバンプル氏自身が、オリヴァーを伴れにとやつて來た。で、直ぐ、その童をバンプル氏の前へ連れて來いといふのであつた。

「直ぐ連れて參るでございますよ」

さう言つて、ミセス・マンは、オリヴァーを伴れにと部屋を出た。オリヴァーは、もう此時は、彼の顔や手をべつたり蔽つてゐる垢や埃の外皮をば、一度の洗ひでこそげ落すことのできるだけ落さされて、その所謂恩人の主婦に伴れられて、バンプル氏のある部屋へと入つて來た。

「旦那にお辭儀をしない、オリヴァー」

さうミセス・マンが言つた。

オリヴァーは、椅子に腰掛けてゐるバンプル氏と、卓子の上のバンプル氏の船底の帽子の、丁度間の所へ向けにお辭儀をした。

「わしと一緒に来るかね、オリヴァー」  
さう言つたバンブル氏の聲には、威儀嚴然たるものがあつた。

オリヴァーは、誰とでも喜んでこの家を出ると言はうとしたのであつたが、その時、ひよいと見上げると、教區吏の掛けてある椅子の後へと廻つたミセス・マンが、恐ろしい怖い顔付で、オリヴァーに向つて拳固を振つてゐるのが眼に入つた。オリヴァーは、そこで本當のことを言つては不可ないのだといふことが直ぐ分つた。拳固は度々身體に當てられてゐたので、その意味は直ぐに分るやうになつてゐたのだ。

「伯母さんも一緒に來て呉れるんですか」

哀れなオリヴァーは、抜からずさう訊ねた。

「いや、伯母さんは行けない。だが、時々お前に會ひに來てくれる」

バンブル氏の答へはさうであつた。

オリヴァーに取つては、ミセス・マンが會ひに來てくれやうがくれまいが、別に大した慰めになるのではなかつた。けれども、彼は幼いとはいひながら、この家を出る別れが如何にも悲しいといふ感情を装ふだけの智慧は十分あつた。オリヴァーに取つて、眼に涙を出す位のことは何でもないことであつた。何時でも泣きたいと思へば食物もロクに貰へないこと、この頃の虐待とを思ひ出しさへすればよかつたのだ。オリヴァーは全く本當に泣く事ができたのだ。ミセス・マンは、オリヴァーを幾

度となく抱き上げた。そして、オリヴァーに取つて尙ほ一層有難いことには、パンの幾片かに、バターを添へて渡してくれた。これはオリヴァーが救貧院へ行つた時に、餘り腹が減つてゐて物を食ひたがると、自分の家で、兒童に食物をロクに與へないといふことが、發覺しては大變だと思つたからであつた。手にパンの片を持ち、頭に小さい鶯色の布の教區帽を被つて、オリヴァーは、彼の幼年時代の暗黒の中で、一つの親切な言葉さへ聞かず、一度の親切な顔付さへ向けられなかつたその悲しい家では、バンブル氏に伴れられて出た。で、そんな家であつたけれども、家の扉が彼の後で閉まるといふと、幼童らしい悲しみの苦しさにわつと泣きだして終つた。彼が今別れて行く不幸の中での小さい友達、賤しい哀れな者どもであつたけれども、オリヴァーが生れてから持つた遊び友達といふのは、さういふ者ども限りであつた。今、それらの友達にさへ別れて、たつた獨り、大きい廣い世間へ出るといふ何んとも言へぬ淋しい心持が、茲で初めてこの幼童の心の底へと沈んで行つたのだ。

バンブル氏は大股で歩いた。小さいオリヴァーは、バンブル氏の金糸で膝つた袖口を掴んで、チヨコチヨコに走りに附いて行きながら、三四丁行く度に「もう直きなのか」と、尋ね尋ねした。その度にまたバンブル氏は、極く短い素氣ない返辭をした。ジン酒のお蔭で、一時機嫌好くなつてゐた心持が、もうすつかり消えてしまつて、バンブル氏は又ふたゝび元の無愛さうな教區吏に戻つてしまつたのだ。

救貧院へ着くと、バンブル氏はオリヴァーを一人の老女の手に渡して、何處かへ引つ込んでしまつ

だが、纏まとて十五分も経たぬうちに、即すまち、オリヴァーが、パンの二つ目の片を食くひ了しまらないうちに、パンブル氏は又また出て来て、それは役員會議やくゐんかいぎの晩ばんなので、役員會やくゐんかいの命令めいれいで、オリヴァーに其處そこへ出ると言いふのだと言いふのであつた。

英語えいごでは、役員會やくゐんかいのことをボオドと言いふ。即すまち日本の言葉ことばのボオド（黑板こくばん）と同じ字なのだ。で、オリヴァーは、それまでは板いたのボオドしきや知らなかつたので、今生いまきたボオドといふものは一體たいどんなものであるのか、どうも分わからず、さういふものがあると聞きいてひどく驚おどき、笑わらつていゝものか、泣ないていゝものか全く分わからなかつた。けれども、そんなことをもつとよく考かんへる暇ひまもあらせず、パンブル氏は、オリヴァーに眼めを覺さす爲ためにと、杖つゑでオリヴァーの頭あたまをコツンと叩たたき、尙なほしやんと振ふるまはせようと、頭あたまの後うしろをもう一つ叩たたき、後うしろへ附ついて來こいと言いつて、白塗しろぬりの壁かべの大きな部屋へへとオリヴァーを伴つれれこんだが、其所そこには、八人はちにんから十人程じゆにんほどの肥ふつた紳士しんし達が、卓子ていぶるの周圍まわりに坐すわつてゐた。上座じやうざの所ところに、他の席せきよりは少し高たかい肱掛ひぢかけ椅子いすに、ひどく丸まるい赤あかい顔かほの殊ことに肥ふつた紳士しんしが腰掛こしかけけてゐた。

「役員會やくゐんかいの方々かたがた（ボオド）にお辭儀じぎをしる」

さうパンブル氏が言いつたので、オリヴァーは眼めに溜たまつてゐる二三粒つよの涙なみだを拂はらつて、ボオドがあるかと、そこを見廻みまわしたが、ボオドは無なかつたが、卓子ていぶるがあつたので、運好うんよくくそれに向むかつてお辭儀じぎをすることができた。

高たかい椅子いすの紳士しんしから名なを訊きかれたけれども、そんな偉えいらさうな人々ひとびとが大勢おほせあるなかへ、不意ふいに呼よび出だされたのであり、パンブル氏しんしからは又頭またあたまを一つコツンとやられたので、オリヴァーは泣なきだして、オド／＼してよく返辭へんじがでなかつた。それを見ると、白直衣しろぢよつきの紳士しんしが、オリヴァーは白痴ばかなのだと言いつた。

「小童こども、これ。お前は孤兒こじだといふことを知しつて居をるぢやらうな？」

高たかい椅子いすの紳士しんしがさう言いつた。

「孤兒こじつて何なんですか」

哀あはれなオリヴァーは尋たづねた。

「この小童こどもは白痴ばかだ——わしの思おもつた通りだ。」

さう白直衣しろぢよつきの紳士しんしが言いつた。

最初さいしよに口くちを出だした紳士しんしは、

「しいッ」

と言いつて、

「お前は、お父ちちさんもお母ははさんもなくつて、教會區けうかいくのお蔭かげで育そだてられたといふことを知しつて居をるぢやらうね。さうぢやらう？」

「さうです。」



オリヴァーはひどく泣きながら答へた。

「何で泣くのだ？」

白直衣の紳士が尋ねた。この人には、オリヴァーが何故泣くのか不思議で堪らなかつた。何でその小童が泣くことがあるのだらう？ この人には、オリヴァーの泣く心持が少しも分らなかつたのだ。

「毎晩祈禱を上げなさい。お前に食物をくだされ、お前の世話をしてくださる方たちの爲に祈りなさい——基督教徒らしくなさい」

もう一人の紳士が濁聲で言つた。

「へえ」

オリヴァーは吃りながらさう言つた。最後に言葉を出した紳士の言つたことは、自分では氣が附かなかつたらうが、全くその通りであつた。若し、オリヴァーが、彼に食物をくれ、彼の世話をしてくれ、言葉を換へて言へば、彼に食物をくれず、彼の世話もしてくれなかつた。人々の爲に祈つたのであつたらう、オリヴァーは至極の基督教徒、しかも、又驚くべく立派な基督教徒らしくあつたであらう。だが、オリヴァーは、誰も彼に祈禱を教へてくれた人がなかつたので、祈りなどはしなかつたのだ。

そこでオリヴァーは、翌朝六時から起きて墳塚を造るやうにと言ひ附けられて、教區吏の指圖で低くお辭儀をして、大きな院部屋へと急いで行かれた。そこで、オリヴァーは、粗末な硬い寝臺の上で、泣き寝入りに寝入つてしまつた。これは英國の慈悲ある法律の何といふ好き實例であらう。

貧者さへ寝さしてくれるのだ。

オリヴァーはさういふ風に何も知らずに寝て終つたが、役員會は丁度その日に、或る決議をして、それが、オリヴァーの將來に大影響を及ぼすことになつた。

その役員會の紳士達の如き、極めて賢明にして、哲學的な人々から見ると、救貧院といふものは、貧民が其所にはひつて、何もせず寝て、食つて、茶を飲んで、面白可笑しく暮らせる飛んだい、樂士であるのだと思はれた。そこで、貧民にさう旨いこと許りはさして置かれたいといふ考へから、一つの規則を設けた。即ち、それは、凡ゆる貧民に對して、救貧院へ入つてそろくくと餓死せしめられるか、外に居て忽ちに餓死するか、どちらかその一つを擇ぶの自由を與へた。流石に自由を貴ぶ英國の紳士達で、貧民にさへさういふ自由を與へたのだ。決して強制などをするのではなかつた。そこで、さういふ規則の結果として、規定の食事は、一日三度とも、薄い粥で、一週に二度玉葱を一つ添へ、日曜日には半斤のパンをつけることになつたのであつた。これ等並びにその救貧院の處置に就いては、多少の意見もあつたであらうが、若し救貧院といふものがなかつたなら、この市の貧民を一人一人救助する教會區の負擔はどれ程になるか分らなかつたのであるから、救貧の負擔がなるべく小額で濟む限り、院に收容された貧民が、朝から晩まで水ばかり飲まされてあやうが、三度三度粥ばかりしきや食はされなからうが、そんなことは公衆の一向構つたことではなかつた。公衆は只救貧の負擔

の増すことばかりを恐れたのだ。

オリヴァー・ツイストが救貧院へ伴れて來られてから、最初の半年の間は、この新規則が十分に強行された。其新規則の結果、死者の数がずつと多くなつて、葬式の費用がぐつと増し、それから、一二週間も粥を食はせると、在院者の體軀がぐつと瘦せてしまつて、着物がダブ／＼になるので、それを取り替へるなどの費用が加はるといふ風で、最初のうちこそ金はなか／＼かかつたのであるが、在院者の體軀が瘦せるとともに、在院貧者の数が餘程少くなつたのであるから、役員會は大喜びであつた。

小童等の食堂は、大きな石造の廣間で、一つの端に銅の欄干が附いてゐて、そこから、エブロンを掛けた食堂長が、一人か二人の女に手傳はせて、粥を柄杓で盛り分けてやるのであつた。どの小童も粥碗に一つばいきりで、それ以上はどんなことがあつても貰へなかつた。尤も、大きな公共の祝典といふものでもあれば、粥の他に、パンの二オンスと四分の一は添へられることがあつた。男の兒といふものは、大抵非常な食慾を持つてゐるものだ。オリヴァー・ツイストと、彼の仲間たちは、そろそろ餓死して行く苦しみをば三ヶ月に亙つて受けた。で、もうみんな腹が減つて堪らなくなつたので、みんな集つて會議を開いて籤を引き、その籤に當つたものが、その晩の夕食の時に、食堂長の前へ行つて、粥をもう少しくれと頼むことになつたが、その籤がオリヴァー・ツイストに當つた。

その晩みんな食堂へ出て、粥が何時もの通り一口で無くなつてしまふと、小童等は嘔き合ひ、オリヴァーに向つて眼交せをし、直ぐ隣りの小童等はオリヴァーを突つついた。幼童ではあつたが、オリヴァーは腹が減つてゐるが爲に絶望的になり、悲しさの爲に向う見ずになつてゐたので、卓子から立ち上ると、腕と食匙を手持つて、食堂長の前へと進んで行つて、吾ながら自分の大膽さに少し驚いた風で、

「何卒、あなた、もう少しください。」

食堂長は、肥つた丈夫な男であつたが、それを聞くと、眞つ蒼になつて終つた。彼は一寸の間、その小さい謀叛人を驚いて呆れ返へつて茫然した風で凝視めて、それから欄干を押へて、身を支へた。

「何に」

食堂長は、やつと弱々した聲で言つた。

「どうぞ、あなた、もう少しください。」

食堂長は柄杓でオリヴァーの頭を一つ喰はし、腕を捉まへて羽翼締めにし、大聲を擧げて院長の教區吏を喚んだ。

役員會は丁度何にか重大な會議中であつたが、そこへバンプル氏が大周章に周章で、飛び込んで來て、高椅子の紳士へと話し掛けた。

「リムキンスさん、貴下、どうぞ一寸。オリヴァー・ツイストが、もつとくれと申したです。」  
誰も彼もがはつと驚いた。慄然とした様子が誰の顔にも現はれた。

「何に。もつとくれ。」

「さうリムキンス氏は言つて、

「まア、落ち着きなさい、バンブル。判然言ひなさい。それでは、まだその上、彼奴は食制で定つてある夕食を食つた後で、もつとくれと言ふたのぢやね？」

「さう言ひましたぢや。」

バンブルはさう答へた。

「あんな奴は、行末屹度絞罪になる。確に絞罪になる。」

さう言つたのは白直衣の紳士であつた。

この預言者の紳士の説に異議を唱へるものは誰もなかつた。熱心な會議が開かれた。オリヴァーは直ぐ禁錮を命ぜられた。次の朝になると、教會區の手からオリヴァーを引き取つてくれる人には、誰にでも五磅の賞金を與へるといふ揭示が門の外へ貼り出された。言葉は換へて言へば、何んな商賣、何んな職業に對してでも、年期小僧を要する男にでも、女にでも、先方さへ承知なら、オリヴァーに五磅附けてやつてしまふといふのであつた。

### 三、煙突掃除人

オリヴァーは、腹が減つてゐるから、もう少し食物をくれといふやうな、さういふ怪しからん童神的な罪を犯したといふので、さういふ惡魔に憑かれたやうな小童は、その儘にはして置かれなといふ役員會の智慧と慈悲によつて、暗い部屋に一週間程一人閉ぢ籠められてゐたのであるが、或る朝のこと、煙突掃除人のガムフィールドといふ男が、家主からひどく催促されたした家賃の滞りを拂ふ方法をいろ／＼と思索しながら、「本街」をば通り掛つた。ガムフィールドは、自分の収入をどれ程一生懸命に計算して見ても、現に入用の金高にはどうしても五磅以上、不足するのであつた。で、頭の中で無暗にいろ／＼考へたり、引いてゐる驢馬を毆りつけたりしながら、救貧院の前を通り越さうとしたが、その時門の貼り出しが眼に入つた。

これも車に積んだ二袋の煙煤の荷を下したら、甘藍の莖の一つか二つも貰へるだらうがななどと思ひながら、飼主の命令などはきかずに、勝手に歩いて行く驢馬をば、頭を毆つたり、手綱を把つて口をしゃやくつたりして、十分たしなめて置いてから、ガムフィールドに、貼り出しを讀みにと門へ行つた。

白直衣の紳士が、背後で手を組んで、門の所に立つてゐた。ガムフィールドと、驢馬との争鬭を見てから、ガムフィールドが、貼り出しを讀みにやつて來るといふと、紳士はほくそ笑みをした。それは、ガムフィールドが、オリヴァー・ツイストには持つて來いといふ打つつけの主人であるのだと見て取つたからなのだ。ガムフィールドは丁度五磅だけ欲しい所であつたので、貼り出しを讀むと莞爾々々とした。その金に附いてゐる男の兒はといふと、ガムフィールドは、救貧院の食制のど

ういふものであるかをよく知つてゐたので、どんなものをどれ程少く食はせても一向差支へはない。標準燧爐で炊けるだけで二人の食物は十分間に合ふのだと思つたのだ。そこで初めからしまひまで貼り出しの文面を二度繰り返して讀んでから、如何にも恭々しく、自分の毛皮の帽子に手を掛けて、白直衣の紳士に話し掛けた。

「この幼童を、教區ぢやア年期に出しなさらうといふのでがすかい？」

「あゝ、お前、何うなんだね。」

白直衣の紳士は、愛想のいい笑顔を見せた。

「立派な、ちやんとした、煙突掃除の職で、かるい心もちのいい、商賣を仕込みなさらうといふのならばね。」

ガムフィールドは、さう言つて、

「小僧を一人欲しい所なんだで、わしが引き受けてもようがすが。」

「まア入りなさい。」

白直衣の紳士がさう言つた。さういふ風で、ガムフィールドは例の會議室へと伴れ込まれた。ガムフィールドが、其所でもう一度自分の希望を述べると、

「どうも嫌な商賣ぢや。」

さうリムキンス氏が言つた。

「これまでにお前の方では、煙突で窒息した小童が三四人あつたぢやアないか。」

さうもう一人の紳士が言つた。そこで、ガムフィールドは、小童等は、なかく片意地で怠け者で、煙突に入つたが最後、なかく下りてなんぞ来るものではないので、それを下りて來させるために、一寸下から藁火を焚いて脅すのであるが、その時つい藁が濕つてゐると、煙ばかり強く立つて、つい間違ひが出来るのだ。しかし、足を焼く位で、煙突から下りて來させるのであつたら、それは寧ろ親方の慈悲なのだといふやうな説明をした。しかし役員たちは、小聲で相談をし始めて、時々「費用を節限する」「よく出納表を見なさい」「印刷した報告を出さにやアならん」といふやうな言葉が聞えたのであつたが、聽て嘔き聲は止んで、役員は威儀を整へてそれらの座に着き、そこで、リムキンス氏が言つた。

「吾々はお前の希望に就いて相談したんぢやがどうも賛成が出来ん。」

「とても駄目だ。」

他の役員たちが言ひ足した。

ガムフィールドは、もうそれまでに三四人の小童を怪我で殺した。といふ非難を受けてゐたので、彼は役員會がどうしかした不思議な氣まぐれで、そんな無關係な事件をば、此處で問題にしようとしてゐるのかも知れぬと思つた。で、役員たちの掛け合ひ事の場合の何時ものやり方から見て、それもありさうなことだと思つた。けれども、自分の身に係るそんな嫌な噂を、此所まで又喚び起されては

堪らぬと思つたので、彼は手で帽子を振りながら、卓子の所から、そろりと離れた。

「では、わしぢやアその兒は駄目ですか、旦那がた。」

ガムフィールドは、戸口の所で立ち止つて、さう言つた。

「いや駄目ぢや。」

リムキンス氏が答へて、

「兎に角どうも嫌な商賣ぢやから、お前は吾々の方の懸賞より幾干か少い額で承知したらよからう、と思ふんぢやがね。」

ガムフィールドの顔色は、明るくなつて、ヅカ／＼と卓子へ戻つて來た。

「幾干出るのがすかい、旦那方。ねえ。わしは貧乏だから、さう虐めねえでくださいませ。いつてえ幾干出るのがすか？」

「さうさな、三磅十で澤山ぢや。」

リムキンス氏が言つた。

「十志だけ餘計だ。」

白直衣の紳士がさう言つた。

「もし、ねえ。四磅としてくださいませ、旦那がた。四磅としてくださいませ、わしがすつかり引き受けるでがすよ。さアどうぞ、さうしてくだせえ。」

「三磅十」

リムキンス氏は斷乎として繰り返へした。

「ねえ、では歩み寄りとしやせう、旦那がた。三磅十」

「これ以上一文も駄目だ」

それがリムキンス氏の斷乎たる答へであつた。

「それぢやア餘り残酷でがすよ、旦那がた」

と、ガムフィールドが折れたした。

「へッ、何にを馬鹿な。金錢なんぞ一文も附かんでも、安過ぎるんだ。何故、彼の兒を伴れて行かんだ、馬鹿な男だ。お前には丁度い、兒ぢやアないか。何に、そりやア、時々棒のいることもあるだらうが、それは、彼兒にはためになるといふものだ。食ひ物だつて幾らか、るものかな、生れてから、空腹には慣れきつてる奴なんだからな、アハハ、」

さう言つたのは白直衣の紳士であつた。

ガムフィールドは、卓子の周囲の人々の顔をば口惜しさうな意地悪るい顔つきで見廻したが、誰の顔にも微笑が表はれてゐるので、自分も到頭莞爾としてしまつた。其處で、取り引きが成り立つた。バンブル氏が言ひつけられて、オリヴァーを伴れ、年期證文などの書類を持つて、認可の署名を取るために、その午後司法官のもとへと行くことになつた。

それがために、オリヴァーは、彼に取つては意外にも暗い部屋から引き出され、清潔なシャツは着せられるし、バンブル氏が手づから、一と碗の粥へ祝日の分のパンの二オンスと四分の一を添へて持つて来てくれるといふ風であつたので、オリヴァーは自分は後で何にかの用のために殺されでもするのではなからうかと思ひだして、ひどく泣きに泣いた。

バンブル氏は、オリヴァーのやうな孤兒に對して、兩親となつて、親切に育て、くれた人々が、今三磅十志といふやうな大まいな入費も厭はずに、オリヴァーをば、世間に立つて一人前の男になるやうにと、年期の口を拵へてくれたので、何時までもその恩義は忘れてはならぬと言ひきかして、「さア、これ、オリヴァーや。上衣の袖口で眼を拭きなさい。さう粥のなかへ涙を落しては駄目ではないか。そんな馬鹿なことをしてはいかんわい」

それは成る程さうに相違なかつた。粥はもうそれで十分な程水澤山なやつであつたのだから。

司法官の役所へと行く途すがら、先方へ行つたら、何んでも構はないから如何にも嬉さうな顔をして、役人から、年期に入りたいのかと聞かれたら、何うぞさうして貰ひたいのだと答へなければいかぬのだぞと、バンブル氏から言ひきかされて、オリヴァーは屹度さうすると承知してしまつた。若しさういふ點で少しでもやりそくなつたら、何んなことをされるか分らないぞと、バンブル氏から脅しつけられたのだから、オリヴァーは、何にもか言ひつける通りにすると約束するより外はなかつたのだ。役所へ入ると、バンブル氏は、オリヴァーをば獨り小さい部屋へ入れて置いて、迎ひに来るまで其所にゐると言ひつけて、何處かへ行つてしまつたが、半時間程して戻つて来て、戸口から、船底帽を冠つてゐない頭を突き出して、

「さア、オリヴァーや、お前、お役人の前へ出なさいよ」

と、それだけは高い聲で言つてから、直ぐ凄いこは顔になつて、小聲で、

「こりや、悪戯小僧。何んでもわしが言ひつけた通りにするのぢやぞ」

役人の部屋は、戸の開いてゐる次の室であつたが、大きい窓のある大きい部屋であつた。書記卓の彼方には、頭に髪粉をふつた老紳士が二人坐つて居り、一人は新聞を讀んで居り、も一人は、鼈甲縁の眼鏡を掛けて、前にある小さい羊皮紙を讀んでゐた。書記卓の正面の一方の側に、リムキンス氏が立つて居り、もう一方の側には、幾らかでも顔を洗つたガムフィールドが立つてゐた。

眼鏡の老紳士は小さい羊皮紙に向つたまゝで、コクリくと居眠りだした。

オリヴァーがバンブル氏に依つて、書記卓の前へ立たせられてから、一寸其所に間ができた。

「これがその兒でござりまする、閣下」

さうバンブル氏が言つた。

新聞を讀んで老紳士は、寸時顔をあげたが、も一人の老紳士の袖を引いた。それでその後の方の老紳士は眼を覺した。

「お、これがその兒かな？」

「これがさうでござりまする」

バンブル氏は答へて、

「さア、オリヴァーや、司法官にお辭儀をしなさい」

「うん、成る程、煙突掃除が好きなんぢやらうな？」

「いや、もう、好きなどころではござりませんわい。唯もうあこがれきつて居りまするので」

バンブル氏は、好きでないなどは決して言つてはばらぬぞ、といふ意味を知らせるために、オリヴァーをばそつと抓つた。

「是非とも、煙突掃除人になりたいといふのかね？」

さう老紳士が尋ねた。

「いや、もう、明日にでも、他の職にでも致しませうものなら、直ぐに逃げ出してしまひますわい。閣下」

それがバンブル氏の答へであつた。

そこで、司法官は親方になるといふガムフィールドに向いて、儀式的に、オリヴァーを引き受けて十分に保護するかと念を押すと、ガムフィールドは、勿論その通りにすると答へる。司法官は眼鏡越しにガムフィールドの顔を見た。如何にも人相の悪い、残酷な男であることが、あり／＼と現はれてるやうな顔付であつたけれども、年取つた司法官は、もう眼が悪くなり、心も少し老衰してたので、誰にでも分るやうなガムフィールドの悪黨らしい顔付を見分けることができなかつた。

それで、司法官は認可の署名をしようと思つて、眼鏡をしつかりと鼻の上へ掛け直して、インキ壺を捜した。若しその時インキ壺が直ぐ見附つたのであつたら、オリヴァーの運命が立ちどころに決する譯であつたのだが、司法官の老眼では、直ぐ眼の下にあるインキ壺が眼に入らず、それが無い方へ許り眼をやつてキヨロ／＼見廻してゐた序に、ひよいと眼を上げてオリヴァー・ツイストを見た。

その時オリヴァーは、バンブル氏から、脅されたり抓られたりせられながらも、自分の親方になるといふガムフィールドの悪相な、如何にも恐ろしい顔を見ると、何んとしても怖くつて堪らず、ぞつとして慄へ上つてゐたのであつたから、さういふ顔付は、流石に半盲目の司法官の眼にも入らずにはあなかつた。

「これ、小童や」

司法官は書記卓から前へと倚りかゝるやうにして、オリヴァーに聲をかけた。オリヴァーはギョツとした。それは眞理であつた。誰でも聞き馴れぬ音や聲には驚くものであるのだから、そんな優しい聲を聞いたことのないオリヴァーは、さういふ親切な聲に驚かされてしまつたのだ。彼はひどく慄へて泣きだした。

「これ、その兒や」

と、老司法官は又聲を掛けて、

「お前は眞つ蒼な顔で慄へて居る。何うしたのかね」

「小童の側を離れてゐなさい、教區吏」

もう一人の司法官が新聞を置いて、氣を入れた顔付で身を前へ突き出した。

「さあ、その兒、何ういふ譯ぢやか、わしどもに話しなさい。ちつとも怖がるには及ばないから」

オリヴァーは跪づいて、手を握り合せてまた元の通り暗い部屋へ戻され、食物も貰はず、打たれても、若し又人々がさうしたいと思ふのなら、殺されてもいゝのだから、その恐ろしい男（ガムフィールド）へは渡さないでくれと、一生懸命に頼んだ。

「いや、これは」

如何にも威儀嚴然たる様子で手を上げ、眼を上げたバンブル氏は、

「いや、これは、狡猾な腹黒い孤兒は随分見たけれども、貴様のやうな面の皮の厚い奴は初めてだ」

「黙らつしやい、教區吏」

と、その第二の老司法官が言つた。

聞きそこなひではないかと思つたバンブル氏は、

「何んと仰せで御座りましたかな。閣下は、わたくしに何にか仰しやりましたですか」

「左様ぢや。黙らつしやい」

バンブル氏は驚いて茫然としてしまつた。苟も教區吏なるものが、頭から黙れと怒鳴りつけられるなどは、實に途方もないことだ。これでは全て精神的の革命だ。

籠甲縁の眼鏡の老司法官は、その同僚と顔を見合せた。彼は意味あり氣に頷いた。

「吾々はこの書類は認可せん」

小さい羊皮紙を側へ突き捨て、老司法官が言つた。

「私は、私は、ホンの小童の證言ばかりで、吾々役員が不當の行爲を致したといふ意見を、司法官がお持ちにならないやうに致したいと存じまする。」

さうリムキンス氏が吃りながら言つた。

「司法官は、この事件に對して何等の意見も發表する義務はない」

さう第二の老司法官が、聲を勵まして言つて、

「その小童は救貧院へ伴れてかへつて、親切に世話をしてやりなさい。さうしてやらなければならん小童だと思ふ」

さういふ風で、翌朝オリヴァー・ツイストが又「貸し物」に出されること、彼を引き受ける人には、誰にでも五磅を拂ふといふことが、もう一度公衆に告げられた。

#### 四、葬儀屋

名家では、その家の若者が財産があるとか、財産が相續できたとか、若しくは、將來財産相續がで



きるとかいふやうな利益な位置が得られない場合には、その者を航海へ出してしまふのが、極く有りがちな習慣である。救貧院の役員會は、この賢い都合のいい、實例に則つて、オリヴァー・ツイストをば、成るべく不健康な滞通ひの商船へ乗せてしまつたらよからうと相談した。さうすれば、船員などといふものは、随分亂暴な慰みをするさうだから、船長が或る日食事の後で、冗談半分小童を杖で殴り殺すとか、鐵の棒で頭を打ち砕いてしまふとかいふやうなこともあるに違ひない。さういふことにでもなれば、至極結構だといふのであつた。考へれば考へる程、役員會の考へでは、さういふ方法の利益は限りもないやうに見えた。そこで、オリヴァーの處分は猶豫なく海へ出してしまふに限るといふことになつた。

そこで、バンブル氏が、孤兒の船室ボーイを備つたといふ船長か何かを見つけるための問ひ合せをしにとやられて、その結果を報告するために、救貧院へと歸つて來たところで、丁度門口で出會つたのは、誰あらう教區葬式の請負の葬儀屋サワアベリイ氏であつた。

サワアベリイ氏は、脊の高い瘦せた骨節の大きい男で、絲めの出てゐるやうな古い黒い服を着、同じ色の木綿の手編の靴下で、それに釣り合つた靴を履いてゐた。顔付は、笑ひ顔を見せるやうには産みつけられてはゐなかつたが、それでも、職業柄、よく陽氣な笑ひ聲を立てる男であつた。職業柄バンブル氏の方へと歩み寄つて來たサワアベリイ氏の足は、如何にも軽々と上り、顔には何か陽氣な心持があることが現はれてゐて、應じてバンブル氏に親氣に握手した。

「昨宵死んだ二人の女の寸法を計つて來ましたよ、バンブルさん」

「君は今に長者になるぢやらう、サワアベリイさん」

教區吏はさう言つて、葬儀屋が差し出した嗅煙草箱へ、親指と人指し指とを突つ込んだ。その嗅煙草箱は、專賣特許の箱の巧な小さい模型になつてゐた。

「確かに君は百萬長者になる」

バンブル氏は又さう言つて、杖で以つて親しさうに葬儀屋の肩を軽く叩いた。

「さうですかア？」

葬儀屋はさういふことになるかどうか、半承認し半疑つてゐるやうな聲付で言つて、

「何しろ、役員會でお定めの代價は餘り安いですからア、バンブルさん」

「その代り棺桶も小さいからな」

教區吏はさう答へて、偉い役人が笑ふべき丁度さういふ聲にできるだけ近い聲で笑つた。

サワアベリイ氏にもこれはくすぐつたかつた。それは、道理であつた。で、彼は少時は止めどなく笑つた。

「いや、そりやア、バンブルさん」

と、聽て言つて、

「食事の新規則が出てからてえもなア棺が前かたよりやア幾らか狭く淺くなつたけれどもね、されば

と言つて、わしどもの方ぢやア幾らか儲けも見ねえぢやアあられねえ譯さね、パンブルさん。よく乾いた材木が、なか／＼安くねえですよ、旦那。それに、鐵の把手なんざア、みんな運河で、バアミンガムから来るんですからなア」

「うん、うん、どんな商賈でも引け目はあるものぢや。正當の儲けは勿論許さるべきぢや」

「勿論さね、そりや勿論さね。若しこの品か彼の品かで儲けねえとしても、何に、そりやア、長い間にやア何かで埋め合せをするてえものだね、ねえ——ヒ、ヒ、ヒ、」

「その通り」

「だがねえ、パンブルさん。わしの方ぢやア又一つ不利益なことがあるですよ、何にしろ、肥つた奴程早く參つてしまふですからなア。これまでいゝ暮しをしてえて、何年も税(救貧費)を拂つてゐた連中程、院へ來るてえと、眞つ先に參つちまふんでさア、それでね、パンブルさん、寸法が三吋なり四吋なり伸びるてえと、儲けにやア大穴が開くてえものだね。それに、わしなんざア、旦那、家の奴等を食はせなけりやアならねえと來てゐるんですからなア」

パンブル氏は、そこで、その時一番心に懸つてゐた問題を持ち出した。

「時に、あんたは誰か、小僧が欲しいといふ人を知らんかね。院では持ち扱つてゐる形の年期に出したい男童ぢやがね。條件は至極よろしい、サワアベリイさん。條件は至極よろしい」

パンブル氏はさう言ひながら、顔の上の掲示板へと杖を上げて、大きな形のローマ字の華文字で刷つてある「五磅」の二字の上を三度叩いた。

「いや成る程、だが、ねえ、パンブルさん。わしは救貧費も大分出したですよ」

「ふうん、それで？」

「そこでね、まアそれ位は出したんですから、又出来るだけの利益を得る権利があると思ふんでさア、で、それでね、わしがその男童を引き受けませうかね」

パンブル氏は葬儀屋の腕を掴んで院内へと伴れ込んだ。サワアベリイ氏は、役員室へ入つて五分間ゐたきりだが、それで話しが定つてしまつた。

小さいオリヴァーが、その晩役員室へ呼び出されて、その晩から棺桶屋の雑用小僧に行くのであつて、その仕事が嫌だといふとか、又救貧院へ歸つて來るとかするならば、今度は船に乗せて海へ出されて、海へ落ちて死ぬるか、頭を碎かれて死ぬるとかいふやうなことになるんだぞと、言ひ聞かされた時に、オリヴァーは別に悲しいとか、怖いかいふやうな感情を現はさなかつた。で、役員たちは一同同じ考へで、オリヴァーはよく／＼心の頑な、腹黒い小童だと定めてしまつて、直ぐに院を伴れて出てしまふやうにと、パンブル氏に命じた。

何故、オリヴァーが、さう無感情であつたのかといへば、それはオリヴァーが、感情の少い小童ではなかつて、感情のあり餘る程ある小童であつたがためであつた。かういふ小童は、烈しい虐待を受けるといふと、生涯野鄙に魯鈍で、何時も澁つ面をして居るやうな人間にされてしまふもののだが、

オリヴァーも餘程さういふ所が出来てゐたのであつた。オリヴァーは全く黙つて自分の行き先の話を聞いた。そして、荷物といつては、五六寸四角で、三四寸の厚みの鳶色紙の包みにすることのできる程度のものであつたので、持ち運ぶのには何んでもないのであつたが、さういふ荷物を提げさせられて、帽子を眼深に冠り、又再びバンブル氏の上衣の袖口に取り纏つて、その役員によつて苦しみの新たな場所へと伴れて行かれた。

少時は、バンブル氏は何にも言はずにオリヴァーを引つ張つて行つた。バンブル氏は、教區吏がすべき通りに頭を極く眞つ直ぐにして歩いてゐたのだから、オリヴァーに話しかけることはできなかつたのだ。風の強い日であつたので、バンブル氏の上着の裾は吹き上げられ、はためく直衣や、薄鳶色の絹綿天鷲絨の半袴の立派さを見事露出させたのであつたが、小さいオリヴァーは、吹き上げられるバンブル氏の上衣の裾に、すつかり包まれるのであつた。だが、行き先が近くなるといふと、バンブル氏は、オリヴァーが新たな親方に見られる時に、何にも彼もちやんとしてゐるかどうかを、見て置くのが、宜しいと思つたので、オリヴァーを見下して、如何にも親切に世話するらしい風で、

「オリヴァーや」

「へえ」

オリヴァーは低い顔へ聲で返辭した。

「帽子を上へあげて、顔を出して、頭を眞つ直ぐにしなさい」

オリヴァーは言はれた通りにし、空いてゐる方の手の背で眼をこすつたが、バンブル氏を見上げた時に、未だ涙が一滴眼に残つてゐた。バンブル氏が難かしい顔で凝視めたので、その涙がオリヴァーの頬を流れ落ちた。後一粒又一粒と續いた。オリヴァーは涙を止めようと非常な努力をしたが、駄目であつた。バンブル氏の手から、もう一つの手を離して、両手で顔を隠して泣いたが、涙はドンドン流れて、瘦せた骨張つた指の間を抜けて落ちた。

「これ」

バンブル氏はバツタリ足を止めて、如何にも意地の悪い顔付で見下した。

「これ。恩知らずの腹黒い小童も随分あつたが、オリヴァー、貴様は……」

「いゝえ、いゝえ、あなた」

何時もの恐ろしい杖を持つてゐるバンブル氏の手に纏りついて、オリヴァーは啜り泣いて、

「いゝえ、いゝえ、あなた、あたしはよく言ふことを聞きます。ほんたうに、ほんたうにあなたは聞きます。あたしはホンの小さい幼童です、あなた。ほんたうに——ほんたうに……」

「ほんたうになんぢやといふのぢや？」

バンブル氏はひどく驚いて尋ねた。

「ほんたうに、ほんたうに淋しいんです。ほんたうに淋しくつて堪らないんです。誰もがあたしを憎みます。おゝ、あなた、何うぞ、何うぞ怒らないでください」

オリヴァーは手で胸を打つて、眞の苦痛の涙に濡れた顔で同伴の顔を見上げた。

バンブル氏はホンの寸時の間少し驚いた風で、オリヴァーの愍然な途方に暮れた顔付を眺め、皺喰れた聲で二三度フンフン言ひ、「五月蠅い咳」だといふやうなことを呟いてから、オリヴァーに、涙を拭いて温順しくしろと吩咐けた。それからもう一度オリヴァーの手を捉へて、黙つて歩き出した。

葬儀屋は丁度店の窓扉を閉めた所で、葬儀屋には如何にも似つかはしいうす暗い蠟燭の灯で、帳面へ何か記入をしてゐたが、その時バンブル氏が入つて行つた。

「あ、あ、」

葬儀屋はさう言つて、帳面から顔を上げて、言葉の眞ん中で止まつて、

「あなたですか、バンブルさん」

「誰でもない、わしぢや、サワアベリイさん」

教區吏はさう答へて、

「さア。小童を伴れて來ましたぢや」

オリヴァーはお辭儀をした。

「あ、小童はそれですかい、え、？」

葬儀屋はオリヴァーをよく見ようと、頭の上へ蠟燭を上げた。

「ミセス・サワアベリイ、何うか一寸此處へ來てくれないかね、ねえお前」

ミセス・サワアベリイが、店の裏の小さい部屋から出て來て、脊の低い瘦せた押し固めたやうな女の姿を現はした。如何にも亭主を尻に敷きさうな勝氣な顔付の女である。

「ねえ、お前」

サワアベリイ氏は如何にも丁寧にさう言つて、

「これがお前に話した救貧院の小童なんだがね」

オリヴァーは又お辭儀をした。

「まア——」

葬儀屋の女房はさう言つて、

「餘まり小さいぢやないの」

「いや、少し小さいですよ」

バンブル氏は、オリヴァーがそれより大きくないのが、オリヴァー自身自身の咎とがでありでもするかのやうに、オリヴァーを見ながら、答へて、

「何うも小さいですわい。それはさうに相違はござらん。ぢやが、直ちきに大きおほくなりますわい、ミセス・サワアベリイ、直ちきに大きおほくなりますわい」

「そりやアさうでせうよ、あたしどもの食物たべものと飲み物のみものとではね」

女房は怫然ふじつとした風で言つて、

「救貧院の兒童つてもものは、世話はかしゃけて、その割りに、何んの役にも立たないんだから、とかやアないものなのよ。だが、男つてもものは、何時も自分たちの考へばかしい、んだと思つてるんだら、しかたがないわ。さア。お前、骨皮小僧さんや、階下へ下りておいでよ」

さう言つて、葬儀屋の女房は側戸を開けて、オリヴァーをば後から押しやるやうにして、險しい階段を下つて、濕つた暗い穴藏へと伴れて行つた。それは、石炭庫へ部屋の前で、その家では「臺所」と稱へられてゐたが、其所には、ひどく破けた毛糸の靴下に、踵の減りきつた靴を穿いた服装のだから、しのない娘が坐つてゐた。

「これ、チャロット」

オリヴァーの後から躓いて來たミセス・サワアベリイは言つて、

「ツリップに取つてあつた細片をこの兒にやつておくれ。あれは今朝から歸つて來ないから、やらな

いでもいゝんだから、この兒はあれを食はない程贅澤ぢやアないだらうね——ねえ、お前？」

オリヴァーは肉と聞いて眼を光らせ、それを食ひたい念に一生懸命になつて、身慄ひしながら、自分は何んでも食ふと返事をしたので、一皿の硬い片々の肉が彼の前へ置かれた。

肉にも酒にも飽き、血が氷の如く、心が鐵の如くなつてゐる美食の哲學者に、犬さへ見向かないやうな細片に嚙り附いたオリヴァー・ツイストの様子を見せてやりたいと思ふ。オリヴァー・ツイストが飢ゑきつた猛烈な勢ひでその細片を食ひ裂いた慄然とする程のガツ／＼した様子を、さういふ

人に眼のあたり見せてやりたいと思ふ、尙ほそれよりもやりたいと思ふことがたつた一つある。それは、その哲學者をして、その時のオリヴァーと同じやうな食事をさせ、それを旨く味ふことができるか何うか見てやりたいと思ふのだ。

黙つて慄然とした風で、オリヴァーの食事の様子を見て、それからあと／＼のオリヴァーの食慾の程度を思ひやりながら立つてゐた葬儀屋の女房は、オリヴァーが夜食を了つてしまふと、

「さア。もういゝの？」

もうそこらに食へるものは何も無かつたので、オリヴァーは、然うだと答へた。

「ぢやア、此方へおいで」

ミセス・サワアベリイはさう言つて、薄暗いランプを取り上げ、階上へと案内しながら、

「お前の寢床は帳場臺の下なんだよ。お前、棺と一緒に寢たつて構はないだらう、ねえお前？」でもお前が嫌だらうが、何うだらうが仕方がない、他にお前の寢る所と言つてないんだから。さア、早くおいで、あたしはひと晩ぢう待つて、上げる譯にやアいかないからね」

オリヴァーはもう少しも躊躇はずに温順しく、この新たな主婦に隨いて行つた。

## 五、貧民窟

葬儀屋の仕事場に一人取り残されたオリヴァーは、仕事臺にランプを置いて、如何にも怖くつて堪

らぬ心持で、四邊を怖く見廻した。彼よりずっと年上のものでも、オリヴァーのさういふ心持を理解するのは難くならう。部屋眞ん中に拵へかけの棺が、棺臺に載つて居つたが、眼がその方へ向く度びに、何にかその中から怖いものが、頭を持ち上げさうに思はれて怖かつた。壁には同じ形に切つた楡の板がずつと竝んで立て掛けてあつたが、それが又薄暗い中で見ると、手を半袴に突つ込んで、肩を高くして蹲んである化物のやうに見えた。棺板や、楡の木片や、頭の光つた釘や、黒い布の切れつ端が床に散らばつてゐた。帳場臺の後の壁には、葬儀供人が二人極く硬い襟を附けて、大きい側門の所に立つてゐると、遠くの方から四匹の黒馬に輓かれた柩車がやつて来る繪が、如何にも眞物のやうに描いてあつた。仕事場は、空気が籠つて暑く、棺桶の臭ひが籠つてゐた。オリヴァーは寝る毛屑入りの敷物の突つこんである帳場臺の裏の隅は、まるで墓のやうな気がした。

オリヴァーの氣を滅入らしたのは、そんな凄惨な心持ばかりではなかつた。彼は一人で初めての馴れない場所にあつた。誰でもさういふ時には、如何にも淋しく思ふものである。しかも、この兒は、自分のことを思つてくれる友もなければ、自分のほうから思つてやる友もない全く孤獨の身であつた。親しい人に別れたといふ懐しい心持もなく、愛する忘れられない人の顔が思ひ出されるといふのでもない。さういふ淋しい心持が彼の心に強く應へた。彼は如何にも淋しく心細かつた。で、狭い寢床に這ひ込みながら、彼はそれが棺桶であつて、自分がその中に入つて、丈の高い草が自分の頭の上でサラサラと戦いでゐる寺の墓地の地面の下で、古い、深い音のする鐘の音で心持ちをよくされながら、靜

かばいつまでもの眠りに入つてしまふのであつたら、さぞかしよからうと思つたのだ。

オリヴァーは、朝になると、店の戸を外から蹴る音で眼が覺めた。

「開ける、やい」

戸を蹴つてゐる足の持ち主の聲が怒鳴つた。

「へい、只今開けます」

オリヴァーはさう答へて鎖を外し、鍵を廻した。

「手めえが今度の小僧だな、さうだらう？」

鍵穴からその聲が言つた。

「へえ、さうです」

「手めえ幾つだ」

「十歳です」

「ぢやア俺がへえつたらどやしつけてやるぞ」

その聲は言つて、

「どやさねえで置くもんけえ。覺えてろ、貧院小僧め」

さういふ亂暴な言葉には馴れきつてゐたオリヴァーは、その聲の持ち主は誰であつたにしろ、屹度まことに正直にその言葉を實行するといふことに就いては、少しの疑ひも持たなかつたので、慄へる

手で門を抜いて、戸を開けた。

オリヴァーは、鍵穴から聲を掛けたその誰だか分らぬ男は、二三歩離れて日向で身を暖めてゐるんだらうと思つたので、街路を上から下へと見廻した。が、そこには只家の正面の柱の上に登つて、パンの片とバターを食つてゐる慈善學校の男の兒が、懐中小刀で自分の口の大きさにパンを切つて、如何にも手早く口へ押し込んでゐるのがあつた。

その男の兒の他には誰も客が見えないので、軈てオリヴァーは言つた。

「失禮ですが、あなた、戸をお叩きでしたか」

「蹴つたよ」

さう慈善學校出の少年が答へた。

「棺がおいりなんですか」

オリヴァーは何んの氣なしにさう尋ねた。

それを聞くと、慈善學校出の少年は恐ろしく怒つた。そんな風に年長者に向つてふざけたことを言ふやうなら、オリヴァー自身が直きに棺があるやうになるぞと言つた。

「手めえは俺が誰だか知らねえだらう、なア、貧院小僧？」

慈善學校出の少年は、如何にも勿體ぶつた風で、柱の頂邊から降りて来て、さう言つた。

「え、さうです」

「俺はミスタア・ノア・クレイポールといふんだ。手めえは俺の下に使はれるんだぞ。さア窓扉を下せ、怠けもの、悪黨小僧め」

さう言つてクレイポールはオリヴァーを一つ蹴飛ばし、如何にも威張つた風で仕事場へ入つて来た。

窓扉を取り下すのは、オリヴァーの小腕には少し無理で、よろけて窓硝子を一枚破つたが、それでも、流石にノアが手傳つてくれたので、どうにかその仕事を了り、その少年に躓いて階下へと朝飯を食ひに下りて行つた。

「さア、火の傍へお出でよ、ノア」

さうチャーロットは言つて、

「旦那の朝飯の中から、お前に豚肉のい、片を取つて置いたよ、オリヴァー、お前ミスタア・ノアの後の戸を閉めておあげなさい。パンの鍋蓋へ入れて置いた細片をお前はお食べ。そこにお茶がある、あの箱の所へ持つて行つてお飲み、だが、急がなきやアいけないよ。お店に用があるんだからね、おい、分つたかい」

「こら、分つたか、貧院小僧」

これは、ノア・クレイポールが言つた。

ノアは、救貧院の孤兒ではなく、慈善學校出の少年であつた。母親は洗濯女で、父親は義足の廢兵で、一日二片半位の恩給を貰つてゐる酒飲みの男であつて、直き近くに住んでゐた。近邊の店小僧た

ちは、街中で「ごろんぼ」とか「慈善學校」とかいふ紳名でノアにからかうのであつたが、ノアは何んにも言はずにそれを堪へてゐた。ところが、今運命の神が、名もない孤兒のオリヴァーを、彼の所へと轉げ込ましてくれたので、彼のやうな賤しいものでさへ、指を指して嘲弄することが出来る者があることになつたので、彼は他人から受けた嘲弄に、利息を付けてそれをオリヴァーの方へと向けたのであつた。これがなかく面白所である。これが、人間の天性は、何れ程美しいものにする事ができるかといふことを、吾々に示す實例である。人に威張りたいといふ心持は、最も立派な貴人にも、最も汚い慈善學校出の少年にも、不公平なく發達してゐるのだ。

オリヴァーは、葬儀屋の店に、三四週間か、一月程ゐたが、或る晩、サワアベリイ夫婦が、店を閉めてから、店裏の小さい座敷で、夜食を食ひながら相談を始めた。亭主の考へでは、オリヴァーは、上品な、憂鬱な顔なので、葬儀供人に出したらよからう、勿論大人の葬式の場合でなく、幼童の葬式の場合に持つて行けば、丁度死んだ小童の釣り合ひがよくつて、新規な方法として歓迎されるに違ひないといふのであつた。で、女房の方でもそれに賛成したので、オリヴァーにその職を仕込むことになり、先づ最初は、オリヴァーを使へる直ぐ次の機会が來たら、主人がその葬式へ伴れて行くといふことになつた。

ところが、その機会が來たのは直きであつた。翌朝、朝飯の半時間後ぐらゐに、パンブル氏が店へ入つて來て、帳場臺に杖を立て掛け、大きい柔皮の紙入を出し、その中から紙片を選り出して、サワアベリイに渡した。

葬儀屋は、勢ひのいゝ顔になつて、その紙を一寸見て、

「あはア、棺の御註文ですな、えゝ？」

「先づ棺、それから區費の葬式ぢや」

パンブル氏はさう言つて、自分と同様にひどく太つてゐる柔皮の紙入の帶を締めた。葬儀屋は、紙の片からパンブル氏へと眼をやつて、

「へええ？ ベートン？ 聞いたことのない名だね」

「實に片意地な奴等ぢや、サワアベリイ、實に片意地ぢや。しかも、傲慢、ま、さういうてよいぢやらう」

「さうパンブル氏は、頭を振つて言つて、

「吾々は昨宵聞いたばかりぢやよ、何ういふ奴等か一向に知らんぢやつたが、同じ家に暮らして居る女が、餘程病氣が悪い女があるから、今晚、教區醫をよこしてくれと役員會へ願ひ出たのぢや。教區醫は食事に出て居つたでな、弟子の男が（極く賢い若者ぢやがね）取り敢へず、靴墨嚢へ薬を入れて持たせてやつたですわい」

「いや、何うも手早いことで」

葬儀屋が言つた。



「いや、手早いともな。ぢやが、それで何うぢやといふとな、その謀叛人共の恩知らずの行ひといふのを聞いてくれさつしやい。何うぢや、亭主の奴めから、その薬は婢の病氣には合はんから婢は飲まんといつておこした——婢めが飲まんからといひ居るのぢやよ。薬はな、たつた一週間前に、愛蘭出の職人二人と、石炭運搬人へやつて、えらいよく効いた、よい、強い確かな薬なんぢや——それをば無價で躡へまで入れてやつたんぢや——それをば、婢が飲まんと言ふと宿六め言うて來をつたですわい」

「いやどうも、何ともはや、そりやア實に……」

「いや全く未聞ぢや。い、や、そんな奴は誰も無い。ところで、女め死に居つた。吾々は埋めてやらにやアならん、それが命令ぢや。早くやつてしまふだけよろしい」

さういふ風に、バンプル氏は憤激しきつて、船底帽を最初はあべこべに冠りなどして、店からよたよたと出て行つてしまつた。

「いや、奴さん怒つたね。オリヴァー、おめえの事なんざア忘れて、何も聞かずに行つちまつたぜ」  
街路を大股に歩いて行く教區吏を見送りながら、葬儀屋が言つた。

「へえ、さうです」

と、オリヴァーは答へた。オリヴァーは、バンプル氏が來てからは、用心して、バンプル氏の眼にかゝぬやうに引つ込んでゐて、バンプル氏の聲を憶ひ出しただけで、頭の頂邊から足の爪先まで慄

へてゐたのだ。だが、それはさう骨折つてバンプル氏から隠れるには及ばなかつた。今まで持て餘しのオリヴァーを、試しに葬儀屋に託してある以上は、葬儀屋の方で、七年間年期に置くことを確かに約束して、教區吏の手へ戻される危険が全くなくなるまでは、バンプル氏の方からは、オリヴァーのことなどは、一切何んとも言はずに置かうといふのであつたのだ。

「さア」

サワアベリイは帽子を取り上げて、

「この仕事は早くやつちまふだけい。ノア、店を氣を附けな。オリヴァーおめえは帽子を冠つて一緒においで」

二人は少時市の一番多く人の住まつてゐるところを歩いた。それから、今まで通つたよりは、尙ほ一層汚い陰氣な狭い街へ入つて行つて、目的の家を搜した。兩側の家は高く大きかつたが、極く古くなつてゐて、極くくの貧民に間借りされてゐた。さういふ家の、世話の行き届かぬ破れかゝつた様子にかゝて、加へて、腕組をし、身體を二重に曲げて、時々こそ／＼と通る二三人の男や女の見すばらしい様子を見ても、其處がひどい貧民窟であることは一目に明かであつた。貸間に仕切られてゐる家は大抵階下は店屋建になつてゐたが、それは戸が閉まつて、腐れかゝつてゐて、階上の部屋だけ人が住つてゐた。古くなつて壊れかゝつて、危くなつた幾つかの家は、路へしつかりと打ち込んだ大きな林木を壁へ支柱にして、街へ倒れるのを防いであつた。が、さういふひどい家でも、戸や窓の代りに

打ち附けた粗末な板が大抵その場所から剥ぎのけられて、人間の身體が一つ出入りすることのできるくらゐの隙間ができてゐるのから見ると、それが家の無い哀れな連中の夜の隠家にされるのであつたに違ひなかつた。溝は詰まつて溢れてゐて、垢溜のやうになつてゐて汚なかつた。あちらこちらに、その腐つたものと一緒に腐れて行きつゝあつた鼠は、餓ゑきつて見るも恐ろしい形になつてゐた。オリヅァーと、主とが止つた家の開いた戸口には、叩金も鈴の把つてもなかつた。で、オリヅァーに、怖がらずに後へくつ附いて来いと吩咐けて、暗い通路をそろりと搜り足で、葬儀屋は最初の階段を上りきつた。で、そのとある部屋の戸へよろけ掛つて、彼は拳固の尖でそれを叩いた。開けたのは十三四の小娘であつた。葬儀屋は、一目に部屋の中の物を見て、それが目ざして来た部屋であることを知つた。彼は入つた。オリヅァーもその後へ蹠いて行つた。

部屋には火が無かつた。一人の男が、空の燐燐へお被つさるやうに茫然蹲んでゐた。年老つた女が、その冷たい燐燐へと低い腰掛臺を引つ張つて来て、男の側に坐つてゐた。もう一つの隅には、襦袢を着た幾人かの小童があつた。それから、戸に向つた小さい引つ込んだ隅に、古い毛布を掛けた何物かが床に横はつてゐた。オリヅァーは、そこへ眼をやると、慄へて、我知らず主の側へと引つ着いた。それは、さう隠されてゐたけれども、屍骸であることが、オリヅァーに直ぐ分つたからなのだ。

男の顔は瘦せて眞つ蒼で、髪と鬚は白髪交りで、眼は血走つてゐた。老女の顔は、皺だらけで、二本残つてゐるきりの齒が、下唇から突き出して、眼は鋭く光つてゐた。オリヅァーは老女も男も見ると、怖かつた。二人とも戸外で見た鼠に似てゐた。

「誰も傍へ行くこたアならねえぞ」

葬儀屋が、屍骸のある隅へと寄つて行くと、男は、はつと氣が附いて、恐ろしい權幕になつて、

「さがつてろ。畜生、生命が惜しけりやアさがつてろ」

「馬鹿なことを言ひなさんな、おまいさん」

悲しみのどんな形にもよく馴れてゐた葬儀屋はさう言つて、

「馬鹿なことを言ひなさんな」

「何うしたつて」

男は兩手を握り固め、烈しく床で地團駄踏んだ。

「何うしたつて、俺は此女を地の中へ入れさせねえ。此女はそこで靜かに寝むことはできねえ。かう

瘦せてゐるんだから、蟲が食はずに、苦しませるだけだらう」

葬儀屋は男の狂亂の言葉を耳にもかけず、衣囊から紐尺を出して、少時の間屍骸の側に跪いた。

「あゝ」

泣き出して、死んだ女の足の所に跪いた男は、

「跪け、跪け、誰も彼もこの女の側に跪いて、俺の言葉を聞け、この女は飢ゑ死をしたんだ

ぞ。俺は熱が来るまで、この女がどれ程疾かつたのか、ちつとも知らなかつた。さうすると骨が皮か

ら突き出す程瘦せて来た。火もねえ、蠟燭もねえんだ、此女は暗闇で死んだ——暗闇で死んだんだぞ。苦しい息で児童たちの名を呼ぶ聲が聞えたけれども、児童の顔さへ見ることができなかつたんだ。俺は此女のために、街路で乞食をした。それで奴等は俺を牢へ入れやがった。俺が出て来た時は、此女はもう助からなくなつてゐた。此女は奴等のために飢ゑ死をさせられたんだから、俺の胸の血はみんな乾いてしまつた。俺はそれを見たことを、神様の前に誓ふんだ。此女は奴等のために飢ゑ死させられたんだぞ」

男は髪の中の両手を振り合せ、高い叫び聲を立て、床を轉がり廻つた。眼は据わつて、泡が唇へ一杯出てゐた。

「彼女がわたしの娘だつた」

葬儀屋の方へとよろけ寄つた老女は、屍骸の方へと頭を傾かせて、そんな場所で屍骸のあることよりはもつと物凄、白痴のやうな嘲弄の聲で、

「あゝ、あゝ。彼女を産んだ、その時は若い女だつたわたしが、かうやつて生きて笑つてゐるのに、彼女の方があんなに冷く硬くなつて、あすこに倒れてゐるなんて、ほんとに不思議だ。あゝ、あゝ、何うしても不思議だ、まるで芝居のやうだ——まるで芝居のやうだ」

哀れな老女が、物凄、物凄の聲で泣いたり、笑つたりしてゐる間に、葬儀屋は歸らうと振り向いた。「待つておくれ、待つておくれ」

老女は高い嘔き聲で言つて、

「葬式は明日かね、次の日かね、今夜かね。彼女の屍骸を寝かしたのはわたしだよ。だから、わたしはついで行かなきゃアならないだらう、ねえ。大きい外套、いゝ暖かい外套をよこしておくれよ。出て行く前に菓子と葡萄酒がなきゃアならない。いゝえ、構はないよ、パンを少しおくれ——パン一斤と水一ぱいだけでいゝんだよ。パンが貰えるか知ら、おまへさん」

葬儀屋がもう一度戸口の方へと動かうとすると、葬儀屋の上衣を捉へて、老女はさう一生懸命に言つた。

「宜しい、宜しい。そりやア勿論だ、おまへさんの欲しいつてもなア何んでもあげるよ」

さう言つて、葬儀屋は老女の縋り附く手を握り放して、オリヴァーを引つ張つて急いで外へ出た。

翌日オリヴァーと親方とは、又その哀れな家へ行つたが、棺を昇くために、救貧院から四人の男を伴れて、バンブル氏がやつて来てゐた。老女と男のボロの上へ、古い黒い外套が着せられた。そして何んの飾りもない棺が、蓋を閉められて、棺昇きの肩に載せられて、街路へと擔き出された。

救貧院持の墓を作るところなので、墓地の極く隅の方で尋麻の生えてゐるやうな場所であつたが、人々がそこへ着いた時には、未だ牧師は来てゐなかつた。で、棺は墓の縁に置かれ、二人の施主は、冷たい雨がしとくと降り注いでゐる濕つた土の上で凝つと待つてゐると、その葬式を見にと集つた襤褸を着た子供たちが、騒がしい聲を立て、石塔の間で隠れん坊をし、それに飽きると、今度は棺の

上を飛び越し、飛び越して遊んだ。サワアベリイと、バンプル氏は、教會書記と親しい友達であつたので、法衣所へ入つて行つて、燧燼の側に坐つて、新聞を讀んだ。

一時間と少し経つて、牧師は白法衣を引つ懸けながら出て來た。バンプル氏はそこでたゞホンの體裁だけに騒がしい子供を一人二人殴りつけた。で、牧師は、葬式の經その他をば出來るだけ詰めて、たつた四分で讀み終り、白法衣を脱いで書記へ持たせ、そして、歸つて行つてしまつた。

「さア、ビル。土をかける。」

サワアベリイが、墓穴掘りに聲をかけた。

墓地のその邊は、下の方に棺が殆んどいつばいに埋められてゐたので、一番上へ入れたその棺は、地面から一二尺下になつてゐたきりなので、それに土をかけるなどは何でもなかつた。墓穴掘りは、土をかけこんで、足でいゝ加減にそれを踏みつけて、鍬を擔いで歸つて行つた。小童等は餘んまり早く濟んで面白くなかつたことを、聲高く喚きながら、墓穴掘りの後に躓いて行つてしまつた。

「さア、さア、お前」

バンプルは男の背中を叩いて、

「墓地の門が閉まるぢやから」

男はこの時まで、墓の側へ立つたきりで少しも動かなかつたのだが、はつと氣が附いて、頭を上げ、自分へ聲をかけた人を疑つと凝視め、そして、二三歩前へ歩いて氣絶した。老女は、葬儀屋が、外套を脱がせてしまつたので、その外套のなくなつたことを悲しみ喚いてゐて、男の倒れたことなどは眼に入らなかつた。それで人々は氣絶した男に冷たい水を掛けて、氣が附くと、墓地から伴れ出し、門を閉めて、各自の方向へと歸つて行つた。

「おい、オリヴァー」

サワアベリイは家へと歸つて行く途で、さう言つて、

「何うだ、好きか。」

「え、少し、有難う、親方。」

オリヴァーは餘程躊躇しながらさう答へて、

「でも、餘んまり……」

「あゝ成る程、直きに馴れちまはア、オリヴァー。馴れちまはア。何んでもねえぜ、なア、おめえ。」  
オリヴァーは、サワアベリイ氏が、それに馴れるには随分かゝつたのではないかと思つた。けれども、そんなことは聞かないのがいゝと思つたので、黙つて、自分が見たり聞いたりしたことがらに就いていろ／＼と考へながら、店へと歸つた。

## 六、義憤

一と月の目見えが終つて、オリヴァーは、本式の年期小僧になつた。丁度病氣の多い時候になつて

あて、葬儀屋に取つては商賣繁昌であつたので、一二週間の間に、オリヴァーは澤山の経験をえた。百日咳が流行つて、子供の亡くなるのが多かつたので、オリヴァーを葬儀供人に使ふといふサワアベリーの名案は、全く豫期以上に成功した。オリヴァーが、膝へ届くやうな長いバンドの附いた帽子を被つて、悲しい行列の先頭を歩いて行く姿は、市の母親たちの間で評判がよかつた。立派な一人前の葬儀屋になるには、どんな場合でも落ち着き拂つて平氣であるといふ習慣にならなければならぬといふので、その修業にとオリヴァーは、親方に伴れられて、大人の葬式へも大抵何時も行つたのであるが、彼はそこで強い心の人々が、美しい諦めと勇氣で、それらの悲しみや苦しみをこらへる有様を度々見ることができた。

例へば、こゝに一人の年老つた金持の婦人か、紳士が亡くなつたとすると、多勢の甥や姪たちは、その病中は非常に心配し、亡くなつてからは、人前では如何にも悲しみ嘆いてゐるのだが、自分たちばかりになると、全く陽氣になつて、悲しいことなどは、何にも起つたのではないかのやうに、面白さうに、自由に話し合つて居る。妻を失つた良人も、如何にも勇氣のある落ち着きでその悲しみを堪へる、良人を失つた妻はといふと、喪服を着るには着るが、それを悲しみの衣として着るのではなくして、それを出来るだけ自分に似合ふ、人眼を引くものとしようとする。一體に、女でも男でも、棺を埋める時には、如何にも歎き悲しんでゐるのだが、家へ歸ると殆んど同時にその悲しみから恢復して、茶の時間が來ないうちに、悲しいことなどはケロリと忘れたやうな平氣な風になつて終ふ。人々

が、さういふ風に悲しみを堪へてしまふ勇氣は驚くべきものであつて、傍から見ると、如何にも愉快な教訓になることであつたので、オリヴァーは非常に感心してそれを見た。

ノア・クレイポールは、年長の自分のはうが、丸帽子を冠り、柔皮の前掛をして店に引つ込んでゐるのに、新前の小僧のオリヴァーのはうが、黒い杖と、喪章を附けた帽子を冠つて、葬式へ出て行くので、ノアはオリヴァーを憎んで、いやが上にオリヴァーを押しつけて虐めた。ノアがさうするので、チャーロットもオリヴァーを虐めたし、ミセス・サワアベレイも、亭主のサワアベレイが、オリヴァーに眼をかけるので、それが癢に觸はつて、オリヴァーにひどく當りちらした。で、一方にさう三人の敵を控へ、又一方には、飽きる程葬式へと出されるので、オリヴァーの位置は、決して愉快なものではなかつた。

或る日、いつもの通り、晩飯にと臺所へと下りて行つたが、チャーロットが用で呼ばれてゐなかつたので、食事までに少時間があつた。そこで腹が減つて、意地が悪くなつてゐたノア・クレイポールは、オリヴァーにからかつて虐めるのに、又とない機會だと思つた。

さういふ無邪氣な悪戯の積りで、ノアは卓子掛けの上へ足を載せて、オリヴァーの髪を引つ張つたり、耳を抓つたり、その他意地の悪い卑しい慈善學校出の少年のよくいふやうな、いろ／＼の悪態をつきだした。さういふ風に、いくら嘲弄しても、オリヴァーを泣かせることができないので、ノアは、一層意地の悪いことを言ひ出した。

「おい、孤兒院、手めえのおふくろは何うした」

「亡くなつたんだ。お母さんのことなんぞ言はないでください」

オリヴァーの顔色が赤くなり、息が忙しくなり、口と鼻の穴が變に動き出したので、クレイポールは、それがオリヴァーの烈しく泣き出す前觸れだと見て取つた。さう思つたので、ノアは、悪態を續けた。

「何んで死んだんだ、孤兒院」

「悲しみて死んでしまつた。看護婦のお婆さんが、あたしに話してくれた」

ノアに答へるといふよりは、獨り言をいふかのやうに、オリヴァーは、

「あたしは、きつとさうだと思ふんだ」

オリヴァーの頬を涙が流れるのを見て、

「ホイ、ホイ、ホイ、ベラ棒に立派なおふくろだな、孤兒院、何んで手めえは、めそく泣くんだよ」

オリヴァーは急いで涙を拂つて、

「い、え、もう澤山だ、お母さんのことは何んにも言はないでおくれ、言はない方がい、。」

オリヴァーは強い聲でさう答へた。

「何に、言はない方がい、？ へえ？ 言はない方がい、？ おい、孤兒院、生意氣言ふねえ。手めえのおふくろはな、面白え女だつたんだ、確かにさうだぜ。やア、あ、ら」

こゝでノアは、意味あり氣に頭を頷かせ、筋肉の運動ででき得るかぎり小さい赤い鼻を上へ向けてヒコくさせた。

オリヴァーが黙つてゐるので、一層勢ひついたノアは、如何にも哀れんであるやうに装ほつた如何にも意地の悪い嘲弄の聲で、

「なア、孤兒院、もう何うも仕方がねえ、勿論、手めえにやア、その時分にも仕方がなかつただけどもな。何うも氣の毒なことだな。誰でもさう思つて、ほんとに手めえを氣の毒に思ふだらうよ。だが、おい、孤兒院、手めえのおふくろは、ほんとにとつともねえ悪い女だつただぜ」

「え、ッ？」

急に顔を上げて、オリヴァーが訊いた。

「とつともねえ悪いやつだつてんだい、孤兒院」

さうノアは落ち着き拂つて答へて、

「死んぢやつた方が、餘つ程よかたつんだぜ、なア、孤兒院、さもなきやア今頃はブライドウエルの牢屋で、苦役をやつてるか、流されてゐるか、それともお仕置きになつてるか、どつちかにちげえねえんだ、いや、多分お仕置きになつてたらうなア、さうだらう」

憤激で眞つ赤になつたオリヴァーは、ぼつと立ち上つて、椅子と卓子を突き倒し、ノアの喉を掴んで、烈しい憤怒で彼を振つて、カイツばい、ノアを床へと殴り倒した。

直ぐその前までは、虐待のためにいぢけた、靜かな温順しい小童であつたが、死んだ母親のことを、殘酷に侮辱されたので、オリヴァーの元氣は呼び覺され、血は湧き立つた。胸で大息を吐きながら、眞つ直ぐに立つて、眼を生き／＼と光らして、彼の足もとに蹲んでゐる卑怯な意地悪の少年を睨みつけてゐる有様は、オリヴァーの人となり、まるで、變つてしまつたかのやうであつた。

「人殺し」

ノアは喚いて、

「チャーロット。主婦さん、小僧が私を殺す、助けてくれ。助けてくれ。助けてくれ。オリヴァーが氣が狂つた。チャー……ロット。」

ノアの喚き聲に續いて、チャーロットの高い叫び聲が聞え、ミセス・サワアベリイのもう一層高い叫び聞が聞えた。チャーロットは側戸から臺所へと飛び込んで行つたが、ミセス・サワアベリイは、階下へ下りて行つても、生命に別狀がないかどうか、はつきりわかるまでは、階段の上にとまつてゐた。

「こら、こん畜生」

チャーロットが叫んで、力いつばいオリヴァーを掴へた。その力は、殊によく力を出しつけてゐる。並々の強い男の力と殆んど同じ強さであつた。

「こら、恩知らずの、人殺しの、恐ろしい惡黨小僧」

チャーロットは、一言言つては、一つづつ力いつばいオリヴァーを殴りつけた。

チャーロットの拳固は、なかく、輕くはなかつた。けれども、それだけでは、オリヴァーの怒りを取り靜めることができなかったからうと思つたので、ミセス・サワアベリイは、臺所へ飛び込んで行つて、片手でチャーロットに手傳つてオリヴァーを押へ、片手でオリヴァーの顔を引つ掻いた。さういふ都合のい、位置になつて來たので、ノアも床から立ち上つて、後からオリヴァーを殴つた。

かういふ運動は長く續くものではない。三人ともすつかり疲れ切つて、もう引つ掻きも打ちも出來なくなると、彼等はもがき叫んでゐるが、それでも、少しも勇氣を落してゐないオリヴァーは、埃溜の穴倉へと引つ張つて行つて、そこへ閉ぢ籠めてしまつた。それが終ると、ミセス・サワアベリイは、椅子へぐたりと掛けて、わつと泣きだした。

「あらッ、大變だ、主婦さんが氣が遠くなつちまふ。水を一ばい、さ、ノア、お前さん。さ、早く、さ、早く、さ」

「お、ツ。チャーロット」

ノアが、頭と肩へ、冷たい水を十分にかけたので、息の苦しい中から、ミセス・サワアベリイはさう言つて、

「お、ツお、ツ。チャーロット、わたしたちがみんな寢てゐるうちに殺されなかつたのは、ほんとに神様のお蔭だわね」

「え、ほんとに神様のお蔭ですとも、主婦さん、旦那もこれにこりて、赤ん坊の時から人殺しや、泥坊に生れついて来るやうな、あんな恐ろしい奴らを、家で使はないやうになるでせう。ノアは可愛さうですよ。あたしが来た時には、主婦さん、もう半殺しにされてゐたんですよ」

「可哀さうにね」

その慈善學校出の少年の方をば、如何にも可愛さうがつてゐるやうに見て、ミセス・サワアベリイが言つた。

一番上の直衣鉤から上ぐらゐ、オリヴァーの頭の頂邊より身長の高かつたノアが、さういふ哀れみの言葉をかけられるといふと、手首の内側の方で眼をこすつて、啜泣を搔くらしい風をした。

「ほんとに、何うしたらよからうね」

ミセス・サワアベリイは、大聲で言つて、

「旦那は家にゐないし、家の中に男つてもなア一人もゐないんだよ、彼奴は十分と経たないうちに、あの戸を蹴破るんだよ」

戸といつたところで、ホンの材木の片なのだから、オリヴァーが強く打つつかる音を聞いては、ミセス・サワアベリイが、さう思つたのは無理もなかつた。

「あらまア、あらまア。何うしたらいいんでせう、主婦さん、警察へさう言ひませうか。」  
チャーロットがさういふと、

「軍隊がい、でせう」

クレイポールが意見をもち出した。

「い、え、い、え」

ミセス・サワアベリイは、オリヴァーの古くからの知り合ひのことを思ひ出して、

「ノア、お前、パンブルさんのとこへ駈けて行つて、直ぐ、どうしても直ぐ来てくださいと頼んでおいで、い、え、帽子なんざア何うでもい、よ。さ、大急ぎで行つといで。その眼の縁の脹れたとこへは、小刀をつけるやうにして行つといで。脹が引くお禁厭なんだから」

ノアは返事もせず、全速力で駈けた。外をあるいてゐた人々は、帽子も冠らず、眼の近くへ懐中小刀をかざして、街路を暗雲に駈けだして行く、慈善學校出の少年を見て、一體何事だらうと驚いた。

### 七、病兒の祝福

ノア・クレイポールは、息もつかずに街路を駈けられるだけ駈けて、救貧院の門へ行き着いた。そこで一分かそこら休んで、泣いて怖がつてゐる顔をすつかり整へてから、音高く網代戸を叩いた。

「やア、お前どうしたのだ」  
門を開けた年老つた貧者が言つた。



「バンブルさん。バンブルさん」  
ノアは、如何にも周章てた様子で、ひどく苦しきうな高い聲でさう言つたので、近くに居あはせたバンブル氏は、ひどくおどろいて、いつもの船底帽も冠らずに、飛び出して来た。それは教區吏でさへも、不意に強い衝動を受ければ、落ち着きを失つて、自分の威嚴も忘れるものだといふ面白い實例である。

「お、バンブルさん、あなた。オリヴァーがあなた……あのオリヴァーが……」

「何んぢや？ 何んぢや？」

金屬性の眼に、満足の光りを見せて、バンブル氏が口を挟れ、

「逃げたのではないかな、いや、逃げ居つたぢやないかな、え、ノア？」

「い、え、あなた、い、え、逃げたんぢやないです。暴れ出したんです。わたしを殺さうとしました。チャーロットも、主婦さんも殺さうとしたんです。あ、ッ、痛くつて堪らない。あ、苦しい。どうぞ、あなた」

ここで、ノアは、鰻のやうに、いろくな風に身體をよぢらして、オリヴァー・ツイストの亂暴のために、ひどい傷を受けて、その鋭い痛み堪へられないのだと、バンブル氏に思はせようとしたのだ。  
ノアは、持つて来た報知が、すつかりバンブル氏を仰天さしてしまつたことを見ると、自分のこと

にかゝる事柄で、尙ほ一層相手を驚かさうと思つて、それから十層倍も高い聲で、自分の傷のことを喚き立てた。で、白直衣の紳士が、庭を通つて行くのを見ると、さういふ紳士の注意を惹きつけて、怒りを起させるのも非常に、事と思つたので、尙ほ一層悲しきうに喚き立てた。

紳士は直ぐにそれに氣が附いて、三足も行かないうちに振り返つて、何事だと尋ねた。

「これは特殊學校の少年ですわい」

さうバンブル氏は答へて、

「あのツイストの小僧のために、殺されかけた……いや、半殺しにされたといふんであります」

「いや、それは怪しからん」

さう言つて白直衣の紳士はビタリと止まり、

「いや、さうだらう。わたしは最初から、あの不敵な野蠻小僧は、きつと絞罪になるやうなことをするであらうといふ不思議な豫覺があつたんだ」

「あいつは又、女中も殺さうとしたですわい」

さう言つたバンブル氏の顔は、灰のやうに蒼かつた。

「主婦さんもです」

さう、クレイボールが口を挟れた。

「それから、親方もぢや、お前さう言つたと思ふんぢやが、ノア？」

バンブル氏がさう言ひ足した。

「いゝえ、親方は家にゐませんでした。でも居たら、親方も殺したでせう。あいつはさうすると言つたんです」

「うん。さうする積りだと言つた、さう言つたかね、お前？」

白直衣の紳士は訊いた。

「さうです、さうです」

さうノアは答へて、

「何うぞ、あなた、バンブルさんがお暇なら、直ぐいらつして、あいつを殴りつけて下さいと、主婦さんが言つてます……旦那がゐないんですから」

「宜しい、宜しい、承知した。」

さう白直衣の紳士は言つて、

「バンブル、杖を持つて直ぐサワアベリイの家へ行つて、宜しく取り計らつてくれ給へ。奴を許してはいけないぜ。バンブル」

「いや、何うしても許しませんわい」

教區史はさう答へて、教區の刑罰のためにと、杖の下の方へ巻き附けてあつた、蠟の端を具合よくした。

「サワアベリイにも、あいつの扱ひは、生ぬるいことではいかんのだと言つてくれ。あんな小僧は、生傷を絶やすやうでは、使ひきれぬものではない」

さう白直衣の紳士が言つた。

「宜しい、引き受けましたわい」

船底帽も、杖も、もうこの時には、持ち主の満足するやうに具合よくなつてゐたので、バンブル氏とノア・クレイポールは大急ぎで葬儀屋の店へと向つた。

其所では、事の有様は少しも變つてゐなかつた。サワアベリイは未だ歸らず、オリヴァーは前と同じく烈しく穴倉の戸を蹴つてゐた。ミセス・サワアベリイと、チャーロットの話しでは、オリヴァーの亂暴は驚くべき性質のものであつたので、バンブル氏は戸を開ける前に談判する方が宜しいと判断した。さういふ考へで、彼は先づ序開として、戸を外から一つ蹴つて置き、そこで、鍵穴へ口を當てて深みのある重々しい聲で言つた。

「オリヴァー」

「おい、出してくれ」

内部からオリヴァーが答へた。

「わしのこの聲が分るか、オリヴァー」

「分ります」

「貴様怖くはないか。わしの聲を聞いて慄へはせんのかな？」

「いゝえ。」

オリヴァーは平氣でさう答へた。

身分柄、いつも受けてゐるやうな答へとはまるでちがつた答へであるので、パンブル氏は少からず茫然とした。彼は、鍵穴から後ずさりして、眞つ直ぐに立ち上り、黙つた、驚き入つた風で、傍で聞いてゐた三人の顔をば、それからそれへと見廻した。

「あゝ、ねえパンブルさん、狂人にちがひないんですよ」

ミス・サワアベリイはさう言つて、

「少しでも正氣があるんなら、何んな小童だつても、貴方にあんな口を利くもんですか。」

「狂人ぢやない、狂人ぢやありませんわい、主婦さん」

少時の間深く考へ込んでゐたパンブル氏は答へて、

「肉ですわい」

「何んですつて？」

ミス・サワアベリイは聲を高くした。

「肉ですわい、主婦さん、肉ですわい」

嚴然と聲に力を入れてパンブル氏は答へて、

「あんたがたは、あれにものを食はせ過ぎたですわい、主婦さん。あんたがたは、あれのやうな身分のものには有るまじき天然でない魂を、あれの心のうちに起させましたですわい。役員會はな、ミス・サワアベリイ、實際的の哲學者たちぢやで、さういふところはよく分つて居りますぢや。貧乏人は魂を持つたところで、何うなりますのぢや？ 生きた身體を持たせて置いてやるだけで、全く十分なのぢや。粥ばかりやつてをきなされましたならばな、主婦さん、こんなことは出来はしませんぢやつたになア」

パンブル氏は又言葉をつづけて、

「もうかうなりましたはな、彼奴が少し飢ゑるまで、一二日あの儘で穴倉へ置いてをきましてな、それから、引き出して、年季の間ぢや、粥ばかりで養つて行くより外仕方ありませんぢや。彼奴は生れがよ宜くない。氣暴い性質であります、ミス・サワアベリイ。彼奴の母親は、温順しい女ならばな、何週間も前に倒れるやうな困難と苦しみを凌いで、此處まで來たのぢやと、看護婦も、醫者も言うて居つたですわい」

パンブル氏の言葉がこゝまで來ると、オリヴァーは、何にか又母親のことを言つてゐるのだと知つて、言葉も何も聞えなくなるやうな烈しきで、戸を蹴り出した。サワアベリイが、丁度この時歸つて來た。女たちは、主人の怒りを起させるのに一番適すると思ふやうな、ひどいおまけをつけて、オリヴァーのことを主人に話したので、彼は直ぐに穴倉の戸を開けて、その怪しからん弟子を、襟髪を取

つて引きずり出した。

前に殴られたので、オリヴァーの着物は裂けて居り、顔には打ち傷、引つ掻き傷が、いつばいであり、髪は額へ亂れておつかぶさつてゐた。けれども、怒りの色は無くなつてゐなかつた。彼はその牢屋から引き出されると、ノアの顔を正面に睨みつけて、少しも恐れた様子はなかつた。

「これ、貴様は怪しからん奴だ、これ」

さうサワアベリイは言つて、オリヴァーの身體を揺ぶつて、横面を殴つた。

「あいつはお母さんのことを、ひどいことを言ひました」

オリヴァーが答へた。

「なに、さう言つたつて、何うしたんだよ、この恩知らずの悪黨小僧め」

ミセス・サワアベリイがさう言つて、

「お前のおふくろは、あの兒が言つた通りの女なんだよ、いゝえ、そりやアもつと悪い女なんぢやないか」

「いゝえ、さうぢやありません」

「いゝえ、さうだよ」

「虚偽です」

ミセス・サワアベリイは、わつと泣きだした。

かう泣かれては、サワアベリイのすることは、もう一つしか無かつた。オリヴァーをできるだけ割することを、一瞬でも躊躇すれば、女房から、獸だの、情なしの亭主だの、意地悪だの、唯人間の皮を被つてゐるだけの悪黨だの、其他、この本の一冊だけでは書ききれない程の、いろ／＼の悪態もく態を並べ立てられることは知れきつてゐた。サワアベリイは、自分の力の及ぶかぎりは（それは無論大したことではなかつたが）オリヴァーを憎んではゐなかつた。けれども、女房にさう泣き立てられては、彼はもうしやうがなかつた。そこで、彼は、又オリヴァーをひどく殴りつけた。それが餘んまり烈しかつたので、さすがのミセス・サワアベリイもそれで満足し、バンブル氏の杖の罰も先づ不必要になつてしまつた。で、晝ぢうオリヴァーは本の一片を持たせ、ボンブから水が飲めるやうにして、臺所の奥へ閉ぢ籠められた。で、夜になると、ミセス・サワアベリイは、オリヴァーの母親のことなどを戸の外で口汚く罵つて置いて、部屋の中を見、ノアや、チャイロットの指さして嘲り笑ふ中で、階上へ上つて、いつもの淋い寢床で寝ると、オリヴァーに吩咐けた。

葬儀屋のうす暗い仕事場の、何んの音もしない静けさの中へ獨り取り残されて、そこで初めてオリヴァーはその晝間のやうな虐待が、ホンの少年の心に喚び起すにちがひないと、誰でも思ふやうな感情に身を任せた。彼は、何にをいふかと言ふやうな蔑視の顔付で、みんなの嘲弄に對した。彼は泣き聲一つ立てずに、殴られるのを堪へた。それは、生きながら焼かれても、最後まで叫び聲を立てなかつたらうと思ふやうな負けない氣が胸に溢れて來たからであつた。だが、今、見る人も聞く人も誰も

めなくなると、床へ跪いて、手で顔を隠して、散々に泣いた。

長いこと、オリヴァーはさういふ風で身動きしなかつた。彼が立ち上つた時には、蠟燭は心が少くなつて、低く、燃えてゐた。そろ／＼と周囲を見廻し、凝乎と耳をすまして、四邊の様子を窺つてから、靜かに戸閉りを開けて、外を見た。

寒い闇の晩で、星が、少年の眼には、地面から何時もよりも、ずつと遠くにあるやうな氣がした。風はちつともなかつた。地面の上に映つた樹の、うす黒い影は少しも動かないので、何にか死んだもののやうに物凄く見えた。オリヴァーは又そつと戸を閉めた。蠟燭の消えかゝつてゐる明りで、少しの着物をハンケチに包んで、腰架に坐つて、朝を待つた。

曉方の最初の光りが、窓扉の穴から差し込んで來ると、オリヴァーは又立ち上つて戸締を開けた。オド／＼と見廻し、寸時躊躇つてから、背後で戸を閉めて、街へ出た。

何ちらへ逃げていゝか分らないので、右へ左へと見た。オリヴァーは、前に外へ出た時、荷馬車が小山を上つて行くのを見たことを憶ひ出した。彼は同じ道を取つた。畑を横切つて歩道に達したが、それは少し行けば又本道に出ることを知つてゐたので、馳つて、それをつけて、足早に歩いて行つた。オリヴァーは育兒所から救貧院へと、初めて伴つて來られた時、バンブル氏に躓いて歩いて來たのが、この同じ歩道であることをよく覚えてゐた。彼の行く道は、その家へと眞つ直ぐに行くものであつた。さう思ふと、心臓がドキ／＼しだした。彼は殆んど引つ返へさうとした。だが、もう餘程來て

ゐて、引つ返へせば、餘程時間を損するのであつた。その上に、非常に朝早くなので、人に見られる惧れは殆んどなかつた。それで、彼は進んで行つた。

彼は家の所へ行き着いた。そんな早い時間に、そこらへ出でゐるものは誰もなかつた。オリヴァーは立ち止まつて、庭を覗いた。一人の幼童が、小さい花壇の雜草を抜いてゐた。オリヴァーが立ち止まると、その兒も蒼い顔を上げたが、それはオリヴァーの前の友達の一人であつた。オリヴァーは、その土地を逃げる前に、その兒に會つたのは嬉しかつた。自分より年下の幼童であつたけれども、その兒はオリヴァーの小さい仲のいゝ遊び友だちであつたのだ。二人は、打たれ、食物も貰へず、一緒に牢部屋へ閉ぢ籠められたことが、幾たびとなくあつたのだ。

「靜かに、ディック」

その兒が門へと駈けて來て、うれし氣に、棒の間から瘦せた手を差し出すと、さうオリヴァーが言つた。

「誰も起きてゐない？」

「いゝえ、あたしばかりです」

「あたしを見たつて、誰にも言はないでおくれよ、ディック。あたしはこれから逃げて行くんだからね。打つたり、ひどい目にあつたりするんだよ、ディック。あたしはどつか遠くへ行つてやつて見ようと思ふんだ。でも、どこへ行つていゝか分らない。おや、お前の顔はおそろしく蒼いぢやないか」

「お医者さんが、もうあたしは助からないんだと、人に話してゐるのを聞いたよ」  
幽な笑顔で、その兒は答へた。

「お前に會ふことができて、ほんとに嬉しいね。でも、早くおいで、早くおいで」  
「あ、あ、あ、さうするよ、でも、お前に左様ならとは言はないよ」

オリヴァーはさう答へて、  
「あたしはお前にまた會ふよ、ディック。きつと會へるとおもふんだ。お前は快くなつて、幸福になるよ」

「さうだといふと思ふけどもね。でも、それはあたしが死んでからだ。その前には駄目なんだよ。お医者さんの言つた通り、あたしは直き死ぬに違ひないよ、ねえ、オリヴァー。あたしは、よく夢で、天だの、天使だの、起きてゐる時分には見ない親切な人たちの顔だのを、度々見るんだからね。接吻しておくれ」

幼兒は低い門へ上つて、オリヴァーの頸へ、小さい腕でかじり附いて、  
「左様なら、丈夫でおいでよ」

この祝福は、ホンの幼童の口からであつた。だが、これが自分に向つて唱へられたのをオリヴァーが聞いた最初の祝福であつた。で、それから後の生活での彼の苦しみや、様々の變化の中でも、彼は決して一度も、この祝福を忘れたことはなかつた。

### 八、かげろふ小僧

オリヴァーが、本道へ出たのは八時であつた。もう市から五哩程離れてゐたけれども、追手がつかつて、捕へられてはならぬと思つて、生垣の下に隠れ／＼してゐるうちに、正午になつて終つた。そこで、哩程石の側に腰掛けて休んで、そこで初めて、何處へ行つて暮すことにしたらよからうと考へだした。

石には大きな字で、そこから倫敦へ七十哩だと書いてあつた。オリヴァーは、院の老人などからかねがね聞いてゐたその大きい市へ行かうと決心した。

オリヴァーは、倫敦の方へと、もう四哩程行つた處で、その目的の場所へ行き着くまでには、何うしなければなるまいかといふことに氣が附いた。で、少し歩きたを遅くして、倫敦へ行ける方法を思案した。彼は包みの中に穀ばかりになつたバンと、粗い布のシャツと、二足分の靴下を持つてゐた。彼は又衣囊に一片持つてゐた。それは、何時もより非常に善く働いたといふので、或る葬式の後で、サワアベリイが呉れたのであつた。

「清潔なシャツは、ほんとに心持がい。二足の靴下もい、一片もい。だが、これだけぢやア、冬、六十五哩歩くには餘り足しにはならないや」  
オリヴァーはさう思つた。

大抵の人は、自分の行方に横はる困難には直ぐ氣の附くものであるが、それに打ち克つ方法は容易には思ひ附けないものである。オリヴァーも勿論さうであつたので、何といふことなしにいろ／＼と考へた後で、包みをば、他の肩へと擔ひ換へて歩いて行つた。

オリヴァーはその日二十哩歩いたが、その間乾いたパンの殻を食ひ、道側の小屋の戸口で水を貰つて飲んだきりであつた。夜が來ると、草場へ入つて、乾草堆の下へ這ひ込んで、朝まで其處で寝ようとした。最初は怖かつた。風が樹も何も無い野の上を、物凄い音で吹いたのだ。その上彼は寒くつて飢ゑてゐた。そして、この上もなく淋しかつた。けれども、歩いて疲れきつてゐたので、直きに寝入つて、苦勞を忘れてしまつた。

次の朝起きた時には、身體が寒くつて、硬くなつて、その上腹が減つてたまらなかつたので、通り掛つた一番最初の村で、それきりの一片で、小さいパンを一斤買はないではあらなかつた。その日は、十二哩とは歩かないうちに、又夜がやつて來た。足の裏は痛み、股も弱くなつて、膝から下が力なく顫へた。もう一晚、物淋しい野天で寝たので、尙ほいけなくなつた。次の朝立たうとすると、もう這ふやうにしてゐなければ歩けなかつた。

或る村では、その土地で乞食するものは誰でも牢屋へ入れるといふ揭示札が出てゐた。オリヴァーは、その村を離れてしまつた。他の村では、オリヴァーが宿屋の庭に立つて、通る人を悲しさに見ると、何か盗む積りではないかと怪しまれて、主婦さんの吩咐で追ひ拂はれた。農家で乞食をすれば、何處でも犬をけしかけるぞと脅された。商人屋の店先に立てば、教區吏に引き渡すぞと怒鳴られた。

實の所、路關の番人で、親切な男と、慈悲深い老女がなかつたら、オリヴァーの苦は、彼の母親の場合と同じやうな段取りで終らせられてしまつたであらう、言葉を換へて言へば、オリヴァーは、天下の大道で倒れて死んでしまつたにちがひなかつたのだ。路關の番人は、パンとチーズで、オリヴァーに食事をさしてくれたし、老女の方は、孫が難船にあつて、何處か遠國で、食ふや食はずであるのだからと言つて、この哀れな孤兒を憐れんで呉れることができるだけ（それは勿論少しばかりのものではあつたが）の食ひ物をくれた——尙ほその上有難いことには、如何にも優しい親切な言葉をかけてくれ、同情と憐れみの涙を濺いでくれた。で、さういふ言葉と涙は、オリヴァーがこれまでに受けた様々な苦しみよりも、尙ほ一層深くオリヴァーの心の底に徹した。

故郷を出てから七日目の朝早く、オリヴァーは、そろ／＼と跛を引きながら、バアネットの小さい市へと入つた。とある家の入り口の段に、足は血に染まり、身體は埃だらけになつて坐つてゐるうちに、陽は華やかにさして來た。

だん／＼と、窓扉が開き、窓掛けが上げられ、人があちこちと通りだした。その中には、寸時止つてオリヴァーを見るとか、急いで歩いて行きながら、振り返つて見るとかするものは、一人や二人はあつたけれども、彼を助けるとか、何處から來たのか尋ねるとかいふものは誰もなかつた。彼は、乞

食をする氣にもなれなかつた。そこで、そこに只坐つてゐた。

さういふ風に、オリヴァーは、その入口の段に暫時蹲んでゐて、一軒隔きに酒屋があるといふバーネットの市の酒屋の多いのに驚きながら、通つて行く馬車を茫然と眺めて、自分の年のものではとでもできないやうな勇氣と決心で、やるのに一週間もかゝつたことをば、何の骨折もなく、二三時間でもやることのできる人々があるのは、如何にも不思議なことだと思つてゐた。そのうちに彼は、二三分前に何でもない風で彼の側を通つて行つた少年が、又歸つて来て、街の彼方側から凝乎とオリヴァーの様子を窺つてゐるのに氣が附いた。オリヴァーは、初めのうちには、それに一向構はなかつた。が、その少年が、何時までも同じ風で凝乎と見てゐるので、オリヴァーは、頭を上げて凝乎と見返へした。さうすると、その少年は、此方側へと渡つて来て、オリヴァーの側へ歩み寄つて、

「おい、雛鳥、どうしたんだい？」

オリヴァーへさう聲をかけた少年は、オリヴァーと同じ年恰好であつた。けれども、さういふ不思議な少年を、オリヴァーは一度も見たことがなかつた。平つたい鼻の、平つたい額の、極く有りうちの卑俗な顔付の、如何にも薄汚い少年であつたが、その様子や、振舞ひは、もうすっかり大人であつた。彼は年にしては脊が低く、がに股で、小さい鋭い卑し氣な眼を持つてゐた。帽子は、今にも落ちさうに軽く頭の上に乗つけてゐた。で、時々不意に頭を捻る癖がなかつたなら、落つこちたらうと思ふのだが、その癖のために、落つこちさうになつては、又元の位置に戻り／＼するのであつた。彼は、大人の上衣を着てゐたので、それが殆んど踵まで垂れてゐた袖から手を出すために、腕の半分どころまで袖口を捲くり上げてゐた。それは彼の畝織厚綿布の下袴の衣囊へ手を突つ込むのに都合よくするためであつたらしかつた。で、その時、彼は、さういふ風に、衣囊へ手を突つ込んでゐたのだ。彼は見た所、どうしても、ブルウヘル靴（一種の半靴）を穿いて、四呎六吋か、もう少し低い位の脊の、酒飲みの威張り歩く若紳士といふところであつた。

「おい、雛鳥、おめえ、どうしたんだい？」

さうこの不思議な若紳士がオリヴァーに言つた。

「あたしはほんとに腹が減つて、疲れてます」

オリヴァーはさう言ふと、涙が眼へ出て来た。

「あたしは遠くから歩いて来ました。七日歩いて来たんです」

「何に、七日歩いた？ あゝ、成る程。ビイクの命令だらう、え、？ だが」

オリヴァーの驚いた顔付を見て、若紳士はさう言ひ足して、

「ビイクたア何だか、おめえは知るめえなア、おい、お坊ちやん」

オリヴァーは温順しく、ビイクはと、鳥の口だと聞いてゐたのだがと答へた。

「いやア、何て青いことだなア。おい、ビイクてえなア、司法官のことだぜ、おめえ司法官の命令で歩くんぢやア、眞つ直ぐぢやアいけねえ、いつも上へ上へと上つて行くんだ。下へ下ることつては一



度もねえぜ。おめえ、風車場にゐたことはねえか？」

「何んの風車場ですか？」

「何んの風車場？ ……なに、その風車場はな……竝の世間にある奴よりは、ずっと狭いものでな、人の身の上の風が高い時よりやア、低い時の方がよく動く奴なんだ。高い時にやア、職人が捕らないからなア。だが、おい、おめえは食ひてえだらう、よし食はしてやる、さア、神輿を持ち上げねえ。さア、おい」

さういふ風に、手を貸してオリヴァーを立たせて、若紳士はオリヴァーを近くの雑貨屋の店へ伴れて行つて、即用ハムと、二英斤パンを買つた。で、パンを抱へて小さい酒屋へと向ひ、家の奥の酒場へと入つて行つた。そこで、その不思議な少年は、一杯の麥酒を持つて來させ、オリヴァーの方は、その新な友だちの羞めるまゝに、長い心持のいゝ食事をしたが、その間、その不思議な少年は、非常に氣をつけて、じろりくオリヴァーを見てゐた。

「倫敦へ行くのかね？」

オリヴァーが、たうとう食事を終つた時、その不思議な少年が言つた。

「さうです」

「宿があるのかい？」

「いゝえ、ありません」

「錢は？」

「いゝえ、ありません」

不思議な少年は、口笛を吹いて、大きな上衣の袖が許すかぎり、衣囊へ手を突つ込んだ。

「倫敦に住つてゐるんですか？」

さうオリヴァーが訊ねた。

「さうだ、家に居る時は田舎にゐるよ、所で、おめえ、今夜寝るところがなきやアなるめえ、なア、さうだらう？」

「えゝ、さうです。あたしは倫敦を出てから、一度も屋根の下では寝ませんでした。」

「その方は、もう案じるには及ばねえよ。俺は今夜倫敦へへえらなきやアならねえんだが、俺は其處に住んでゐる老紳士で、無料でおめえを、何時までも泊めてくれる人を知つてゐるんだ……つまり、その人を知つてゐる紳士が紹介すればだなア。ところで、その紳士は、俺を知つてゐるかといふとな、いや、さうでねえ。ちつとも知らねえ、何うして飛んだことだ。何うして知つてゐるものかい。」

若紳士はその終りの方の言葉は、皮肉な冗談であつたことを知らせるかのやうに、莞爾々々笑つて麥酒を飲み終つた。

かういふ風に、思ひもかけず、泊る所をこしらへてやらうといふ言葉が、如何にも嬉しくつて、斷り切れるものではなかつた。殊に直ぐそれに續いて、その若紳士は、きつと直きに何にかい、奉公

口を、オリヴァーの爲に捜してくれらうといふ話しまでされたのだ。それで、オリヴァーは、だんだん心安く話をするやうになつた。そこで、オリヴァーは、この友だちの名が、ジャック・ドオキンスであつて、その老紳士の、殊に氣に入りの少年であるのだといふことを知つた。

さういふ老紳士の世話を受けてゐるにしては、ドオキンスの様子は、どうもよくなかつた。けれども、ドオキンスが、取り止めのない、確つかりしない話し方をする少年であるし、その上に彼は、彼の親しい友達の間では「かげろふ小僧」とふ綽名でよく知られてゐるといふのであつたので、それから考へると、オリヴァーは、この少年は、浮ついた怠け者であつたので、彼の恩人の訓誨も無駄になつたのだらうと思つた。さういふ考へでオリヴァーは、其老紳士の家へ行つたら、できるだけ早く、その人の氣に入るやうにしよと思つた。で、若しかげろふ小僧が、オリヴァーが思ふ通り、矢張り身持が直らないのなら、かげろふ小僧とは、交際はないことにしようと思つた。

ドオキンスは、夜にならないうちは、倫敦へ入ることを嫌がつたので、二人が、イスリントンの路關にかゝつた時には、もう籠て十一時であつた。二人は、エンゼル通りから、セント・ジョオンス通りへと抜け、それからだん／＼横町へと入つて行つた。

かげろふ小僧は、早や足で歩いて行くので、オリヴァーは其後へ跟いて行くのが精一つばいであつたのだが、それでも、時々路のどちら側かをちよい／＼見ないではゐられなかつた。見たこともないやうな汚い哀れな場所であつた。街路は極く狭くつて、泥濘つて居り、空氣には嫌な臭ひが籠つてゐた。小さい店屋は幾つもあるが、其所の商品は、幼童でもあつたかのやうに、何處にも幼童がウヨウヨしてゐて、夜のそんな遅い時分でも、戸口を、内部へ、外へと這ひ廻つたり、内部から喚いたりしてゐた。一番繁昌してゐるらしい家は酒屋であつて、其所では、最も下等な愛蘭人どもが、わいらい騒いでゐた。街路の通路から、其所や此所に引つ込んでる屋根をした路や庭があつて、その奥に家が見えたが、其所では、酔つぱらつた男や女が、まるで塵芥の中で轉がつてゐた。そして、或る家の戸口からは、大きな人相の悪い男が、そろ／＼と出て來るのであつたが、それは餘りいゝ用事へと向ふのではないらしかつた。

オリヴァーは、逃げようかと思つてゐる中に、坂の下へ來てしまつた。彼の案内者は、オリヴァーの腕を掴まへて、フィールド・レエンの近くのとある家の戸を押し開けて、オリヴァーを廊下へと引つ張り込んで、戸を背後で閉めた。

「おゝい、何うだ」

かげろふ小僧の口笛に答へて、下から高い聲が聞えた。

「上等で、全勝」

それが答へであつた。

これが、すべて異状がないといふ合ひ言葉か、合圖かであつたらしく、弱い蠟燭の光が廊下の遠くの端で壁へ燦めき、古い厨房の階段の欄干が破れてゐるところから、男の顔が覗き出した。

「二人ぢやアねえか」

男は蠟燭を突き出し、手を眼へ翳して、

「新入りだよ」

ドオキンスは答へて、オリヴァーを前へ引つ張り出した。

「何處の者だ？」

「グリーンランドさ。ファギンは階上にあるのか？」

「うん雑巾（手巾のこと）を選び分けてらア。上んねえ」

蠟燭が引つ込んで、顔も見えなくなつた。

片手を掴まへられ、片手で探りながら行くオリヴァーには、眞つ暗な破れた階段を上るのがなかなか骨が折れた。けれども、彼の案内者の方は其所には慣れきつてゐるらしく、平氣で、ズン／＼上つて行くのであつた。

彼は奥の部室の戸を開けて、オリヴァーを引つ張り込んだ。

部室の壁や天井は、古いのと、汚れてゐるのとで、恰で眞つ黒であつた。火の前にはディール木の卓子があり、その上には、ジンジャア・ピールの罎にさした蠟燭が燃えてゐた。其所に立つてゐるよほど年寄りの、身體の萎びたやうな猶太人の顔は、如何にも慄然とするやうな悪黨面であつたが、それが、かき亂れた赤い髪がかつて、くらくらか懸されてゐた。猶太人は、垢つき汚れたフランネルの長上衣を着て、喉をむきだしにしてゐた。そして、自分の前のフライ鍋と、絹手巾を多數懸けてある乾衣 臺とへ注意を分けてゐるやうであつた。五つ六つの古い袋で出来てゐる粗い寢床が床にごちやごちやと列んでゐた。卓子を圍んで、四五人の少年があたが、どれも、かげろふ小僧より年上ではなかつたが、皆、一かどの年配の大人のやうな風で、長い素陶パイプで煙草を飲んだり、酒を飲んだりしてゐた。

「これがさうだ、ファギン。俺の友だちのオリヴァー・ツイストだ」

「お、善く來なすつた、オリヴァー、ほんとに好く來なすつた」

さう猶太人は言つて、

「かげろふ、ノオセエジを下せよ、オリヴァーの坐る箱を火の側を引つ張つて來てやりな。あ、オリヴァー、お前は手巾を見てゐるな、なア、お前。随分多數あるだらう。何うだ。洗濯をするために、今出したところなんだ。唯それだけだ、オリヴァー、唯それだけだ。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

この終りの方の言葉は、この陽氣な老紳士の有望な弟子たちの大笑ひの聲で迎へられた。さういふ大陽氣のなかで、みんなは、夕食を始めた。

オリヴァーも自分の分を食つた。猶太人が、其所で、ジン酒に水を割つたのを、オリヴァーへ渡して、その酒杯は他の紳士がいるのだから、直ぐ飲んでしまはなければいけないと、言つた。オリヴァーは言はれた通りに一と息に飲んだ。それから直ぐ後で、彼は一つの袋の寢床へとそうツと抱い

て行かれるのを感じた。其所で、彼は深い睡りに陥て行つた。

### 九、不思議な遊戯

オリヴァーが、長い熟睡から眼を覺したのは、次の朝遅くであつた。部屋には、年老つた猶太人だけがゐて、ソース鍋で、朝飯の珈琲を煮て、低い口笛を吹きながら、鐵の匙で鍋の中を掻き廻してゐた。彼は時々、階下から、ちよつとした音でも聞えて來ると、手を止めて凝乎と耳を澄ました。で、何んでもないと安心すると、又口笛を吹き、鍋を掻き廻すのであつた。

オリヴァーは、起きたには起きてゐたが、未だ眼が覺めきつてはゐなかつた。人間は、誰にでも、半眠半醒ともいふべき、ウツラ／＼した状態がある。さういふ場合には、半分眼を開けて、周圍に起つて居る事柄は、皆半分知つてゐるといふ状態で、たつた五分の間に、眼をすつかり閉ぢて、五官が全く無意識の中に包まれてゐる場合の五晩の間に夢みるよりも、すつと多くの夢をみるものである。さういふ場合には、人間の心が、肉體の抑制から釋放された時の自分の大なる力と、時間と空間を蹴飛ばし、地球から飛び出して行くことの觀念をかすかに認めるだけの程度に於いて、自分の心の働きを知る事ができるものだ。

オリヴァーは、丁度さういふ状態にあつた。彼は、半分瞑つた眼で猶太人を見、低い口笛を聞き、ソース鍋の縁に當る匙の音を聞き分けた。それでゐて、それらのものを見たり、聞いたりで居る同じ五官が、同時に、オリヴァーが、それまでに知つた殆ど凡ての人の事を、心に思ひ浮べさせてゐた。

珈琲ができるのと、猶太人は、爐側面臺へとソース鍋を引つ張つた。それから、何をしたものか思案がきまらない様子で、一二分茫然と立つてゐてから、ぐるりと振り返つて、オリヴァーを見て、名を呼んだ。オリヴァーは返辭をしなかつたので、どう見ても眠つてゐた。

その點には安心して、猶太人は、そろ／＼と、戸の方へ行つて、錠をかけた。彼は、そこで、床の何所かにある隠し穴（オリヴァーはさう思つた）から、小さい箱を出し、それを卓子の上へ徐かに置いた。蓋を開けて、内部を見た猶太人の眼は光つた。卓子へと、古い椅子を引き寄せ坐つて、寶石で燦々する美事な金時計を箱から取り出した。

肩を縮め、顔ぢうを氣味の悪い笑ひで歪め、嬉しさうに何か吹きながら、猶太人は元の場所へと時計を戻した。それから、同じ箱から少くとも六つ程の時計を出して、同じやうな嬉し氣な顔付で、それを調べた。その他、指輪だの留め針だの、腕輪だの、その他の寶石入りの品をば、幾つも取り出したが、それはみな見事な材料で、精巧な細工のものであつて、オリヴァーなどには、その名さへもまるで分らないやうな品々であつた。

さういふ裝飾品をば、みな箱へ戻してから、もう一つ何か取り出したが、それは、彼の掌へ入つてしまふ程、極く小さい物であつた。それには何か極く小さい字が書いてあるらしかつた。猶太人は、それを卓子の上へ置いて、手で蔭をしながら、長い間、一生懸命に見てゐた。たうとう諦めたら

しく、それを下へ置いて、椅子の背へ身體を凭りかゝらして、呟いた。

「死刑はい、ものだな。死んだ奴は、決して懺悔をしない。死んだ奴は、都合の悪い話しを世間へ持ち出さない。うん、この商賣にやア、至極結構なものだ。奴等五人が、一と並びになつて、空でぶら下つたのだ。誰も同類を裏切る隙りになるものはなし、密告をするやうな腰抜けも、もうなくなつたわい」

そんなことを言つてしまつてから、前の方を茫然凝視めてゐた猶太人の光つた黒い眼が、オリヴァーの顔へと向いた。少年は、黙つた不思議さうな眼で、猶太人の方を凝視めてゐた。眼を見合せたのは、ホンの全くの瞬間の間であつたけれども、自分のしてゐたことを見られたのだと、猶太人が氣が附くには、それで十分であつた。彼は音高く、箱の蓋を閉め、卓子の上にあつたベン切りの小刀を掴んで、物凄い權幕で立ち上つた。それも彼は酷く慄へてゐた。酷く、怖れたオリヴァーにも、小刀が宙でブル／＼顛へてゐるのが見えたのだ。

「これ、どうしたのだ？ 何んで先程から俺を見てゐたのだ？ 何故起きてゐたのだ。貴様は何にを見たのだ？ さア、言へ、小僧。さア、早く言へ——早く言へ。生命が惜しけりやア」

「あたしは、もう寝られなかつたんです。御用の邪魔になつて済みませんでした」

さうオリヴァーは順温しく答へた。

「貴様は、一寺殿前から起きてゐなかつたか？」

猶太人は凄い顔で少年を睨んだ。

「いゝえ——いゝえ起きてません、いゝえ——起きてませんでした。ほんとに」

「確かに本當か」

猶太人は、尙一層凄い顔で、恐ろしい權幕になつた。

「確かに、ほんたうに起きてませんでした」

オリヴァーは、一生懸命になつて、さう答へて、

「あたしは起きてませんでした、本當に」

「よろしい、よろしい、お前」

猶太人は、不意に元の通り穩やかになつて、只冗談に取り上げたのだと思はせるかのやうに、それを置く前に、寸時の間小刀を手で玩具にするやうにした。

「勿論さうだらう。わしもそれは知つてゐた。だが、お前を脅して見ようとしたまでだ。お前は強い。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、お前は強い少年だ、オリヴァー」

猶太人は、手を擦り合せて笑つた。だが、それでも心配さうに、箱の方をチヨイ／＼見た。「お前は、この内部の綺麗なものを見たかな？」

寸時黙つてゐた後で、箱の上へ手を掛けて、猶太人が言つた。

「え、見ました」

猶太人は、少し蒼くなつて。

「いや、これは……これは、みんなわしの物だ、わしの少しの財産だ。わしの年老つた時の財産はこれだけだ。わしは世間から、吝嗇漢と言はれてゐるのだ。なアお前、只、吝嗇漢なだけだ、たゞそれだけだ」

そこで、オリヴァーは、起きていゝかと訊いた。

「いゝとも、お前、いゝとも。だが、待ちなさい。戸の側の隅に水壺がある。それを此所へ持つて来なさい。顔を洗ふ盤をやるよ、お前」

オリヴァーは起きて部屋を横ぎつて、跣で水壺を持ち上げた。で、振り返つた時には、箱はなくなつてゐた。

オリヴァーが顔を洗つてしまつた時分に、かげろふ小僧が歸つて來た。オリヴァーが、其前の晩、煙草を飲んでゐるのを見た、陽氣な若い友だちと一緒にあつた。それは、チャアレー・ベーツと言ふ名だと言つて、オリヴァーは紹介された。そこで、四人で朝飯を始めた。

「何うだ」

猶太人は、じろく／＼オリヴァーの方を見ながら、かげろふ小僧へ聲を掛けて、

「今朝は働いたらうなア、お前たち？」

「一生懸命」

かげろふ小僧が、さう答へた。

「釘のやうに」

チャアレー・ベーツが、さう言ひ足した。

「いゝ、兒だ、いゝ、兒だ。何が手に入つたな、かげろふ？」

「紙入れが二つばかり」

「入つてゐるかな」

「なか／＼ね」

かげろふ小僧は、さう答へて、緑と、赤の二つの紙入れを出した。猶太人は、内部をよく見て、

「それ程重くないな、だが、なか／＼よくできてゐる。上手な職人だ。なア、オリヴァー？」

「ほんとに、さうです」

オリヴァーが、さう言ふと、チャアレー・ベーツは、大聲で笑ひだした。何も笑ふやうなことはないのに、何故笑ふのであらうか、オリヴァーには不思議で堪らなかつた。

「お前の方は何んだ？」

「フアギンが、チャアレー・ベーツの方へ向いた。

「雑巾さ」(手巾のこと)

「うん」

猶太人は、チャアレーの出した幾枚かの手巾を、よく調べて、

「なかく、ものはい、……なかく、だが、お前、この印の附けやうがいかんな、チャアレー、この印は、針で抜かなけりやアいかん。オリヴァーに教へて、それをさせよう。なア、オリヴァー、何うだ？ アハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

「どうぞ」

オリヴァーは言つた。

朝飯が終ると、その陽氣な老人と、二人の小年は、實に不思議な遊戯を始めた。老人は、下袴の一方の衣囊へ、嗅煙草函を、もう一方の衣囊へ紙入れを、直衣の衣囊へ時計を入れ、頸へ鎖時計を掛け、シャツへ擬ひのダイアモンドピンを挿し、上衣のボタンをきつちりかけ、衣囊へ、眼鏡入れと、手巾とを入れて、街路を歩く老紳士の身振りで、ステッキを持つて、部屋をあつちへこつちへと歩いた。店屋の飾窓に見入つてゐるのだと見せるためであらうか、煖爐の所で止まつたり、戸口の所で止まつたりした。さういふ場合、老人は、何か盗まればしまいかといふ用心らしく、始終、四邊を見廻したり、交り番こに、自分の衣囊を、皆叩くのであつた。ところが、その間、二人の少年は、絶えず老人の後を踏んだ。老人が振り向く度に、眼にも止まらぬやうに、捷敏く身を隠して、老人の眼にか、らぬやうにするのであつた。たうとう、かげろふ小僧が、老人の足を踏み、チャアレー・ベーツが、後から突き當つた。それは全く、もの、はずみのやうにしたのであつたが、その刹那に、二人は老人から、實に驚くべき迅速さで、嗅煙草函、紙入れ、時計鎖、鎖、シャツピン、手巾——眼鏡入れまでも取つてしまつた。老人は、どの衣囊へ手を入れられても、それが、どの衣囊であるかを大聲で言ふのであつた。それで、遊戯は一旦終つて、又直きと同じく初めからやり返すのであつた。

若い女が二人訪ねて來た。一人はベットといひ、一人はナンシイといふのであつた。髪なども、後へ無造作に束ねてあるので、顔へ随分多く亂れかかり、靴も、靴下も大分汚なかつた。餘り嫋緻はよくなかつたのであらう。だが、顔へ紅白粉を塗り立て、あて、なかく、肥つた勢ひのい、女どもであつた。

その客は、長く遊んでゐた。そのうちに、チャアレー・ベーツが「蹄を動かさう」ではないかと言ひだした。オリヴァーは、それが遊びに出るといふ佛蘭西語に違ひないと思つた。何故だといへば、直きに、かげろふ小僧と、チャアレーと、若い女二人とが、その愛嬌ある年老つた猶太人から、小使錢を貰つて、一緒に出て行つたからなのだ。

それから少時経つて、猶太人は、自分の衣囊から、手巾を少しぶら下げて、出して、

「お前は、今朝の遊戯を見てゐたらう、なア、オリヴァー。わしが氣の附かないうちに、この手巾を取つて見なさい」

オリヴァーは、かげろふ小僧のやるのを見たとほりに、片手で衣囊の底を持ち上げ、もう一方の手で、衣囊から手巾を引き出した。

「やア、取れたか」

「これです」

オリヴァーは、手に持つてゐる手巾を見せた。

「賢い兒だ、お前は」

冗談好きな老人は、オリヴァーの頭を撫でて、さう褒めたてた。

「わしはお前のやうな利口な少年を見たことがない。さア、一志やる。かういふ風で行けば、今の世の中での一番偉い人になれる。さア此所へ來なさい。手巾の印を抜くことをお前に教へてあげる」

オリヴァーは、その老人の、衣囊の物を掏ることが、偉い人になる機会と、どう關係があるものなのか分らなかつた。だが、猶太人は、自分よりは、ずっと年の上な人であるのだから、その人の言ふことには、理由があるのであらうと思つたので、オリヴァーは、何んにも言はずに、老人の卓子へと行き、直き自分の新たな勉強（手巾の印を抜くこと）へ一生懸命に取り掛つた。

#### 十、「泥坊をつかまへろ」

それから幾日も、オリヴァーは猶太人の部屋に居て、澤山持つて來られる手巾の印を抜いたり、二人の少年と、猶太人が、毎朝必ずやる、前に言つたやうな遊戯に加つたりした。たうとう、彼は、新鮮な空気を吸ひにと、戸外へ出たくつて堪らなくなつた。それで、二人の少年と一緒に仕事に出してくれと、度々老人に頼んだ。

たうとう、或る朝、オリヴァーはそれまでそれ程一生懸命求めてゐた許しを得た。その二三日といふもの、手巾は、一枚も持つて來られなかつたので、印を抜く仕事はなかつたし、働かない罰だといふので、少年たちの食事は、極く乏しくなつてゐた。或はさういふことが、老人がオリヴァーに許しを與へた理由かも知れなかつた。だが、それは、兎も角として、老人は外に出てい、とオリヴァーに言ひ、チャアレー・ベーツと、その友達のかけろふ小僧とに、一緒によく世話をしろと言つて、二人にオリヴァーを託した。

三人の少年は、戸外へと飛び出した。かげろふ小僧は例の如く上衣の袖をたくし上げ、帽子を横つちよに冠り、ベーツ少年は、衣囊に手を突つ込んで、ぶら／＼歩いて行き、その間にはさまれたオリヴァーは、一體何所へ行くのだらうか、何ういふものを拵へる仕事を、最初は教へられるものであらうかと思ひながら、躓いて行つた。

ところが、二人は餘りぐ／＼と歩きながら、悪戯ばかりして歩くので、オリヴァーは、これは、二人は老人を誑して、仕事に行かないのではなからうかと思ひだした。かげろふ小僧は、小さい幼童の帽子を引つたくつて、家圍空餘へと投げ込む悪い癖があつた。チャアレー・ベーツの方は、財産權に對する考へがしつかりしてゐないと見え、溝側の露店から林檎や玉葱を方々で搔つ拂つて衣囊へ突つ込むのであつたが、その衣囊が又驚くべく廣いものであつて、彼の着物のあらゆる方向へと入り込



んであるやうな風に見えた。さういふことは、實にいけなと思つたので、オリヴァーは二人に別れて、何うにでもして、家へ歸ると言ひ出さうとしてゐた。ところが、不意に彼の考へが、他へと向けられた。それは、かげろふ小僧が、實に不思議な舉動をさせたからであつた。彼は不意に立ち止まつて、唇へ指をつけて、二人の友達をば、非常に用心した様子で引き戻した。

「何うしたんですか」

オリヴァーは訊いた。

「しいッ」

かげろふ小僧は、さう答へて、

「あすこの本屋に老爺があるだらう？」

「あ、彼方。年老つた方ですか。さうです。見えます」

「彼奴がい、」

かげろふ小僧が言つた。

「素敵だ」

さう、チャアレー・ベーツ少年が言つた。

オリヴァーは、非常に驚いて、二人の顔を交るゝ見たが、何にも尋ねることはできなかつた。それは、二人の少年が、こそくと街路を越して、その老紳士の方へと忍び寄つたからであつた。オ

リヴァーは、二人の後へ蹤いて、二三歩歩いたが、進んでいゝか、引つ返へしていゝか分らなかつたので、驚いて、茫然して、立つて見てゐた。

その老紳士は、極く品のいゝ人柄で、頭に髪粉をかけ、金の眼鏡を掛けてゐた。黒い天鷲絨の襟附きの濃緑色の外套を着て、白下袴を穿き、洒落た竹の杖を抱へてゐた。彼は、店臺から本を取り上げ、其所に立つて、自分の家の書齋の肱掛椅子にでもゐるかのやうに、周囲の何にも彼も忘れて、一生懸命に本に讀み入つてゐた。

かげろふ小僧が、老紳士の衣囊へ手を突つ込み、手巾を引き出し、それを、チャアレー・ベーツに渡し、二人とも全速力で駆け出して、角を曲つてしまつたのを見たオリヴァーの驚きといふものはなかつた。

忽ち、手巾や、時計や、寶石や、猶太人に就いての不思議全體が、オリヴァーの心に群り集つた。

彼は、恐怖のために、血が、彼の總ての血管の中をピリ／＼通つて、まるで、自分は燃え立つ火の中にでも、ゐるかのやうな心持になつて立つてゐたが、そこで、すつかり恐れて、面喰らつて、逃げ出し、全く全後を忘れて、一目散に駆け出した。

これは總て、一分かそこらの間のことであつた。オリヴァーが駆けだした丁度その途端に、老紳士は衣囊へ手をやつて見て、手巾の無くなつてゐるのに氣が附いて、ぱつと振り返へつた。非常な速力で逃げて行く少年を見て、彼は至極道理にも、彼はそれを賊だとしてしまつた。で、「泥坊をつかま

へろ」精一つばいの聲で叫んで、本を手に持ったまま、で、後を追つかけた。

追つかけたしたのは、老紳士ばかりではなかつた。かげろふ小僧と、ベーツ少年は、街路を駆けだしたら、人の注意を惹くだらうと思つたので、角を曲つた一番最初の家の戸口に隠れてゐたのみであつたが、叫び聲を聞き、オリヴァーが逃げて行くのを見るや否や、何ういふ状態であるかといふことを判然推察して、敏捷く出て来て、「泥坊をつかまへろ」と喚きながら善良な市人と同じやうに追つ手に加はつた。

「泥坊をつかまへろ、泥坊をつかまへろ」

この聲には、魔術がある。その聲を聞くと、商人は勘定臺を離れる。馬車輓夫は馬車を離れる。肉屋は盆を投げ棄てる。パン焼は籠を、牛乳屋は桶を、使ひ屋は小包を、小學校の小童はマーブルを、土方は鶴嘴を、幼童は羽子板を、といふ風に、誰も彼も、持つてゐるものを投げ捨て、たゞ滅茶苦茶に、ワイ／＼言つて駆けだし、角を曲る時には、通り懸りの人を突き倒し、犬を吠え立たせ、家禽を驚かすといふ騒ぎで、街路も、廣小路も、廣場も、その聲で、反響するのだ。

「泥坊をつかまへろ。泥坊をつかまへろ」

何百ともない聲がその叫び聲に應じ、角へ来る度に、群衆が増し集る。で、彼等は、泥濘の中を潑ねかし、敷石の上を蹴立てながら、飛んで行く。窓が上がり、人々が走りだす。で、群衆はドンドン押して行く、人形芝居の看客は、幕の真ん中でみんなドツと出てしまつて、駆けて行く群衆に加はつて「泥坊をつかまへろ、泥坊をつかまへろ」といふ聲を大きくして、それに新たな力を加へる。

「泥坊をつかまへろ、泥坊をつかまへろ」

何ものかを追ひ詰めるといふことは、人間の胸に深く根ざした情熱である。疲れて息をきらし、顔に恐れを現はし、眼に苦痛を見せ、顔に汗の大きな粒を流し、追つ手から駆け抜けよう、あらゆる神経を緊張さして逃げて行く一人の哀れな少年がある。すると、それを追跡して、刻々追ひ附いて行くものどもは、少年の力の衰へて行くのを見て、尙ほ一層高い聲で歡呼する。「泥坊をつかまへろ」

あゝ、どうぞつかまへてくれ、後生一生のお願いだ。

たうとうつかまつた。巧い一撃だ。彼は、敷石の上へ倒れる。群衆は、勢よく彼の周囲へ集る。後から来るものは、一眼でも見ようと、前のものを押しつけ、押し合ふ。

「どけ、どけ」

「も少し周囲を廣くしてやれ」

「馬鹿な、そんなことをしてやるに及ぶものかい」

「旦那はどうした？」

「あゝ、あそこへ來なすつた」

「旦那のために路を開ける」

「これが、それですか、旦那」

「左様」

オリヴァーは、泥と塵にまみれ、口から血を流して、倒れて、押し重なつて、彼を取り巻いてゐる人々の顔の集りをば、物狂ほし氣に見廻してゐた。そこへ老紳士が、眞つ先の追つ手の中の世話好きの連中に引つ張られて、圓の中へと押し込まれた。

「左様。多分此兒です」

「多分ですつて。なに、確かに此兒だ」

群衆がさう呟いた。

「可哀さうに、怪我をして居る」

「あつしがやつつけましたよ、旦那」

大きい下司な男が前へ出て来て、

「うめえぐえゝに、口を拳固で喰はしやした。此奴をつかめえたなアあつしだ、旦那」

その男は、その手柄に何か貰ひたいと思つたのであらうが、ニヤ／＼して帽子へ手を掛けた。が、老紳士はさも蔑視んだ顔つきでその男を見、逃げださうと思つてゐるかのやうに、四邊を見廻した。そして、實際その考へを實行して、又もう一つの追つかけくらは始まるころであつたかも知れなかつたのだが、丁度其所へ警官（こんな場合には大抵一番遅くやつて来る人）が群衆を押し分けて入つて来て、オリヴァーの襟髪を掴んだ。

「これ、立て」

警官は聲荒く言つた。

「ほんとに、あたしぢやアありません。ほんとに、ほんとに、それはあの二人の少年です」

オリヴァーは、一生懸命に両手の指を組み合はし、四邊を見廻はして、

「何處か、此所にゐます」

「なにが居るものかい」

警官は皮肉の積りでさう言つたのであつたが、實は實際その通りであつた。何故だといふと、かげろふ小僧もチャアレー・ベーツも、途中から都合のいゝ最初の路次へ入つて、逃げてしまつたからなのだ。

「これ、立て」

「痛くしては、可哀さうですぞ」

老紳士は、可哀さうがつて言つた。

「いや、痛くなどせんです」

警官はさう言つたが、その證據に、オリヴァーの上衣の背中を下までビリ／＼と破つてしまつた。

「こら、貴様等の手はよく分つとる、とほけても駄目だぞ。こら、起きんか？ 悪魔小僧」

オリヴァーは立つ事もできなかつたのだが、それでも、何うかやう／＼立ち上ると、直ぐに、上衣

の襟首を掴まれて、街路をば、非常な速足で引きずつて行かれた。老紳士は警官の側に附いて行き、群衆を押し分けて先へ出ることで出来る者どもは少し先へ出て、オリヴァーを振り返りく見た。小童たちは勝鬨を揚げた。さういふ風で、みんなは推して行つた。

## 十一、警察法廷

犯罪は、市内の極く名高い警察署の管内、而も、其附近で起つたものであつた。オリヴァーは裏門から伴れ込まれた。人々が入つたのは、石を敷いた小さい庭であつたが、其所へ、頬髻を生やした肥つた男が手に鍵の房を持つて出て来た。

「何んだね、今度は？」

その男は無頓着に言つた。

「小僧のフォーグル師（註、手衣泥坊の意味）さ」

オリヴァーを拘引して来た警官が答へた。

「被害者は貴下ですかね？」

「左様、私です」

老紳士は答へて、

「ですが、この兒が實際盗んだのか、何うかたしかではありません。私は……私は訴へまいかと思ひます」

すが」

「もう、此所では、司法官の前へおいでなさらんぢやアならんでせう」

さう鍵の役人は答へて、

「磔刑小僧」

「閣下はもう直ぐお手すきになります。さア、こら、磔刑小僧」

これが、その役人がさう言ひながら開けた戸口へとオリヴァーに入れと言ひかけた言葉であつた。その戸口は石の房囚への入口であつた。オリヴァーは其所で身體ぢうを探されたが、何にもなかつたので、そのまゝ閉ぢ籠められた。

この房は、形と大きさでは、先づ床下穴倉ぐらゐのもので、たゞそれほど明るくなかつただけであつた。それは實に汚なかつた。月曜日の午前であつた。その房には、土曜日の晩から掛けて、六人の泥酔漢がゐた後であつたのだ。だが、それは何んでもない。吾々の警察署では、男や女の毎晩實にくだらぬ事件で留置されるものが少くないのであるが、その留置所にくらべると、裁判され、有罪となり、死刑を宣告されるといふやうな、最も奸悪な罪人等の入つてゐるニューゲイト監獄の房の監方が、宮殿といつていゝくらゐである。これを疑ふ人は、誰でも兩方をくらべて見るが宜しい。

「何うも、あの少年の顔が氣になる」

老紳士は、本の表紙で顎を叩いて、考へ込んで、徐々歩きながら、

「何うも氣になつていかん。彼兒に罪はないのではなからうか？ 何うも彼兒は——いや」

老紳士は、不意に立ち止まり、空を見詰めて、

「やア。あの顔は、どこかで見た人に似てゐるぞ？」

彼は少時の間考へてから、同じ考へ込んだ顔付で、庭から入るやうになつてゐた奥の前部屋へ入つて、隅へ行つて、昔から會つたさままゝの男女の顔を思ひ浮べた。

「いや、何うも氣のせめかかも知れん」

老紳士は、オリヴァーの顔に似てゐる人の顔を、誰も思ひ出すことはできなかつた。間もなく、老紳士は、署長の、名高いファンング氏の前へ伴れて行かれた。

部屋は、腰板附の壁の、正面廣間であつた。ファンング氏は、奥の端の隔欄の彼方に坐つて居り、戸の一方の側に、木の檻のやうなものがあつて、哀れな小さいオリヴァーは、もう其所へ入れられてゐて、森嚴な光景を見て、ひどく慄へてゐた。

ファンング氏は、髪が餘り多くなつて、頭の後と横だけに生えてゐる瘦せた、脊の長い、猪頭の、中脊の人で、顔は、氣難かしさうな赤つ面であつた。

老紳士は、丁寧にお辭儀をして、司法官の書記臺へと言つて、

「これが私の名と住所でございます」

さう言つて名刺を出した。

所が、その時ファンング氏は、自分のことをひどく攻撃したその日の或る新聞の論説を讀んでゐるところであつたので、ひどく機嫌が悪かつた。で、彼は怒つた顔を上げて睨んだ。

「貴様は誰だ？」

老紳士は少し驚いて、自分の名刺を指さしした。

「係り官」

ファンング氏は如何にも傲慢な態度で、新聞と一緒に名刺を側へ押しつけて、

「こいつは何者だ？」

「私の名は、ブラウンローでございます。裁判官席の保護のもとに、相當の身分のものに對して、謂れなき侮辱をお加へになる司法官のお名前を承りたい」

ブラウンロー氏は、自分の尋ねることに答へてくれる人を捜すでもするかのやうに、部屋を見廻はした。

「係り官、こいつの罪は何んだ？」

「この方は犯人ではありません、閣下。この方は、あの少年に對する告訴人です」

「少年に對する告訴人だ？ ふん」

ファンングは、頭から足へと、さも傲慢な顔付で、ブラウンロー氏を、じろく見て、

「宣誓させろ」

「宣誓致します前に一言申し述べたい。それは、私は實際の経験はありませんが、どうも實に……」

「黙らつしやい」

「黙りません」

「びつたりと黙れ、さうでなければ、此所から追ひ出すぞ、貴様は五月蠅い無禮な奴だ。司法官に反抗するか？」

「何んだ」

老紳士は、眞つ赤になつて聲を高くした。

「この男を宣誓させる。俺はもう何にを言つても聞かんぞ。此奴を宣誓させる」

ブラウンロー氏は、ひどく腹が立つたが、しかし自分が怒つては、少年のためにならぬかも知れぬと考へ直して、堪へて宣誓した。

「さア、この少年に對する告訴は何んだ？ 君の申し立ては何んだ？」

「私は、本屋で立つて居りました……」

ブラウンロー氏は、さう言ひ始めた。

「黙らつしやい。巡查。何處に巡查が居るか？ これ、この巡查を宣誓させる。さア、巡查、これは何んだ？」

巡查は、恭々しくオリヴァーをつかまへたことを述べて、オリヴァーの身體を調べたが、何んにも持つてゐなかつたことを言ひ、自分の知つてゐることはただそれだけだと言つた。

「證人があるか」

「いや、誰も居りません、閣下」

それから、オリヴァーの調べが始まつた。

「さア、こゝではとぼけても駄目だぞ、ごろつき小僧、さうはいかんぞ。貴様の名は何んだ？」

オリヴァーは、答へようとしたが、口がきけなかつた。眞つ蒼になつて、部屋中がぐるぐる廻るやうな氣がした。

「貴様の名は何んだ？ し太い悪黨小僧。係り官、此奴の名は何んだ？」

さう聲を掛けられたのは、隔欄の側に立つてゐた、縞の直衣を着た下司張つた老人であつた。彼は、オリヴァーを上から覗き込み、問ひを繰り返した。が、實際、オリヴァーには何にも分らなくなつてゐるのを見、若し返辭をしなかつたら、司法官が尙ほ一層腹を立て、ひどい宣告をするに違ひないと思つたので、當てずつぼうを言つた。

「名前は、トム・ホワイトだと思つて居ります、閣下」

この優しい心の捕盜官が言つた。

「うん、判然言はんのだな、うん？ 宜しい、宜しい。住所は何所だ？」

「定まつてゐません、閣下」

係り官は、オリヴァーの返辭を聞いたやうな顔付をして、さう答へた。

「両親があるか？」

「両方とも幼童の時分死んだと申して居ります、閣下」

係り官は、大抵さうだらうと、又當てずつぼうを言つた。

密問がそこまで来ると、オリヴァーは頭を上げて、哀れな眼で見廻して、水を一杯飲してくれと、弱々した聲で言つた。

「何に、馬鹿な。俺を馬鹿にするな」

ファング氏が怒鳴つた。

「實際病氣のやうです、閣下」

さう係り官が取りなした。

「いや、そんなことは俺の方がよく分つてゐる」

「何んとかしてやつてください、係り官。直き倒れます」

老紳士は、我れ知らず手を舉げた。

「どいて居ろ、係り官、倒れたけりやア、勝手に倒れさせろ」

さうファングが怒鳴つた。オリヴァーは、氣絶して床へ倒れた。部屋の中の人々は、互ひに顔を見合せたが、誰も動かうとする者がなかつた。

「なに、威した。倒れさして置け、直きに飽きる」

「何う御判決になりますか」

低い聲で書記が訊ねた。

「略式だ。三ヶ月——勿論、重懲役だ。さア、みんな退げろ」

さうするやうにと、戸が開けられた。そして、二三人で氣絶して居る少年を囚房へと擔いで行かうとしてゐたが、其所へ、黒い古服を着た、相當の身分らしい男が、部屋へ駆け込んできて、裁判官席の方へと進んで行つた。

「待つてください。待つてください。伴れて行かないでください。何うぞ寸時待つてください」

「これは何んだ。これは誰だ。これは何者だ。こいつを追ひ出せ。みんな退げろ」

「私は何うしても言ひます。何うしたつて追ひ出されません。私はみんな見ました。私は本屋をやつて居ります。さア、宣誓してください。私は何うしても黙りません、ファングさん。何うしても私の陳述を聞いてください。聞かんとやつても承知しません」

その男の言ふのは道理であつた。彼の様子は、挺でも動きさうになかつた。事件がかうなつては、押へつけてしまふ譯には行かない。

「その男を宣誓させろ」

ファング氏は如何にも不機嫌さうに犬の唸るやうな聲を出して、

「さア、お前の言ふことは何んだ？」

「それはかうです。初めは三人の少年がゐました。この被告と、もう二人の少年が、この紳士が本を  
読んでおいでの時、街路の彼方側にブラ／＼してゐました。手巾を盗んだのはもう一人の少年です。  
私はそれが盗むのを現在見ました。この少年はそれを見て、全く驚いて、呆れて茫然して立つてゐま  
した」

この時分には、もう少し氣息を恢復したその本屋は、もう少しよく續いた言葉で、その時の正確な  
事態を申し述べた。

「何故お前は、もう少し早くこゝへ來なかつたのだ？」

少し黙つてゐてからファングが言つた。

「誰も店番が居りません。誰も彼も飛び出して追つ掛けて行つたので、手傳ひに來てくれるものが居  
りません。五分前まで、誰も店番がなかつたんです。で、店番が出來たので、此所までずっと駆けて  
來ました」

「原告は本を讀んでゐたね、さうかね？」

もう少し黙つてゐてから、ファングが尋ねた。

「左様、手に持つておいでのあの本です」

「うん、あの本だねえ？ 金は受け取つたのか？」

「いや、まだ」

莞爾／＼笑ひながら、本屋がさう答へた。

「やア、すっかり忘れてゐた」

虚心の老紳士は、無邪氣に聲を立てた。

「人もあらうに、あの憐れな少年をお前はよく訴へたものだな」

ファングは慈善深い風に見せようとしたが、それは噴飯すほど可笑しかつた。

「お前は、實に疑はしい怪しい状況のもとにその書籍を占有したやうに俺は思ふぞ。その財産の所有  
者が告訴しないのを非常に好運だと思はつしやい。これに懲りて、以後氣を附けなけりやアいかん  
ぞ。法律はいつまでもお前を許しては置かんからな、少年は釋放する。みんな退げろ」

「うゝん」

老紳士は今まで堪へに堪へてゐた憤怒を爆發させて、

「うゝん。わしは……」

「みんな退げろ、係り官。おゝい、みんな退げろ」

庭へ出ると、ブラウンロー氏の憤怒は、直ぐ靜まつて終つた。小さいオリヴァー・ツイストは、  
襯衣の釦を開けられ、額を水で冷やされて、敷石の上に仰向けに倒れてゐた。顔は死んだやうに白  
く、惡寒で身體ぢうが顫へてゐた。

「可哀さうに」



ブラウンロー氏は、オリヴァーの上へ身を屈めて言つて、

「馬車を呼んでください。何うぞ、となたぞ。直ぐに」

馬車が来ると、靜かにオリヴァーを一つの座の方に乗せ、老紳士自身はもう一つの座に坐つた。

「私も参りませうか」

覗き込んで本屋がさう言つた。

「やア、さア、何うぞ、すつかりあなたを忘れてゐた。いや、何うも。私はこの運の悪い本を矢張り持つてゐる。さア、お入り。可哀さうな少年だ。直ぐに手當をしてやらにやアならん」

本屋は馬車へ入つた。さういふ風で、オリヴァーはブラウンロー氏の家へ伴れて行かれた。

オリヴァーはその家で親切に世話されて、幾日もかゝつて、身體が恢復した。或る日、ブラウンロー氏は、オリヴァーと話してゐるうちに、部屋の壁に懸つてゐる肖像を見て、その顔にオリヴァーの顔が好く似てゐるのに氣が附いた。

それから先きの話しは先づ措いて、かげろふ小僧や、ベーツ少年の親分の猶太人の話しをする。

## 十二、犬を連れた男

「オリヴァーは何うした。あの少年は何處へ行つた」

猶太人はかげろふ小僧の襟髪を掴んで、威しつめた。

「さア言へ、言はずば絞め殺すぞ」

フアギンの權幕が全く本氣らしいので、チャアレー・ベーツは二番目に自分も絞められまいものでもないと思ひ、何にしても、大丈夫な側にある方がいゝと思つたので、床へ膝をついて、氣狂ひの牡牛と傳話筒との間の聲のやうな高い喚き聲を續けざまに上げた。

「言はねえか？」

猶太人は怒鳴つて、かげろふ小僧をひどく振つた。それ程振られて、彼が大きい上衣の中にあられたのが實に不思議な位であつた。

「うん、係蹄にかゝつたんだい、只それだけだ。さア放せ、やい放さねえか」

一つ飛び上つて、大きな上衣を猶太人の手へ残して、跳ねだしたかげろふ小僧は、麵包焼叉を取り上げて、猶太人の直衣を目懸けて突いた。で、若し、それで突かれたら、猶太人は一二ヶ月は苦しむやうな傷を受けるところであつた。

けれども、猶太人はそんな老衰してゐるらしい男にしては全く意外な敏捷さで身を躲し、錫鍋を掴んで、相手の頭へと投げようとした。が、その途端に、ベーツ少年が全く恐ろしい喚き聲で彼の注意を惹いたので、猶太人は不意に向きを變へて、その若紳士へと眞正面にその鍋を叩きつけた。

「やア、これやア、いつてえ、何うしたんだ。俺に鍋を投げたなア誰だ？ 俺に當つたのが麥酒でな

く、鍋だつたら、たゞは置かねえ所だつたぞ。金持であながら、慾の皮の突つ張つた大笹棒の猶太人のくたばり損ひめ、捨てるものでつちやア水しきア捨て得ねえ奴だと思つたんだが、こりやア不思議なこともあるものだな。いつてえ、何うしたんだ、フアギン？ うん、俺の襟巻が麥酒漬になりやアしねえかな。さア、へえりやアがれ。蛆蟲め。てめえの親方に愛想をつかしやアしめえし、何にをぐづぐづしてやがるんだ。さア、へえれ。」

犬の唸るやうな聲で、さういふことを言つたのは、三十五位のでつぶり肥つた甲で、黒い天鷲絨の上衣で、ひどく汚れた薄褐色の半下袴、編み上げの靴、鼠色の木綿の長靴下といふ服装で、頭に褐色の帽子を冠り、頸には汚れくさつたベルチ（註 有名な拳闘家の名）好みの手巾を捲いてゐたが、彼はその長い裂けた先で、顔から滴る麥酒を受けてゐた。その時現れた彼の横平たい重々しい顔には、三日越しの鬚がはえて居り、睨みつけるやうな眼の片つぼの方は、近頃毆られた跡らしいさまさまの色を現はしてゐた。

「へえれ、やい」

顔ぢう二十個所も、引つ搔き傷だの裂け傷だの、ある毛深い犬が、部屋へとのそく入つて來た。

「何故、俺のめえへ立つてへえらねえのだ？ てめえ、偉くなりやアがつて、人めえぢやア、俺を主人に持つてゐることを恥かしがつてやアがるんだ、さうだらう？ 寝ろ」

この命令と共に、犬は部屋の隅の彼方へと蹴飛ばされた。それでもさういふことには馴れてゐる。見えて、聲も出さずに、極く温順しく隅で丸くなつて、如何にも眼つきの悪い眼を一分間に大凡二十度も瞬きさせながら、部屋の中をよく見て置くことにかゝつてゐるらしかつた。

「何事だ？ 少年を虐めるのか？ てめえ、慾張りの、故買者の老いぼれめ」

さう言つて、男は、ゆつくりと坐つた。

「てめえ、殺されねえのがめつけものだけ。俺が奴らならきつとやらア。俺がおめえの小僧なら、もうとつくにやつてるんだ。いや、だが、てめえぢやア後で賣り物に出す譯にやア行かねえからな。てめえなんざア、硝子罎に入れて人間の化物の標本にするより仕方がねえんだが、そんな大きい硝子罎を吹くところは何所にもねえからな」

「しいッ、しいッ。ミスタア・サイク。そんな大きい聲を出しなすツちやア」

「やい、ミスタアなんて、乙う持ちやげるない。てめえはそんな風に出やアがる時にやア、何時でも腹んなかぢやアアロクなたあ目論んぢやアあねえんだ。てめえ、俺の名は忘れやあしめえ、それを言へよ。俺はな、いよくてえ時にやあ、その名めえに恥ぢるやうなこたあしやあしねえぞ」

「まア、まア、そんなら、ビル・サイク。今日は何うも悪りい御機嫌だな、ビル」

猶太人は如何にも卑屈な、下手に出た様子でさう言つた。

「さうかも知れねえ。おめえだとして、餘まり御機嫌ぢやアねえだらう、我鳴りながら、物を投げ飛ばすやうぢやあ、だからよ……」

「いや、これ、飛んでもねえ」

猶太人は、男の袖をつかまへて、少年等へと指さした。

ミスタア・サイクスは左の耳の下へ繩か何かの結目をこしらへるやうな手眞似をし、右の肩へと頭をグツと曲げただけで、止したが、その手眞似の意味は猶太人にはよく解つたやうであつた。それから、サイクスは、此所へその儘書いたら到底讀者諸君には解らないやうなこゝ、いらの手合ひの間の通語だらけの言葉で、酒を一杯飲ませろと言つた。

「だが、毒は入れねえでくれよ。」

ミスタア・サイクスは卓子へ帽子を置いて言つた。これは冗談であつた。だが、サイクスにして、戸棚へと向いた猶太人が唇を嚙んだ奸惡な嘲弄の顔つきを見ることができたのであつたら、彼はさういふ注意は全然不必要だといふのではないことを知るのであつたらう。

酒を二三杯飲んでから、サイクスは少年等にも話しかけたので、オリヴァーのつかまつた原因や様子を詳しく話されるやうになつた。尤も、それはかげろふ小僧が自分に都合のいゝやうに眞實虚偽取まぜて巧く作り上げた話ではあつたけれども。

「彼兒が吾々の困まるやうなことを言ふかも知れんぞな」

「其所もあらうぜ」

サイクスは、意地悪くニヤ／＼しながら、

「でえぶおめえが危ねえぜ、フアギン」

猶太人はそれは自分ばかりの問題ではないといふので、しきりに心配しだした。外の者どもも黙つて考へ込んでしまつた。

「誰かに警察での様子を聞いて來させるんだな」

サイクスがずつと聲を低く、した。猶太人は頷いた。

「そいつが、饒舌らねえで、そのまゝ、打ち込まれたんなら、出て來るまで心配はねえ、だから、出て來たところで、何んとかするんだな。さうなりやア、何うにかしてつかめえねえぢやアいけねえ」

もう一度猶太人が頷いた。成る程、この方法のいゝ事は明らかであつた。だが、それをやるには、何うにも困る理由が一つあつた。其所にあるものは誰も彼も、何んな理由にしろ、何んな辭柄のもとにしろ、警察署の近くへ行くことは七里結界であつた。誰も彼も思案に暮れて、たゞ顔を見合すばかりで、長いこと坐つてゐたが、そこへ、オリヴァーが前に見た若い女二人が入つて來た。

「しめた。ベットに行つて貰はう。何うだい、おめえ」

猶太人は、敢へて燦びやかといふのではないにしても、赤い長上衣、緑の靴、黄色い縮紙といふ派手な服装の方の女へ聲をかけた。

「どこなの？」

「なに、一寸警察までだよ、ねえ」

猶太人は機嫌を取るやうに言つたが、女は、ならうなら、願ひ下げにしたいと言つた。猶太人はが  
つかりした顔付になつて、もう一人の女へと向いた。

「ナンシイ、お前さんはどうだ？」

「駄目よ、そんなことを言つたつて、フアギン」

「何にいッ？」

サイクスが怫然とした顔を上げた。

「今言つた通りよ、ビル」

女は平氣で答へた。

「いや、こりやア、おめえにかぎる。おめえの顔は此所ぢやア誰にも知れてねえんだからなア」

「それならそれに越したこたアないぢやないの、あたしの方も眞つ平よ、ビル」

「此女に行つて貰はう、フアギン」

「い、え、行かないよ」

「い、や、此女は行く、フアギン」

で、それはサイクスの言ふ通りであつた。威したり、賺したり、金をやると言つたりして、やうやうと口説き落した。この女は、この頃遠くの郊外から、このフィールド・レエンの近邊へ来た者で、知り人に顔を見られる惧れもないので、他の連中ほどの心配はなかつたのだ。それで、長上衣の上へ清潔な白いエプロンを掛け、麥藁帽子の下へ、縮紙を突つ込んで（エプロンと帽子は、二つとも猶太人の無盡蔵の貯蔵物の中から出したものだが）ミッス・ナンシイが出掛けようとした。

「これ、寸時、お前さん」

猶太人は蓋のある小さいバスケットを出して、

「これを片手に持ちなさい。ずつと素人らしくなるからな」

「もう一つの手に戸の鍵を持たせろ、フアギン、眞物らしくな」

さういふ服装でナンシイは、兎に角何事もなく警察へ辿り着いた。

裏門から入つて女は、鍵で囚房の戸を叩いて、耳を澄した。何んの音もしない。それで咳をして、又聞き入つた。それでも答へがないので、優しい聲で、「ノリイ、ね、お前？ ノリイや？」と言つてみた。

内にはフリユウト（笛）を吹いて乞食をしたといふので留置された男がゐたが、返辭をしなかつた。で、ナンシイは次の囚房を叩いた。

「え、？」

「小さい男の兒は此所にゐないの？」

その前に一つ啜り泣きの聲をして置いて、ナンシイがさう尋ねた。  
「いや。飛んでもねえ」

これは、六十五の放浪者であつた。この方はフリートを吹かないがために留められてゐたのだ。言葉を換へて言へば、無職で街路で乞食をしたからなのだ。次の囚房には、許可なしに錫鍋のソースを呼び賣りした男がゐた。彼は職は持つてゐたのだが、印紙局を眼中に置かなかつたのだ。(註・商品には収入印紙の如きものを買つて貼付すべき規則なりしと見ゆ)

さういふ風で、オリヴァーといふ名で留め置かれてゐるものもなし、又さういふ少年を知つてゐるものもなかつたので、ナンシイは縞の直衣の武骨な役人のところへ行つた。そして、如何にも哀れな泣き聲を出して、自分の可愛い弟を歸へしてくれと哀願した。

「わしのところには居らんよ」

「ぢや何所にあるのよ？」

如何にも顫動した風でナンシイが金切り聲を立てた。

「いや、紳士が伴れて行つたよ」

「何んな紳士なの？ あら大變だ、どんな紳士なのよ？」

さうナンシイが喚き立てた。

その年老つた役人は、オリヴァーが釋放された事情と原告の老紳士が氣絶した少年を住居へと伴れて行つたことを話したが、その住居は馭者にベントンヴィルへ行けと言つてゐたので何所かその邊なのであらうと言つた。

如何にも心配した風で、ナンシイは門を駆け出たが、門を出ると、一目散に駆け出して、いろ／＼の廻り路をして猶太人の家へと歸つた。

ナンシイが持つて歸つた情報を聞くや否や、ビル・サイクスは直ぐ白犬を呼び起し、帽子を冠つて、挨拶もせずにとん／＼出て行つた。

「おいお前たち、何うあつても彼兒の居所を突き止めねえぢやアならねえ、何うあつてもめつけにやアならねえわい」

猶太人はひどく氣を焦立て、

「チャーレイ、貴様は方々歩いて彼兒のことを何んでもいゝから聞き出して來い。ナンシイ、なア、お前さん、何うしても彼兒をめぐつてくんないよ。かうなりやアお前たちとかげろふばかりが頼りだ、骨折つてくれ、頼む。待て、待て」

猶太人はさう言ひ足して、顫へる手で抽斗を鍵で開けて、

「さア金だ、お前たち。俺は今夜この店を閉める。俺の行く所はみんなに知らせる。此所にやアもう一刻もあるな、一刻もあちやア駄目だ」

さう言つて、猶太人は三人を部屋から押し出した。そして、戸を二重に鍵を掛け、門を下して、前に不用意にオリヴァーに見られた箱を隠し穴から引つ張り出し、大急ぎで時計や寶石を着物の奥へと入れた。

戸を叩く音で彼は手を止めた。

「誰だ？」

猶太人は金切り聲で怒鳴った。

「おいらだよ」

鍵穴からかげろふ小僧の聲がさう答へた。

「何んだ、用は？」

「彼兒は他の葉へしよつ引いて行くのかい、ナンシイがさう言ふんだね？」

「さうだ。何處でつかまへてもな。居所を突き留めろ、居所を突き留めろ、それだけでいい。それがらのこたア何うでもなる、大丈夫だ」

かげろふ小僧はよく解つたといふ返辭をして、二人と共に階段を駆け下りた。

「彼兒、未だ饒舌つてゐねえなア」

猶太人は品物を詰め込みながら、

「若し行つた先きで、奴等に饒舌る積りでも、彼兒の口を閉がせる間はまだあるわい」

### 十三、素人に化けた女

リッル・サフロン・ヒルの最も汚い部分にある、下等な酒屋の薄暗い廣間、冬は瓦斯の灯が終日燃え、夏でも日の光りが少しも差し込まないといふやうな暗い陰鬱な部屋に、酒の香の強く染み込んだ小さい錫の徳利と杯を前に控へて、天鵞絨の上衣、薄褐色の半下袴、編み上げ靴、長靴下の男が、凝乎と考へ込んで坐つてゐたが、そんな薄暗いところでも、何んな新前の刑事でも、その男が、ミス・ア・ウイリアム・サイクスであることを認めるのには少時も躊躇しなかつたであらう。脚下に坐つてゐる赤い眼の白い犬は、同時に兩方の眼で主人の方へと瞬きしたり、この頃の咬み合ひの結果らしい口の隅の大きい生々しい傷を舐めたりしてゐた。

「静かにしろ蛆蟲め、静かにしろ」

サイクスの聲が不意に、静寂の中で聞えた。餘んまり考へ込んでゐるので、犬の瞬きさへ邪魔になつたのか、それとも、むしろやくしや腹の持つて行き所を犬へと向けようとしてゐたのか、それはどちらとも分らぬが、兎に角その結果は犬が蹴られて怒鳴りつけられた。

犬は、どの犬でも主人にひどい目に遭つても大抵楯つくものではない。けれども、サイクスの犬は主人と同じやうに怒り易い質であつた。で、虐められたことをひどく恨んだらしく、暗雲に半靴の片つぽへ喰ひ附いた。そして、それを強く一振り振つてから、唸りながら腰架の下へと引つ込んだが、さうしたために、サイクスが彼の頭へと投げつけた錫の徳利を避けたのだ。

「やい、こら」

サイクスは片手に火掻棒を握り、衣囊から出した大きい懐中小刀を片手で緩る／＼開きながら、

「さア出て来い、悪魔め、出て来い。やい」

サイクスの聲はひどく暴かつたので、犬に聞えたには違ひなかつたが、喉を一突きにされるのは嫌だと思つたらしく、矢張り引つ込んだまゝで、尙ほ一層烈しく唸ると同時に、火搔棒の先へ喰ひ附いて、野獸のやうにそれを咬んだ。

その抵抗でサイクスは益々腹を立て、膝をついて、全く烈しく犬を苦しめた。犬は右から左へ、左から右へと跳んで、咬みつかうとし、唸り、吠え、人は突き、罵り、殴り、怒鳴つた。で、その争闘が最も高潮に達した時分に、戸が不意に開いて、犬は、手に火搔棒と、懐中小刀を握つたまゝ、のビル・サイクスを部屋へ残して、外へ逃げ出した。

喧嘩には相手がなければならぬ。これは古い諺だ。ミスタア・サイクスは、犬といふ相手がなくなつたので、直ぐ喧嘩をそこへ入つて来た人間へと移した。

「何んだつて貴様は、俺と犬の間へへえりやアがるんだ？」

ひどい権幕でサイクスはさう言つた。

「知らなかつた、おまへ、知らなかつた」

さう温順しくフアギンが答へた——來客は猶太人であつたのだ。

「なに、知らなかつた、てめえ腰抜けの泥坊老爺め、てめえあの音が聞えなかつたのか」

「いや、ちつとも、全く、ビル」

猶太人は手を揉み合せて、卓子に坐つた。

「あれがすつかり埧塙を通つたのでな、これがお前さんの分だ。思ひの外多いぜ、ねえお前さん、だが、又何か儲けさしてくんなさるだらうから、それでな……」

「おためごかしは措いて貰はうぜ。何處にあるんだ？ よこせ」

「あゝ、あゝ、ビル、待つてくれ、待つてくれ。此處にある。大丈夫だ」

さう言ひながら猶太人は、胸から古い手巾包を引き出し、隅の大きな結び目を解いて褐色紙の小さい包みを出した。サイクスはそれを引つたくつて、急いで開けて、入つてゐたソヴレエン金貨を勘定しだした。

「これだけか、え、？」

「それで見んなだ」

「てめえ途中で包みを開けて、一つ二つ呑み込みやアしねえか、え、？」

さう疑はしさうにサイクスは聞いて、

「そんな迷惑さうな面をするねえ、てめえ、幾たびもやつたぢやアねえか、おい、チン／＼を引つ張れ——」

竝の英語でいへば、これは呼鈴を鳴らせといふことであつた。それに答へて、フアギンより若い人相は負けぬ位悪いもう一人の猶太人が出て來た。

「誰もあないかな、パーネー？」  
フアギンが訊いた。

「ふとり（一人）も？」

パーネーはさう答へたが、この男の言葉は、心から出るにしろ、出ないにしろ、鼻を通つて出るのであつた。

「誰も居らん？」

驚いた聲でフアギンがさう訊いた。

「ビッス・ダッヂイばかり」

「なに、ナンシイだ？　ぢやア、伴れて来い、伴れて来い」

直きにナンシイが、パーネーに案内されて入つて来た。帽子、エプロン、バスケット、それから戸口の鍵と、すつかり支度ができてゐた。

「當りが附いたんだな、おい、ナンシイ？」

「え、さうよ、ビル、あたしもう飽き／＼しちやつた。あの餓鬼つたら、病氣で寝込んでちやつてる

んで……」

「あ、ナンシイ、お前さん」

さう言つて、フアギンが顔を上げた。

ところで、フアギンが赤い眉毛を變にビク／＼させ、深く窪んだ眼を、半分眠るやうにしたのが、サイクスには、そのことを餘り話すなといふナンシイへの合圖であつたかどうかは、此處ではどうでも宜しい。こゝでは、女がバツタリと、その話を止めて、サイクスの方へ、愛嬌のある笑顔を向けて、他の話しをはじめたことだけを言つて置けば宜しい。十分ばかり経つと、フアギンがひどく咳をしだした。すると、ナンシイは肩へ肩掛を掛けて、ちやうど出て行かなければならぬ時分だと言ひだした。サイクスは途中までナンシイと路が一緒だといふので、一緒に行かうと言ひだして、二人は連になつて出たが、主人が見えなくなるや否や、裏庭から忍び出た犬は、少し離れて、後から跟いて行つた。

猶太人はサイクスが出ると、部屋の戸口から頭を突き出して、暗い廊下を歩いて行くサイクスの後を見送つて、拳固を振り廻し、悪態を吐き、それから、凄いにや／＼した顔で卓子へと戻つて直きに「追跡」（註 本の名）の面白い頁に読み耽つた。

さてそこで、オリヴァー・ツイストのことになるが、ブラウンロー氏の友だちのグリム・ウィッダといふ片意地な老人が、オリヴァーを疑つて、かういふ少年は金でも持たせて使ひに出せば必ず歸つて来るものではないといふことを言ふので、オリヴァーをかたく信じてゐたブラウンロー氏が腹を立て、それでは賭をしようといふことになり、本代の金と取り換へる本とを持つて、オリヴァーが本屋へ使ひに行くことになつたのだ。



で、オリヴァー・ツイストは、陽氣な老人のフアギンが、直き近くにゐることなどは夢にも知らずに、本屋の方へと向つて行つた。クラークンウエルまで来たところで、思はず横丁へ迷ひ込んだ。で半分程行つて氣が附いたのではあるが、それでも本道へは出られると思つたので、引つ返へすには及ばないと思つた。で、本を抱へて、できるだけ速足で進んで行つた。オリヴァーは、自分はどう程幸せだか分らぬと思ひ、それにつけても、育兒所で別れたディックは、食物もロク／＼貰へず、毆られて今頃はひどく泣いてゐるであらうが、是非一眼でもその哀れな幼童に會ひたいものだといふふう  
に思ひながら歩いてゐたが、不意に「あら、あたしの可愛い弟」と、言ふ若い女の大聲で驚かされた。何に事だらうかと顔を上げようとした途端に、オリヴァーは、頸の周圍へしつかり掛けた誰かの  
兩腕で抱き止められた。

「嫌だッ」

オリヴァーはさう叫んで悶躁いた。

「離してください、誰ですか？ 何んであたしを止めるんですか」

これに對する答へは、オリヴァーを抱き止めた若い女の矢鱈に立てる高い歎き聲ばかりであつた。その女は手に小さいバスケットと、戸口の鍵を持つてゐた。

「お、やつとめつけたわ、お、オリヴァー。あたしにこんな苦勞を掛けるなんて、お前はほんとにいけない少年だね。家へお歸へり、お前、さアおいで。お、やつとめつけた。あ、ほんとに有難

いわ、やつとめつけたわ。

さういふ切れ／＼の大聲で、若い女は又ひどく泣きだした。で、餘んまりひどくヒステリーのやうになつたので、その時來かゝつた二人ほどの女は、それを見てゐた牛脂を塗られて髪の毛のピカ／＼してゐる肉屋の小僧に、醫者を呼びに行くのがよくはないかと訊いた。肉屋の小僧は、無精ではないにしても、ブラ／＼してゐるのが好きな性質しかつたので、それには及ぶまいと思つた。

「あら、いゝえ、いゝえ、いゝんですよ」

若い女は、オリヴァーの手を掴んで、

「あたしはもういゝんです。あたしはもうよくなりました。家へおいで、直ぐ。それはお前、情なしといふものだよ。さア」

「どうしたんです、お前さん？」

通りがかりの女の一人がさう訊いた。

「え、貴女、この兒はよく働く、ちやんとした兩親のところから逃げ出してから、もう一月になるんですよ。泥坊やなんか、さういふ悪い仲間に入つてしまつたもんですからね、お母さんの心配つてのはありませんでしたわ」

「いけない餓鬼だね」

「お前、お歸へり、さア、悪戯小僧」

「さうぢやありません」

オリヴァーはひどく驚いて答へて、

「この女は知らない人です。あたしには、姉さんも、お父さんも、お母さんも無いんです。あたしは孤兒です。ポントンヴィルにあるんです」

「まア、こんなことを言ふんですよ。のめく／＼とこんなことを」  
若い女が叫んだ。

「あらッ、ナンシイだね」

こゝで初めて女の顔を見たオリヴァーは、さう聲を上げて、ひどく驚いて後ずさつた。

「そら、ね、この通りあたしを知つてゐるんですよ」

ナンシイは、さういふ風に傍の人々に訴へた。

「この兒は未だ自分一人で何うする事もできない兒ですわ。家へ歸へるやうに言つて下さい、ね、あなたがた、お父さんも、お母さんも、あたしも、心配したらありやアしないからね」

「やい、何うしたんだ？」

白犬を伴れた男が、酒屋から飛び出して、

「オリヴァー。お母さんのところへ歸れ、小犬め。家へ歸れ、直ぐ」

「あたしはそんな家のものぢやありません。そんな人は知らないんです。助けて下さい。助けてく

ださい」

オリヴァーはさう叫んで、男に強く掴まれながら腕いた。

「なに、助けてくれ、さうよ、俺が貴様を助けてやらア、悪黨小僧。この本は何んだ？ てめえ搔つ

拂つたんだな、えゝ？ よこせ」

さう言つて男は本を引つたくり、オリヴァーの頭を殴つた。

「さうだ、さうだ、懲らしめにやアそれが一等だ」

屋根裏部屋の窓から見下した見物人が大聲で言つた。

「全く」

眠さうな顔の大王が、同じ窓から賛成の顔付で見下した。

「この兒のためになるわ」

さう二人の女が言つた。

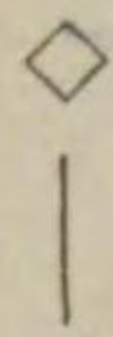
「うむ、うんと仕付をしてやらア」

男はさう應じて、もう一つ殴つて、オリヴァーの襟頭を掴んだ。

「來い、悪黨小僧め、これ、大眼玉（註、犬に言ふ）此兒を氣を附ける、おい。此兒を氣を附ける」

この頃まで病氣であつたオリヴァーは、不意につかまへられて殴られたので茫とし、犬の恐ろしい唸り聲と、男の手暴さに恐れ、見物人からは、心のし太くなつた不良少年だと定めてしまはれたの

で、もうさうなつては、一人のか弱い少年には何うにもしようがなかつた。暗くなりかけてゐた。四邊は、人氣の悪い場所であつた。助けてくれる人は近くにはゐなかつた。抵抗は無益であつた。直きにオリヴァーは、暗い狭い路次の蜘蛛手に曲つた中へと引きずり込まれ、彼が上げた一つ二つの叫び聲などは全く聞えなくするやうな早い足取りで引きずつて行かれた。尤も、その叫び聲が聞えやうが聞えまいが、それは一向に關係がなかつた。どれ程はつきり聞えたにしても、そんなことを氣にするものは、その邊には誰もゐなかつたのだ。



瓦斯が灯いた。オリヴァーを世話したミセス・ベッドウィンが心配しながら、聞いた戸口で待つてゐた召使はオリヴァーの姿が見えるかと、二十度も街へ出た。それでも、二人の老紳士は時計を中にして暗い客間で根氣よく坐つてゐた。

#### 十四、再び悪魔の巢へ

狭い街と路次は大きい廣場で盡きた。其處は動物の檻その他で家畜市場であることが分つた。サイクスは其處へ來ると歩みを緩めた。ナンシイがそこへ來るまで歩いて來た早い足取りをもうその上續けることができなくなつたのだ。彼は、オリヴァーを振り向いて、ナンシイの手につかまれと、聲よくオリヴァーに吩咐けた。

「やい？」

オリヴァーが躊躇つて四邊を見廻すと、サイクスはさう唸るやうに言つた。

其處は、通る人などの全くない暗い片隅であつた。オリヴァーは、抵抗しても全く駄目であることが明かに分つた。オリヴァーが差し出した手へナンシイはしつかりと自分の手を組み合せた。

「片つぽを俺の方へ出せ」

サイクスはさう言つてオリヴァーの空いてゐる手を掴んだ。

「やい、大眼玉」

犬は顔を上げて唸つた。

「いゝか、これ」

サイクスはオリヴァーの喉へ片手を掛けて、

「何んな低いんでも、聲一つ立てたら、此兒を押へる、いゝか」

犬は唸つて唇を話めて、直ぐにでも喉笛へ飛びつきたいやうな顔をして、オリヴァーを見た。

夜は暗く霧だつてゐた。刻々深くなつて街も家ももうす闇の中へ包んで行くそんな深い霧の中では、店屋の明りもたゞ茫然と照らすのみで、その何處とも知れぬ場所が尙ほ一層變にオリヴァーの眼には見えた。そして、この先何うなるだらうかといふ考へが、一層恐ろしく悲しかつた。

彼等が二足三足行くと、大きい教會時計が時刻を打つた。その最初の音で、二人は立ち止まつて、

音が聞えて来た方へと顔を向けた。

「八時だよ、ビル」

「そりやア、俺に言ふにやア及ばねえ、俺にも耳があるからな、さうぢやアねえか」

「あの人たちに聞えるか知らねえ」

「勿論聞えらア。俺が初めて打ち込まれた時にやア、バートルミー（註　バートルミー）の晩だつた。市場の玩具のラッパといふラッパが鳴つてゐたな。俺がその晩押し籠められてから、外の喚きと騒ぎてえなア大變だ、何時も騒がしい古い牢屋の中が、まるで野原のやうに淋しく思へて、俺はもう少しで戸の鐵板へ頭を叩きつけようとしたくれえだつたんだ」

「可哀さうな人たちね」

時計の音が聞えて来た方へと、矢張り顔を向けてゐたナンシイは、

「お、ビル、ほんとにいゝ若い人たちだつたわねえ」

「さうだ、まア若い女はそんなことを思ふだけだ。うん、いゝ若い奴等だ。うん、奴等はもう死んだとおんなじだ、だからもう何うでもいゝ」

さう心をなぐさめて、ミスタア・サイクスは、心の中へ湧き立つて来る嫉妬のこゝろもちを押へつけようとしてゐるやうであつた。そして、もつと強くオリヴァーの手首をにぎつて、また歩き出せと言つた。

「少しお待ちよ。次に八時が打つ時に、絞罪になるのがお前さんだつたら、あたしは急いでなんぞ通つてしまはないよ、ビル。あたしは、雪が積つてゝ、肩掛を掛けてゐなくなつて、倒れるまで何時までも其處を廻つてゐるわ」

「で、それで何うなるといふんだ？」

感傷的でないサイクスは、さう訊いて、

「おめえが丈夫な強い長い繩の先からドンとぶら下らねえんなら、おめえが五十哩歩いてゐやうが、それとも、ちつとも歩いてゐめえが、そりやア俺に取つちやア何うでもいゝんだ。さア出かけよう、おい、此處でお説教をして立つたつてつまらねえ」

女は笑ひだした。肩掛をもつとよく身體へ引きつけて、歩いて行つた。だが、オリヴァーは、女の手が顫へてゐるのを感じた。で、瓦斯燈の所を通る時に、顔を見上げると、それは死んだやうに白くなつてゐた。

たうとう殆んど古着屋ばかりのやうなひどく狭い街へ出た。犬は番をするに及ばないのを知つたかのやうに、前へ駆け出して行つて、空家のやうな閉つた店屋の戸口で止まつた。家はもう破れかゝつてゐて、一番下の戸口にはもう何年も其處に懸かつてゐたやうな貸家札が釘づけになつてゐた。

「大丈夫だ」

用心深く周囲を見廻したサイクスが叫んだ。

ナンシイは窓扉の下へ跼んだ。そしてオリヴァーには呼び鈴の音が聞えた。三人は、街路の彼方側へと渡つて、寸時の間ランプの下に立つてゐた。窓がそろりと開けられるやうな音が聞えた。で、間もなく戸がそつと開いた。サイクスは其處で怖がつてゐる小童の襟髪を無造作に掴んで、三人とも直ぐ家のなかへ入つてしまつた。

廊下は眞つ暗であつた。三人は自分たちを内へ入れた男が戸の鎖を引いて、締めまりをしてしまふまで待つた。

「この家にやア他に誰かゐるのか？」

ビルが訊いた。

「いゝや、あねえ」

さう答へた聲には、オリヴァーには聞き覚えがあるやうに思つた。

「ピカ（註 燈）を見せろよ。俺たちは頸の骨を折るか、犬を踏んづけるか何つちかだ。犬なら、脚を氣をつけな、それだけだ」

「寸時立つて、くれ、持つて来るから」

入つて行く蹺音が聞えた。やがて、ミスタア・ジョン・ドオキンス即ち、かげろふ小僧の姿が現はれた。彼は右の手に挾物棒の尖へ突つ込んだ蠟燭を持つてゐた。

かげろふは、一寸人を笑はすやうなニヤ／＼した顔付をしたきりで、オリヴァーには何んにも言は

ずに、身體を振り換へて、三人に手招きして、階段を下へと案内し、何にもない厨房を抜け、土の臭ひのする天井の低い部屋の戸を開けた。この部屋は小さい裏庭に建てたものらしかつた。

「立派になつたのを見て嬉しいね、お前さん」

猶太人は人を小馬鹿にした丁寧なお辭儀をして、

「その日曜の一張羅を汚しちやア勿體ないからな、かげろふがお前に代りのやつをくれる。何故、手紙でもくれて、来ることを知らしてくれなんだね？ 晩飯に何にか暖かい物でも拵らへて置いたものをなア」

「その中に、オリヴァーの衣囊を頻りにかき探してゐたかげろふ小僧が、五磅札を引つ張り出した。

「やア、何んだ、そりやア？」

猶太人が札を掴んだのを見て、サイクスは歩み寄つて、

「そりやア俺が貰ふぜ、フアギン」

「いゝや、いゝや、お前さん。こりやアわしが取る。お前さんには、本をあげる」

「それが俺のものにならねえといふんなら」

ビル・サイクスは斷乎たる風で帽子を冠つて、

「つまり、それが俺とナンシイのものにならねえといふんなら、その兒を元へ返しちまはう」

猶太人はギョツとした。オリヴァーの方はハツとした。この争ひが旨くかうじて、自分が歸される

やうに何うかなるやうにと思つたのだ。

「サア。よこせ、何うだ？」

「何うも公平でねえ、ビル。公平でねえ、なア、ナンシイ？」

「公平もへつたくれもねえやい」

さうサイクスはやり返して、

「やい、よこせ。ナンシイにしろ、俺にしろ、何時までも其處らをほつき歩いて、てめえがつかめへて来る餓鬼どもの逃げたのを一々しよつ引いて來られるものけえ。よこせ、業つくばりの骸骨老爺さア、よこせ」

さう言つて、サイクスは猶太人の握つてゐた札を引つたくつて、落着き拂つて、猶太人の顔を見ながら、小さく折り疊んで、襟卷のなかへ縛り込んだ。

「こりやア駄賃よ。だが、半分にも足りやアしねえ。おめえ、讀むことが好きなら、本を取つときねえ。嫌ひなら、賣つちまうさ」

「それはあの年取つた方のものです。あたしが熱病で死にかつてゐた時に、あたしを伴れて行つて、看病人をつけて癒してくだすつたあの親切な方のものなんです。何うぞ、それを送り返へしてください。本もお金も兩方ともあの方のところへ送り返へしてください。あたしは死ぬるまで此所へ置いとかれても構ひません。でも、何うぞ、何うぞ、兩方とも送り返へしてください。あたしが盗んだ

とあの方は思ふでせう。年老つた小母さんも、あたしにほんとに親切だつた人も、みんなあたしが盗んだと思ふでせう。あ、何うぞ後生ですから、本もお金も送り返へしてください」

はげしい悲しみの籠つたさういふ言葉で以つて、オリヴァーは、猶太人の脚下へ跪いて、全くの絶望の有様で手を打ち合せた。

「全くだ」

フアギンはさう言つて、こそくと見廻し、毛深い眉毛をグツと擧めて、

「お前のいふ通りだ、オリヴァー、お前の言ふ通りだ。奴等はお前が盗んだと思ふに違ひないな、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

猶太人は笑つて手を擦り合せ、

「俺たちが巧い時を選ばなかつたら、かう巧くは行かなかつたらうぜ」

「勿論そりやさうよ」

サイクスはさう答へて、

「此兒が本を抱へて、クラークンウエルを通つてゐるところを見ると、俺は直ぐそこへ眼をつけたんだ。奴等は涙ッぼろいお有難連共だからこそ、此兒を伴れてきやアがつたんだぜ。だからなア、此兒がけえらなけりやア、てつきり盗んで逃げたと思つて、行方が分つたら、訴へてぶち込ませなきやアならなくなるんで、此兒の行方なんぞ調べやアしねえ、此兒アもう大丈夫だ」

オリヴァーはまるで面喰つて、周囲の事柄が分らなかつたかのやうに、さういふ話の間、部屋の中のもの顔をそれからそれへと見てゐた。が、ビル・サイクスの言葉が終ると、不意に飛び起きて、部屋から滅茶苦茶に駆けだした。オリヴァーの上げた助けてくれといふ叫び聲は、伽藍洞の古い家を屋根まで反響させた。

猶太人と二人の手下とが、飛び出して追つかけて行くと、ナンシイは、

「犬を止めておくれ、ビル」

さう叫んで戸の所へ飛んで行つて、それを閉め、

「犬を止めておくれ、あの兒が喰ひ殺されるから」

「身から出た錆だ」

さう叫んだサイクスは娘の手を振り放さうと腕いた。

「放せ、でなきやアうぬの頭を、壁で叩き割つてくれるぞ」

「構はないよ、ビル、そんなことなんぞ構ふものかい」

娘は金切聲を立て、男を放すまいと烈しく争つて、

「あたしが殺されないうちは、あの兒を犬に喰ひ殺させない」

「殺さねえでか」

サイクスは切齒みをしながら、烈しい權幕で、

「離さねえんなら、打ち殺すぞ」

盜賊のサイクスは部屋の彼方の隅へと娘を突き飛ばした。丁度其所へ、猶太人と二人の手下の少年がオリヴァーを引きずつて歸つて來た。

「何うしたんだ？」

「フアギンが見廻した。」

「此女が氣がちがやアがつた、俺はさう思ふ」

サイクスが、暴らくしく答へた。

「いゝえ、さうぢやないわよ」

サイクスと取つ組み合つたので、未だ氣息が切れて顔の蒼くなつてゐるナンシイはさう言つて、

「いゝえ、さうぢやないわよ、フアギン、さう思はないでおくれ」

「では、静かにしろ、おい？」

猶太人は凄い顔で睨んだ。

「いゝえ、黙らないよ」

ナンシイは大聲になつた。

「さア、お前さん何うだね？」

ナンシイのやうな身の上の女の習慣では、その上話を續けることは、フアギンに取つてはなかな

か危いことになるといふことをフアギンはよく知つてゐた。で、部屋の連中の注意を他へ向けようといふ考へで、フアギンはオリヴァーへと向いた。

「お前さんは逃げようとしたね、これ、お前、え、？」

猶太人は、煖爐の隅にあつたギザ／＼した節くれ立つた棒を取り上げた。

オリヴァーは返辭をしなかつた。彼は猶太人の舉動を凝乎と見てゐて、氣息が忙しくなつた。

「助けを得ようとしたんだな、調査を呼んだな、うむ」

猶太人はオリヴァーの腕を掴へて嘲弄した。

「てめえのそのど性骨を叩き直してやるぞ、若旦那」

猶太人ははオリヴァーの肩へ棒を強く打ち下した。それから二度目にそれをふり上げた途端に、ナシイが前へ飛び出して、猶太人の手から棒を引つたくつて、火の中へ投げ込んだが、その力の烈しさで、燃えてゐる石炭が部屋の中へ飛び散つた。

「傍で見ちやアあられないわよ、フアギン」

娘はさう叫んだ。

「お前はこの兒をつかまへて来たぢやないの、それだけで澤山ぢやないの……この兒はこのまゝにし  
「いや、まあ、まあ、ナンシイ」

猶太人は猫撫聲で言つたが、持て餘した風でサイクスと顔を見合せてから、

「お前さんは……お前さんは、今夜は大分利口だなア。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ねえ、お前さんは素晴

らしく立派なことをするぜ」

「へえ、さうなの？ あたしがやり過ぎないやうに氣をおつけよ。若しさうなると、フアギン、お前さんのために善くはないだらうよ。だから、あたしなんぞにやア構はない方がいゝんだよ」

「そりやアなんてえ言ひ草だ？ 飛んでもねえことだ。てめえは何ういふ人間だか、てめえは何んだか知つてゐるか？」

先程から散々悪態を吐いてゐたが、何んの効果もなかつたので、サイクスがさう言ひだした。

「あ、さうよ、よく知つてゐるわ」

娘はヒステリーのやうに笑つて、平氣を装つて頭を振つた。

「ぢやア、靜かにしろ」

何時も犬に聲を掛けるやうな唸り聲でサイクスは應じて、

「黙らざア、この世ぢやア又と口のきけねえやうにしてやるぞ」

娘は又笑つた。だが、今度は益々落着きを失つて、サイクスをチヨイと、見て顔をそむけて、血が滲んで来るまで唇を噛んだ。

「てめえのやうな女が乙う上品ぶつて涙ッぼろい方へ廻るなんてぢやんちやら可笑しいや」



サイクスはさも蔑んだやうに娘をじろく見ながら、

「てめえは其兒を小童と言つてやアがるが、その小童の友だちになるにやアてめえは飛んだい、人間だな」

「知れたことさ」

娘は熱烈に叫んで、

「あたしはこの兒を此所へ伴れて來ることを手傳ふくらゐならばね、街路で打ち殺されるか、今夜ホンの先刻彼の世へ行つちまつたあの人たちの代りになつた方が餘つほどいと思つてくるくらゐなんだわ。この兒は今夜から泥坊、謔吐き、悪魔、悪りいといふ悪りい何んでもになるんだわよ。毆らないたつて、お前のやうな悪黨老爺にやアもうそれだけでい、んぢやアないの？」

「まア、まア、サイクス」

猶太人は慰解める調子でサイクスに聲をかけ、その場の有様を眼を丸くして見てゐた少年たちの方へと手眞似をして、

「穩かな言葉にしよう。穩かな言葉で、ビル」

「穩やかな言葉が聞いて呆れるわよ」

娘は見るも恐ろしいやうに怒り立つて叫んだ。

「穩やかな言葉が聞いて呆れるわよ、悪黨。さうさ、あたしはお前にそんな言葉をかけなきやアいけ

ないといふんだね。あたしはこの兒の半分ぐらゐの年のころから、お前のために泥坊をしたぢやアないか」

さう言つてオリヴァーに指ざして、

「それから二十年といふもの、同じ商賣、同じ仕事をやつてたんだい。お前は知つてるだらう？ さア言つて御覽、お前は知つてるだらう？」

「まア、まア」

猶太人は慰解めにとかゝつて、さう答へて、

「そりやア、さうにしても、暮らしのためなんぢやから」

「あゝ、さうさ」

娘はさう言ひ返へしてから、言葉を言ふのではなく、一つのつゞいた熱烈な叫び聲で言葉を注ぎ出した。

「それがあたしの暮らしなんだ。寒い濕つた汚い街があたしの家なんだ。何年も前から其所へあたしを追ひ出した悪黨はお前なんだ。あたしは死ぬまで夜も晝、夜も晝も、そんな暮らしでゐなきやアならないんだよ」

「たゞは置かねえぞ」

さう罵られて腹を立てた猶太人は言を挾れて、

「てめえがもつと言ふんなら、もつとひどいことをしてやるぞ」

娘は何んにも言はずに、狂亂の態で、自分の髪や着物を掻きむしり、猶太人へと烈しく飛びかゝつて行つた。若しサイクスが敏捷く手頭を捉へなかつたら、猶太人の身體へ強たかに復讐の印を残したのであつたらう。ナンシイはさうサイクスに押へられると、少し悶燥してから氣絶した。

「此女はもう大丈夫だ」

サイクスは、ナンシイを隅の方へ臥かせて言つた。

「かういふ風に怒りやアがると、腕の筥棒に強い女だ」

「女は何うもいけねえ」

猶太人は棒を置き直して、

「だが、氣轉が利くんで、奴等なしぢやアこの商賣はできねえ。チャアレー、オリヴァーを寢床へ案内してやりな」

「明日この一張羅を着せて置かねえ方がい、だらう、ファギン、なア？」

さうチャアレー・ベーツが訊いた。

「さうだとも」

チャアレーのニヤ／＼した顔へと笑ひ返へして、猶太人が言つた。

その仕事をひどく面白がつてゐるらしかつたベーツ少年は、蠟燭の挿してある、袂物棒を取り上げて、近くの厨房へとオリヴァーを連れて行つたが、其所にはオリヴァーが前に寢たことのある寢床が二つ三つあつた。そこで、可笑しくつて堪らないやうな笑ひ聲を立て、ベーツ少年は、オリヴァーがブラウンロー氏の家で喜んで脱ぎ捨てた同じ古い着物を出した。つまり、ブラウンロー氏のところでは、それを賣つたので、それを買ひ受けた猶太人が何んの氣もなしにそれをファギンに見せたがために、オリヴァーの居所の當りがついたのであつたのだ。

「そのい、方のを脱ぎねえ。ファギンに頼んで藏つといて貰ふからな。いや、面白いぞ」

哀れなオリヴァーは嫌々言はれる通りにした。ベーツ少年は新しい着物を丸めて抱へ、オリヴァーを暗闇に閉ぢ籠めて置いて、行つてしまつた。

## 十五、商賣の話

寒い雨のそぼ降る冬の夜、猶太人のファギンが萎びた身體の周圍に、大外套の釦をきつちりかけ、顔の下部をすつかり隠すやうにと、耳のあたりまで襟を立て、隠れ家を出た。

泥が敷石の上に厚くかゝり、黒い霧が街へと降り、雨がしと／＼降つてゐて、手に觸る物は、何も彼も冷く濕つてゐた。丁度ファギンのやうな人間が外へ出るのに打つつけの夜らしかつた。壁の下や戸口に身を隠しながらコソ／＼と忍んで行くこの悪相な老人は、彼が今通つて行く路の泥濘や闇の中から生れた或る見るも嫌や爬行動物が、夜這ひ出して、餌食になる十分な廢肉を索つてでもゐるや

うに見えた。

彼はさままゝの折れ曲つた狭い路を抜けて、ベスナル・グリーンに達した。そこから急に左へ曲つて、さういふ家の立て込んだ地區にはよくある汚い街の迷宮のやうな中へと入り込んで行つた。

猶太人は夜の暗さにも、込み入つた路にも、少しも弱らない程、彼が今辿つて行くあたりにはより馴れてゐるらしかつた。彼は尙ほ幾つかの路次や街を抜けて、たうとう行手の端に唯つた一つ灯りの見える街へと曲つた。で、とある家の戸口へ行つて叩いて、それを開けた者と低い聲で、二言三言交してから階上へと上つて行つた。

部室の戸の把手に手をかけると、犬が唸つた。そして男の聲が誰だと訊いた。

「わしだよ、ビル、わしだよ、お前さん」

さう言つて猶太人は内部を覗き込んだ。

「ちやア、身體ごと入れる。こら、馬鹿、貴様あ外套を着てえると、この悪魔が分らねえのか」

さう叱られた犬は、外套のためにフアギンを見違へたらしかつた。で、猶太人が外套を脱いで椅子の背へ投げかけると、犬はもとゐた巢へと、安心した風で、尾を振り／＼引つ込んで行つた。

「そこで？」

「え、お前さん」

猶太人がさう答へて、

「あ、ナンシイ」

ナンシイからどんな返答をされるか、少し心配らしく、一寸ばつの悪さうな言葉つきであつた。ナンシイが、オリヴァーをかばつて喧嘩して以來、フアギンと顔を合したのには、この晩が初めてであつたのだ。フアギンにさういふ心配があつたにしても、それはその若い女の振る舞ひで、直ぐなくなつてしまつた。ナンシイは炭欄から足を下して、自分の椅子を後へ引き、何時かの晩のことは何んにも言はずに、フアギンに椅子を煖爐の方へと寄せさせた。確にそれは寒い晩であつた。

「寒いなア、ナンシイ」

猶太人は皮ばかりのやうな手を火に翳して、

「身體の中まで通るやうだぜ」

横腹を押へながら老人が言ひ足した。

「おめえの心まで徹るんぢやア、槍ほどのものにちがひねえ、ナンシイ何んか飲むものをやれよ。おい、急いでくれ。骨と皮ばかりの老ぼれの身體がかう顫へてるのを見るとな、墓から出て来たばかりの人相のよくなえ幽霊見てえな氣がして、心持がよくねえからな」

ナンシイは澤山入つてゐた戸棚から罎を一本持ち出したが、戸棚には、罎の形がいろ／＼見えるのから見て、さままゝの異つた種類の酒が一つばい入つてゐるらしかつた。サイクスは火酒を一杯注いで、猶太人に蓋めた。

「もう澤山、全く、有難う、ビル」

一寸屑を附けたきりで、猶太人は杯を置いた。

「何んだ。俺がためえに一服盛るとでも思ひやアがるのか、やい？ うむ」

サイクスは猶太人を見詰めながら訊いた。蔑視の皺喰れた喉聲でサイクスは杯を掴んで、灰の中へあけたが、それは自分が飲む分を直ぐ注ぐためであつた。

猶太人は何時もの癖の落ち着きのないキョト／＼した風で、部屋を見廻した。それは家具なども見すばらしい部屋で、押入れの中のものを除いては、その部屋主はたゞの職工だと思はせるものばかりで、疑はしいものと言つては、隅に立てかけてある二つ三つの重い棒と、煖爐の上に懸つてゐる短銃ばかりであつたのだ。

「さア」

サイクスは舌舐めずりしながら、

「さア聞かう」

「商賣の話しかい？」

「商賣だとも、さアおめえの用を話せ」

「チャアツエーの田舎家のことなんだがね、ビル？」

猶太人は椅子を前へ引き出して極く低い聲で言つた。

「駄目だ」

サイクスは素氣もなく答へた。

「何うしてもいけねえのかい？」

猶太人はさう應じて、椅子の背へと寄りかゝつた。

「いゝや、駄目だ。兎に角、初め見込んだやうな抱き込み仕事ぢやアいけねえ」

「そりやア本式にやらなかつたからだ」

猶太人は怒つて蒼くなつた。

「それぢやア駄目だ」

「でも、俺の言ふ通りなんだ。おめえにやア分らねえのか。トビイ・クラキットが二週間てえもの、あすこにかゝりきつてたんだが、傭人一人も抱き込めねえんだ」

「では、ビル」

猶太人は相手が熱して来るに従つて和らかになつて、

「家の中の男は二人とも抱き込めねえといふんだね？」

「さうさ、その通りだ。老婢は二十年も勤めてるてえんだ。五百磅やるてつたところで奴等ア肯きやアしねえ」

「だが、女も抱き込めねえと言ひなさるのかい？」

「い、や、到底、到底」

「洒落者のトビイ・クラキッドでも駄目かい？」

猶太人は納得し兼ねる顔で言つて、

「女は何所でも女だらうぢやアねえか、ビル」

「いや、洒落者のトビイ・クラキッドでも駄目なんだ。附鬚を付け、黄色の直衣で、ブラ／＼して見たんだが、何んにもならなかつたんだ」

「口髭で軍隊下袴でやつて見りやアよかつたんだに、お前さん」

「それもやつた。だが、やつぱり駄目だ」

「でもなア」

年つた猶太人は膝へ手を落して、

「これだけ心をかけながら、これがいけねえなんて、何んにしても残念だなア」

「そりやアさうよ」

サイクスもさう言つて、

「運がわるいや」

長い沈黙がつゞいた。その間猶太人は全く悪魔のやうな悪黨面に顔を擧めて、凝乎と考へ込んでゐた。サイクスは始終猶太人の顔を横眼でじろ／＼見た。ナンシイは盗賊のサイクスを怒らせるのを恐

れたのであらう、二人の話しがまるで聞えなかつたかのやうに、火の上を見つめて坐つてゐた。

「フアギン」

不意に部屋の中の静けさを破つてサイクスが言つた。

「外から巧くやれ、ば、五十枚餘計に出ることにやアならねえかね？」

「宜しい」

猶太人は不意に眼を覺したやうになつた。

「これで手を打つか」

「え、お前さん、宜しいとも」

さう應じた猶太人は、その間で起された興奮で眼を光らせ、顔の筋肉をみな動かした。

「ぢやア」

サイクスは少し嫌さうな顔で、猶太人の手を押しつけて、

「おめえの都合のい、だけ早くやることにしようぜ。トビイと俺が、一昨日の晩、庭の扉を乗り越して、戸の腰板と窓扉を締めしてみたんだ。あの田舎家はな、夜は監獄のやうに嚴重な戸締りだ。だが、大丈夫綺麗に切ることでできるところが一ヶ所ある」

「何所だね、ビル？」

猶太人はひどく身を入れてさう訊いた。

「なに、そりやア……芝庭を越すてえとな……」

「うん、うん」

猶太人は、眼の球が飛び出さんばかりに眼を見張つて、顔を前へと出した。

「うむ」

サイクスは、それまで頭を動かさなかつたナンシイが不意に振りかへつて、猶太人の顔を指さしたのを見て、ばつたり言葉を切つた。

「そりやア何所だか、そんなこたア何うでもいゝ。おめえは俺を離れちやア何んにもできねえこたア俺にやア分つてる。だが、おめえと話をする時にやア、用心するに越したこたアねえからな」

「そりやアお前さんの氣の濟むやうでいゝ、そりやアお前さんの氣の濟むやうでいゝ」

猶太人はさう答へて、

「別に手傳ひはいらねえかね、お前さんとトビイだけで？」

「いらねえ。廻鑽と男の兒の他はな。廻鑽の方は俺たちが持つてる。だが、少童の方はおめえめつてくれ」

「何に、男の兒だ？」

さう猶太人は聲を上げた。

「おゝ、では、腰板だな、えゝ？」

「そんなこたア何うでもいゝ、ぢやアねえか。俺ア男の兒が入用なんだ、だが、大きいんぢやアいけねえ。うん」

ビルは憶ひ出したらしくさう言つて、

「こんな時煙突掃除のネッドの小倅でもあてくれたらなア。父親のネッドめ彼奴をわざく小さく育てやがつて、貸しに出しやアがつたんだ。だが、父親が喰ひ込めてえとな、少年保護會が來やアがつて、うつちやつといても一人で一つかど稼げる小僧を引き上げてきやアがつてな、讀み書きを教せえて、そのうち年季に出すんだてやアがるんだ。奴等アそれで何處までも行かうてえんだ」

サイクスは自分が受けた損害を憶ひ出して、カツと怒りだし、

「奴等アそれで何處までも行かうてえんだせぼ奴等に金錢があつたらな（いや、神様のお蔭で奴等にやア金錢がねえから、まだ此方人等の仕合せだが）、さうだ、奴等に金錢があらうものならばな、三年と経たねえうちに、此方人等の商賣に使ふ小童ア半ダースたア残りやアしねえ」

「いや、全くだ」

サイクスの言葉の間考へ込んでゐて、終りの方の言葉だけ聞き取つた猶太人は、さう同じてから、

「ビル」

「何んだ」

サイクスが訊いた。

猶太人は矢張り火を見つめてゐたナンシイの方へと頭をちよつと振つて、部屋を出て行かせてくれといふ合圖をした。サイクスはその用心を無要と思つたかのやうに、いらくくと肩を縮めた。それでも、承知して麥酒を一杯取つて来て呉れとナンシイに頼んだ。

「麥酒は要らないでせう」

腕組をしてナンシイは落着き拂つて動かうとしなかつた。

「何うしても飲んでえんだ」

「馬鹿らしい。さア、フアギン、お話しよ。この人の話しは分つてるわよ、ビル。あたしのあることなんぞ氣にしないでいゝぢやないの」

猶太人は矢張り躊躇した。サイクスは不思議さうに二人の顔を交るゝく見た。「さア、フアギン、直ぐにビルにお話しよ、オリヴァーのことを」

ナンシイは高笑ひしてさう言つた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、お前さんは利口だ。お前さんのやうな氣の利く娘さんはないぜ」  
猶太人はナンシイの頬を軽く叩いて、

「わしが話しをしようと思つたのは、オリヴァーのことなんだ、確かにな。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」  
「奴が、何うしたてえんだ？」

サイクスが訊いた。

「彼兒が丁度いゝんだ、お前さん」

鼻の横へ指をつけ、恐ろしい顔でニヤ／＼しながら、猶太人が低く囁いた。

「彼兒か？」

「彼兒におしよビル。あたしがお前さんだつたら、さうするわよ。彼の兒は他の兒のやうにやア役に立たないだらうけれどもね、戸を開けるだけだつたら、それでいゝぢやアないの、彼の兒はきつと安心だからね、ビル」

さうナンシイが言つた。

「そりやアわしにも分つとる。この二三週間といふもの、十分によく仕込んで置いたからな、もう稼がせてもいゝ頃なんだ。それにな、他の奴等ぢやア大きすぎるからな」

「うん、彼兒は丁度いゝ大きさだ」

考へながらサイクスが言つた。

「お前さんの言ふ通りになるぜ、ビル」

猶太人がさう言を挟めて、

「彼兒は自分ぢやア何うにもできねえんだ。つまりお前さんがうんと一つ威かせばな」  
「何に、威す？」

サイクスは反響するやうに應じて、

「おい、い、か、諷の威しぢやアねえぞ。仕事にか、つてから、彼兒に變なところがありやア、これ、毒喰らはば皿だ。フアギン、おめえ生きてるを彼兒又と見るこたアできねえぜ。彼兒をよこす前によ、考へとけよ、きつと、い、か」

盗賊のサイクスは寢臺の下から鐵挺を引き出して、手に持つて構へた。

「わしはそれはよく考へたんだ」

猶太人は力を籠めて、

「わしはな、……わしはな、彼兒によく眼を付けてゐたんだ、お前さんがた、始終、始終。彼兒はてめえが吾々の仲間一人だと思はせることができさへすりやア、彼兒はてめえが泥坊をやつといふ考へを彼兒の腹へ入れてやりさいすりやア、彼兒はもう此方のものだ。一生此方のものだ。おほう、今度のこたア持つてこいといふところだぜ」

猶太人は胸へ腕を組んで、頭と肩をひと塊りに一緒にするやうにして、大喜びで全く自分の身體を自分で抱いた。

「なにツ、此方のものだ？」

サイクスはさう言つて、

「そりやアおめえのものゝ意味だな」

「まア、さうかも知れねえ、お前さん」

猶太人は黄色い笑ひ聲で、

「わしのものとしといてもい、わさ、ベル」

「ところで、何んだつて」

サイクスはその愛嬌ぶかい（註 反對の意味）友だちの顔を、凄顔で睨めて、

「何んだつておめえはたつた一人のあんな蒼瓢箪の小倅をそんなにでえじにするんでえ、毎晩コンモン、ガアデンにやア五十人も餓鬼どもがウヨ／＼してえて、擇り取り放題ぢやアねえか？」

「そりやア、お前さん、あんなのは役に立ちアしねえ」

猶太人は少しドギマギして、

「伴れて來たつて仕方がねえわさ。彼兒等の面附きぢやア、しよびかれりやア、直ぐ喰ひ込まア。それでわしの方はかた無しだ。ところで、お前さん、彼兒はな、巧く扱ひさいすりやア、二十人の餓鬼を使つたつてもできねえことが、彼兒を使やア結構やれるんだ。それにな」

猶太人は落着いてきた。

「彼兒は逃げるにしても、相手は俺たちだ。何うして逃がすものかな。奴ア何うあつても俺たちと同じ舟に乗り込んであなけりやアならないわな。彼兒が何うしてわしのところへ來たのか、そりやア何うでもいい。彼兒が泥坊仕事に入つたとなりやア、それだけでもうわしが彼兒を何うでもすることのできるやうになるにやア十分だ。かういふ理由でな 可愛さうに哀れな小いちやい少年をな、何んと



か片付けてしまはなけりやアならぬやうになるよりも、この方が幾らい、か知れないのだ。片付けな  
んぞして見なさい。そリア危いしな、又第一此方の損になるわな」  
「それで、何時にするの？」

さう言つて、ナンシイは、フアギンが人情のあるらしいことを言ふのに呆れ返つたサイクスが何に  
か口汚い言葉を出しさうにしたのを止めた。

「うん、そこだ、何時やつてくんなさるな、ビル？」

「トビイと打ち合せて、明後日の晩てえことにしといたぜ」

サイクスは不機嫌な聲で應じて、

「俺の方で何んとも言つて行かなかつたならばな」

「結構、月はないからな」

「うん、さうよ」

「代物の持つて來方も手筈ができてるな、え、？」

サイクスは頷いた。

「それから……」

「いや、なに、膳立てはすつかりできてる」

サイクスは猶太人の言葉を抑へた。

「細かい事は心配しなさんな、おめえは明日の晩此所へ少年を伴れて來ねえ、俺は夜が明けてから、  
一時間すりやア石を持つて來るからなア、その時分にやアおめえは何んにも言はずに垣塙を用意しと  
きねえ、それだけがおめえのする仕事だ」

それから、三人の相談で、ナンシイが次の日の暮れがたに猶太人のところへ行つて、オリヴァーを  
伴れて來るといふことになつた。フアギンは、オリヴァーがこの仕事を嫌やがるにしても、ついこの  
頃あれほど自分を庇護つてくれた娘とは一緒に來るに違ひないと言ふのであつた。それから又かうい  
ふことが嚴重に取り定められた。哀れなオリヴァーはこの仕事のために無條件にミスタア・ウイリア  
ム・サイクスに托されること、で、サイクスは彼が宜しいと思ふやうに何うにでもオリヴァーを扱ふ  
こと、その少年の上は何ういふ災害が落ちか、らうとも、彼がサイクスから必要なる如何なる罰を受  
けやうとも、それは一切猶太人のフアギンの責任ではないこと、さういふ約束が定められ、約束をそ  
の點に於いて有效ならしめるために、サイクスが歸つてからの報告は、その要點に於いては、洒落者  
のトビイ・クラキットの證言に依つて確定するといふのであつた。

さういふ前相談が定まると、サイクスは火酒をドン／＼呷りだした。危いまでに鐵挺を振り廻し  
ながら、ひどい悪態交りに、切れ／＼の唄の文句を如何にも調子外れの聲で怒鳴つた。たうとう職業  
的の熱心を起して、彼は屋尻切りの道具箱を出して見せようと言ひだし、直きにそれを持つてよろけ  
出て來て、箱を開けて、中のさまざまの道具の使ひ方や、利き方や、それ／＼の道具のでき方の特別

な美しさなどを説明しようとしたところで、床へばたりと倒れて、その儘眠込んでしまった。

「おやすみ、ナンシイ」

猶太人はさう言つて、来た時のやうに大外套にくるまつた。

「おやすみなさい」

二人の眼が出合つた。猶太人はナンシイをじろくくを見た。ナンシイの様子にたじろぐやうなところは少しもなかつた。ナンシイはトビイ・クラキットでもさうであつたらうと思ふぐらひ、この事件にはどこまでも本氣でかゝつてゐるらしかつた。

猶太人はもう一度ナンシイに暇乞ひをした。ナンシイが彼方を向くと、倒れてゐるサイクスの身體をこつそり一つ蹴つて置いて、階段を手探りにして下りて行つた。

## 十六、屋尻切りの家

オリヴァーは朝眼を覺した時に、古い靴がなくなつてゐて、強い厚い底の附いた新しい靴が寢臺の側に置いてあるのを見て、餘程驚いた。それを見た最初は、自分が其所から釋放される前觸れではないかと思つて嬉しかつたが、さういふ考へは、朝飯に坐ると直ぐなくなつてしまつた。一緒に側に坐つた猶太人が、何んだか怖いやうな聲と様子で、オリヴァーはその晩ビル・サイクスの家へ伴れて行かれるのだといふことをオリヴァーに話した。

「そ……そこに何時までもゐるんですか」

オリヴァーは心配さうに訊いた。

「いゝや、いゝや、お前さん。何時までもゐるのぢやない」

猶太人はさう答へて、

「わたしたちはお前を放す氣はない。心配しなさんな、オリヴァー、直ぐに又此所へ伴れて歸つてあげろ。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。わたしたちはお前を他所へやるほど情なしぢやないわな、お前さん。いゝや、何うして、何うして」

火の上へと踢んでベンを炙つてゐた猶太人は、さうオリヴァーに擲擲つて、オリヴァーが逃げる事ができれば逃げる積りであることを自分は知つてゐるのだといふことを見せようとするかのやうに、クス／＼笑つた。

「お前はな、わしの考へぢやア」

猶太人はオリヴァーを見据ゑて、

「何んためにビルの所へ行くのか知りたいたらうな、何うだ、お前さん？」

オリヴァーはその年取つた盜賊が、自分の考へを見透してしまつたことを知つて、吾れ知らず顔を赤くしたが、それでも恐れずに、左様、それを知りたいのだと言つた。

「いや、お前は何う思ふね？」

オリヴァーの問ひを避けて、ファギンがさう訊いた。  
「いゝえ、ちつとも知りません」

「へッ」

少年の顔を凝乎と見てゐてから、落膽した顔付で彼方を向いて、

「では、ビルがお前に話すまで待つてろ」

夕方になると出て行かうとしてゐた猶太人は、オリヴァーの居る部屋へ入つて行つた。

「蠟燭を灯けなさい」

猶太人は机の上へ一本置いた。

「この本をな、迎ひが来るまで讀んでゐなさい。おやすみ」

「おやすみなさい」

オリヴァーは低い聲で答へた。猶太人は戸口へとあるいて行きながら、肩越しに少年を見返へつたが、不意に立ち止まつて、オリヴァーの名を呼んだ。オリヴァーは顔を上げた。猶太人は蠟燭へ指さして、それを灯ける、といふ手真似をした。蠟燭に火を灯けて、卓子の上の蠟燭立てに立てると、猶太人は部屋の暗い端から、眉をひどく擧めて、オリヴァーを凝乎と見詰めてゐた。

「氣を附けるよ、オリヴァー。氣を附けるよ」

猶太人は氣を附けさせようといふ風に、自分の前に右手を額はせた。

「あの男は氣が暴い人間だ。自分の血が湧き立つと、他人の血を流すことなんざア何んとも思はない男だ。何んなことがあつても何んにも言ふなよ。あの男の吩咐け通りにしなさい。いゝか」

最後の言葉に甚く力を入れて言つて、猶太人は物凄いニヤ／＼した顔になつて、頭をしやくつて、部屋を出て行つた。

オリヴァーは猶太人の姿が見えなくなると、いろ／＼と考へた。彼は何ういふ悪い目的で自分がサイクスの所へやられるのだから、考へ得られなかつた。で、長く考へた後、その屋尻切りの男の家で、竝の傭人の仕事をするために伴れて行かれるのであつて、自分よりもつと役に立つ少年が傭はれるまで其所へ置かれるのであらうと思つた。苦しみには馴れきる位馴れてゐるので、別に家の變はることなどは、それ程氣にはしなかつた。で、彼は少しの間考へ込んでゐたが、そこで、深い溜息をついて、蠟燭の心を切り、猶太人が置いて行つてくれた本を讀みだした。ところが、その本は大犯罪人のことを詳しく書いてあつた本で、その記述は如何にも生き／＼してゐて、まるで頁の上に生／＼しい血が流れ、死んだ人の靈魂の囁きが耳邊で聞えるやうな氣がした。

オリヴァーはぞつととして本を閉ぢて側へ押しつけ、跪いて、そんな恐ろしい罪を犯すやうになる位なら死んでもいゝ、何うぞさういふ罪から自分を助けてくれるやうにと天へ祈つた。で、その祈禱を終つても、オリヴァーは矢張り手に頭を埋めて凝乎としてゐた。すると、サラ／＼と衣ずれの音がしたので、はつと顔を上げた。

「何んですか」

さう言つて、はつと立ち上つたオリヴァーは戸口に立つてゐる人の姿を見た。「誰ですか」

「あたしよ。あたしなのよ」

頭へ聲がさう答へた。オリヴァーは頭の上へ蠟燭を上げて、戸口の方を見た。それはナンシイであつた。

「灯りを下げておくれ」

娘は顔をそむけた。

「眼が痛いわよ」

オリヴァーは、ナンシイがひどく蒼い顔をしてゐるのを見た。それで病氣なのかと優しく訊いた。娘は椅子へ身體を投げるやうに坐つて、オリヴァーの方へは背中を向け、手を握り合せたが、何んの返辭もしなかつた。

「あゝ、嫌だ、嫌だ」

少時してからナンシイは叫んで、

「あたしはこんなことになるとは思はなかつた」

「何にかあつたんですか？ あたしぢやア役に立たないんですか？ あたしにできることなら何んで

もやります。ほんたうにやります」

娘は膝へ手を打ちつけ、床を足で踏んだが、不意に止めて、身體の周圍へ肩掛をきつちと引き纏つて、寒さうに顫へた。

オリヴァーは火を掻き起した。ナンシイはそれへと椅子を引つ張つて行つて、寸時の間何んにも言はずに坐つてゐたが、纏て頭を上げて見廻した。

「あたしは時々自分で知らないうちに變になつてしまふのよ」

ナンシイは着物の皺を直すのにかゝつてゐる風に見せて、

「この濕つた汚い部屋のせゐかも知れないわね。さア、ノリイ、お前さん、支度はできて？」

「あなたと一緒に行くんですか」

「さうよ、ビルに頼まれて來たのさ。あたしと一緒に來るんですよ」

「何んな用なの？」

オリヴァーは後ずさりした。

「何んの用つて」

ナンシイは眼を上げたが、少年と顔を見合すと、直ぐ顔をそむけて、

「あら、大丈夫、心配することはないわよ」

「あたしは信じません」

ナンシイを黙つて見てゐたオリヴァーが言つた。

「ぢや、勝手にするがいゝわよ」

娘は笑ひを装つて、

「でも、駄目よ」

オリヴァーは、ナンシイの親切な感情を引きつける力がか自分にあることが分つた。で、寸時の間は、自分の哀れな有様を憐れんで助けてくれと頼んで見ようかと思つた。が、其時、それは未だ十一時そこ／＼で、街を未だ人が多勢通るのだから、そのうちの誰かが自分の話しを信じて助けて呉れるかも知れぬといふ考へが、オリヴァーの心へ忽ち浮んで來た。さういふ考へが起るといふと、オリヴァーは前へ出て少し口早に、それでは直ぐ行くと言つた。

オリヴァーのさういふ寸時の考へも、その意味もナンシイは見遁さなかつた。娘は、オリヴァーの言葉の間、凝乎と彼を見てゐて、何事も覺つたといふ眼付をオリヴァーへ向けた。

「しいッ」

娘は、オリヴァーの上へ屈むやうにして、そろ／＼と見廻しながら、戸へ指ざした。

「お前さんはね、自分一人ぢや助かることはできないよ。あたしはお前さんのために一生懸命に骨を折つたけどもね、何うしても駄目だつたのよ。お前さんは周圍をすつかり圍まれてゐるのよ。だからね、此所から逃げようと思つてもね、今は駄目だわよ」

女の様子の方の籠つてゐるのに驚かされて、オリヴァーはひどく驚いてナンシイの顔を見上げた。ナンシイは眞實を言つてゐるらしかつた。顔も白く心配さうで、身體も本當に顫へてゐた。

「あたしは何時かお前の虐められるのを助けてあげたわね。あたしは又そんな時があれば助けてあげるわよ。今もさうしてあげたわよ。」

娘は聲を高くして續けた。

「でなかつたら、お前を伴れに來た人たちは、お前をすつとひどくするんだつたのよ。あたしはお前が靜かに黙つてゐると請け合つたのよ。お前がさうしないとね、お前さんのためばかりぢやない、あたしのためにもよくないわよ。いゝえ、悪くすると、あたしが殺されるかも知れないんだよ。さア御覽、あたしはお前のことでもう全く本當にこんな目に遭つたわよ」

ナンシイは頸と腕の生まく／＼しい幾つもの傷痕へ指ざし、ひどく速口でつゞけた。

「よく覚えておいでよ。今はもう、お前のためにあたしがこの上責められないやうにしといておくれよ、ねえ。お前を助けることができるのだつたら、あたしは何時でもさうするわよ。でも、今はさうする力がないの。誰もお前をひどい目に遭はす積りぢやアないんだしね、これからお前がさせられることはね、何んなことにしたつてもね、それはお前の咎にはならないわよ、しいッ。これ黙つて、お前が一口一言へば、あたしが一つ打たれることになるんだよ。さア手をお出し、急いで。ほんとに解つたね」

ナンシイは、オリヴァーが我れ知らず出した手を取つて、灯を吹き消して、オリヴァーを引つ張つて階段を上つた。暗闇に隠れてゐる誰かが戸を開けて、二人が出て行くと、後を直ぐ閉めた。貸馬車(カプリオレット)が待つてゐた。オリヴァーに話しかけた時と同じ烈しさで、娘はオリヴァーを引き入れた。そして、窓幕をすつかり降ろした。馭者は行き先を聞かずに、寸時の猶豫もなく、馬に鞭を當てて全速力で駆けさせた。

娘は矢張りオリヴァーの手をしつかり握つてゐて、もうそれまでに話して置いた用心みなければならぬことゝ、安心していゝことを、オリヴァーの耳へ囁き續けた。何にも彼も早く、大急ぎで、オリヴァーは何ういふ所にあるのか、何ういふ所を通つて其所に來たか、思ひだす時も何にもない時に、猶太人が前の晩訪ねて行つた家の前へ馬車が止まつた。

極くホンの寸時の間、オリヴァーは人のゐない街をばすつと急いで見渡した。そして、助けを呼ぶ叫びが口まで出た。けれども、ナンシイの言葉を忘れずにあるといふ苦痛の聲でくれぐれも彼に言つたナンシイの聲がオリヴァーの耳から未だ消えてゐなかつた。彼は助けを呼ぶ聲を出すだけの氣になれなかつた。躊躇してゐるうちにその機會は去つた。オリヴァーはもう家の内部へ引き込まれて戸が閉つたのだ。

「こつちへ」

そこで初めてオリヴァーの手を離してナンシイが言つた。

「ベル」

「おゝい」

サイクスはさう答へて、蠟燭を持つて階段の上へ出て來た。

「おゝ、今晚は。さア」

これはサイクスのやうな氣質の男では極く強い褒めた言葉であり、非常な歓迎であつたのだ。ナンシイはそれでひどく満足したやうで、心持よくサイクスに挨拶した。

「大眼玉の奴、トムの家へ行つちまつたぜ」

サイクスは二人の通り路へ灯を見せながら言つた。

「彼兒は仕事の邪魔になるからな」

「そりやア好かつたわね」

さうナンシイが應じた。

「ところで、おめえ、小僧を伴れて來たなア」

みんなが部屋へ入ると、サイクスはさう言つて戸を閉めた。

「さうよ、此兒だわ」

「温順しく來たのか」

「仔羊のやうにね」

「そいつは結構だ」

サイクスはさう言つて凄<sup>こ</sup>い顔<sup>かほ</sup>でオリヴァーを見て、

「此<sup>こ</sup>兒<sup>こ</sup>の軟<sup>な</sup>かい身<sup>み</sup>體<sup>たい</sup>のためにな。さうでなきやア痛<sup>いた</sup>い目<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>せなきやアならねえところだつたんだ。さア、來<sup>こ</sup>い、小<sup>こ</sup>僧<sup>そう</sup>、今<sup>いま</sup>貴<sup>き</sup>様<sup>さま</sup>に講<sup>かう</sup>義<sup>ぎ</sup>を聞<sup>き</sup>かせてやらア。こりやア直<sup>す</sup>ぐやつてしまふに越<sup>こ</sup>したことはねえんだから」

さう新<sup>あ</sup>らしい弟<sup>でい</sup>子<sup>し</sup>に言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>をか<sup>か</sup>けて、ミス<sup>ミ</sup>ス<sup>ス</sup>ア・サイクスは、オリヴァーの帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>を引<sup>ひ</sup>つたくつて、部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>の隅<sup>すみ</sup>へと投<sup>な</sup>げ、肩<sup>かた</sup>を掴<sup>つか</sup>へて、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は卓<sup>たく</sup>子<sup>し</sup>の側<sup>そば</sup>に坐<sup>ま</sup>つて、前<sup>まへ</sup>へオリヴァーを立<sup>た</sup>たせた。

「さア、先<sup>ま</sup>づ、こりやア何<sup>な</sup>んだか知<sup>し</sup>つてるか」

サイクスは卓<sup>たく</sup>子<sup>し</sup>に置<sup>お</sup>いてあつた短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆ</sup>を取<sup>と</sup>りあげた。

「よし、それなら、これを見<sup>み</sup>ろ。これが煙<sup>えん</sup>硝<sup>せう</sup>だ、こゝにあるのが彈<sup>た</sup>丸<sup>ま</sup>だ。これが詰<sup>つ</sup>めものにする古<sup>ふる</sup>帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>の片<sup>きれ</sup>だ」

オリヴァーはさういふさま、く<sup>く</sup>の物<sup>もの</sup>がみ<sup>み</sup>な分<sup>わか</sup>つたと低<sup>ひ</sup>い聲<sup>こゑ</sup>で言<sup>い</sup>つた。そこで、サイクスは非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>に巧<sup>たく</sup>者<sup>しや</sup>に緩<sup>ゆる</sup>つくりと短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆ</sup>に彈<sup>た</sup>丸<sup>ま</sup>を籠<sup>こ</sup>めだした。

「さア、これで彈<sup>た</sup>丸<sup>ま</sup>が入<sup>はい</sup>つた」

「え、よく分<sup>わか</sup>りました」

「さうれ」

さう言<sup>い</sup>つて盜<sup>たう</sup>賊<sup>ぞく</sup>のサイクスは、緊<sup>かた</sup>くオリヴァーの手<sup>て</sup>首<sup>くび</sup>を掴<sup>つか</sup>んで、銃<sup>じゆ</sup>身<sup>しん</sup>が觸<sup>さ</sup>はるまでにオリヴァーの額<sup>ぬか</sup>へと近<sup>ちか</sup>く持<sup>も</sup>つて來<sup>き</sup>たので、オリヴァーは我<sup>わ</sup>れ知<sup>し</sup>らずはつとせすにはあられなかつた。

「俺<sup>おれ</sup>と一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に外<sup>そと</sup>に出<sup>で</sup>た時<sup>とき</sup>にな、俺<sup>おれ</sup>がてめえに口<sup>くち</sup>を利<sup>き</sup>く時<sup>とき</sup>でなきやア、一<sup>ひと</sup>口<sup>くち</sup>でも言<sup>い</sup>つて見<sup>み</sup>ろ、この彈<sup>た</sup>丸<sup>ま</sup>が直<sup>す</sup>ぐツドンとてめえの頭<sup>あたま</sup>の内<sup>うち</sup>へへえるぞ。だから、てめえが俺<sup>おれ</sup>の許<sup>ゆる</sup>しを受<sup>う</sup>けねえで物<sup>もの</sup>を言<sup>い</sup>ふ積<sup>つも</sup>りなら、その前<sup>まへ</sup>に最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>をあげとけよ。」

その言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>の效<sup>き</sup>果<sup>くわ</sup>を増<sup>ま</sup>すために、相<sup>あひ</sup>手<sup>て</sup>を一<sup>ひと</sup>つ睨<sup>にら</sup>みつけてから、サイクスは續<sup>つづ</sup>けた。

「俺<sup>おれ</sup>の知<sup>し</sup>つてる所<sup>ところ</sup>ぢやア、てめえが片<sup>かた</sup>付<sup>つ</sup>けられたところで、別<sup>べつ</sup>にてめえのことを氣<sup>き</sup>に掛<sup>か</sup>けて搜<sup>さが</sup>す奴<sup>やつ</sup>は誰<sup>だれ</sup>もねえ筈<sup>はず</sup>だ。だから、かういふ箠<sup>むち</sup>棒<sup>ぼう</sup>な手<sup>て</sup>數<sup>すう</sup>をか<sup>か</sup>けて、てめえにかう言<sup>い</sup>つて聞<sup>き</sup>かすのも、てめえ一人<sup>ひとり</sup>のためになると思<sup>おも</sup>ふからなんだ、やい、解<sup>わか</sup>つたか」

「それぢやア結<sup>けつ</sup>局<sup>きよく</sup>はかうだわね」

ナンシイはひどく力<sup>ちから</sup>を籠<sup>こ</sup>めてさう言<sup>い</sup>つて、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>を極<sup>ごく</sup>く注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>して聞<sup>き</sup>けと言<sup>い</sup>はぬばかりに、オリヴァーに向<sup>むか</sup>つて、一<sup>ひと</sup>寸<sup>すん</sup>顔<sup>がん</sup>を擧<sup>あ</sup>げて、

「お前<sup>まえ</sup>さんが、これからやる仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>に、この兒<sup>こ</sup>が邪<sup>じあ</sup>魔<sup>ま</sup>をするやうだつたら、お前<sup>まえ</sup>さんは、この兒<sup>こ</sup>が後<sup>あと</sup>で人<sup>ひと</sup>に話<sup>はな</sup>しをしないやうにと、彈<sup>た</sup>丸<sup>ま</sup>で頭<sup>あたま</sup>を打<sup>う</sup>ち抜<sup>ぬ</sup>いてしまつて、それで今<sup>いま</sup>まで毎<sup>まい</sup>月<sup>げつ</sup>商<sup>しょう</sup>賣<sup>ばい</sup>のやうにしたいろんな他<sup>ほか</sup>の事<sup>こと</sup>の報<sup>はつ</sup>いと同<sup>お</sup>んなじやうに、このことのために頸<sup>くび</sup>を絞<sup>しぼ</sup>められて空<sup>そら</sup>へ垂<sup>た</sup>ら下<sup>さ</sup>がる罪<sup>つみ</sup>が又一<sup>また</sup>一つふえても構<sup>かま</sup>はないといふんだわね」

「それだ、全く」

サイクスは喜んで言つて、

「女つてやつア、何時でも極く手短かに物を言ふことができるものだな。所が、風向が悪いと、そりやア随分長くなる。さア、もう此兒にもすつかり解つたらうから、晩飯とやらかして、出掛ける前に、一トくちやることにしよう」

晩飯が終ると（オリヴァーが餘んまり食欲のなかつたことは容易に察し得られるが）サイクスは水を割つた酒を呷つて、きつちり四時に起せといふことを、間違つた時に對するさまぐの悪態を添へて、ナンシイに吩咐けて、寢床へと身體を倒した。オリヴァーは同じサイクスの吩咐けで、床の上の敷物の上で、着物を着たまゝ横になつたが、ナンシイは火を繕ひながら、定めの方に二人を間違ひなく起すために、暖爐の側で起きてゐた。

長い間オリヴァーは起きてゐた。ナンシイがその上何か注意を囁いてくれる機會がないものでもあつた。起きてゐることゝ、心配とに疲れて、オリヴァーはたうとう眠つてしまつた。

目を覺ますといふと、卓子には茶の道具が出て居り、サイクスは椅子の背へ掛けた外套の衣囊へと、いろ／＼な品物を突つ込んで居り、ナンシイは忙しいやうに朝飯の用意にかゝつてゐた。未だ夜は明けてゐなかつた。蠟燭が未だ燃えてゐて、外は眞つ黒であつた。鋭い雨が窓硝子を打つてゐた。

空は黒く曇つてゐた。

「さア、やい」

オリヴァーが飛び起きた時に、サイクスは唸つた。

「五時半だ。ぐづ／＼するな。もう遅いんだから、早くしねえと朝飯にありつけねえぞ」

オリヴァーは顔を洗つたり何かするのに手間取らなかつた。朝飯を食べて、サイクスの不機嫌な問ひに對して、もうすつかり用意してゐると答へた。

ナンシイは少年の顔を殆んど見ずに、襟巻にする手巾を、オリヴァーに投げ掛けた。サイクスは、肩へ掛ける大きい粗い布の肩衣をオリヴァーに與へた。さういふ支度で、オリヴァーは泥坊のサイクスに手を與へた。サイクスは、外套の横衣囊に短銃を持つてゐるといふことを、威すやうな手眞似でオリヴァーに示すために寸時止まつてから、オリヴァーの手をしつかり握つて、ナンシイと別れの言葉を交して伴れて出た。オリヴァーは戸口へ來た時、娘と顔を見合せる事ができるかと思つて、一寸振り返つた。が、ナンシイは、前の晩のやうに火の前に坐り込んで、全く動かないでゐた。

## 十七、夜の路

二人が街へ出た時には、ひどい吹き降り、雲は薄暗い暴風雨雲で、心持の悪い朝であつた。前の晩の雨がひどかつたので、路には大きな水溜ができて居り、溝は溢れてゐた。空には曉明の薄明りは



あつたが、しかし、それは四邊の陰鬱を減らすよりは寧ろ増したくらのであつた。曉明の薄白い光りは、濡れた屋根や、物淋しい街へ暖かい輝いた色を注ぎはせずに、街燈が放つ明りを薄青くさせるだけであつた。家々の窓はみんなびつたり閉つて、二人が通る街は、誰も通らず、音もなく、その地區には誰も未だ動き出してゐなかつたやうであつた。

夜がすっかり明けきつた時分には、二人はスミス・フィールドの家畜市場へ入つてゐた。サイクスは、オリヴァーを引きずりながら、人混みの最もひどい中を押し分けて通つたが、オリヴァーの驚いてゐるやうないろ／＼な物や、音には、少しも注意を向けないやうで、彼は通りかゝつた友だちに二三度挨拶し、朝酒を飲まないかといふ誘ひをみな斷つて、ドン／＼通り抜けて、ホジャー・レエンから、ホルボーンへと出て行つた。

「さア、小僧」

セント・アンドリュー教會堂の時計を見上げたサイクスはさう言つて、

「もう直き七時だ。しつかり歩けよ。さア、ぐづつくな、のらくらめ」

ミスタア・サイクスは、さう言ふと共に、小さい同伴者の手首をしやくつた。オリヴァーは速足と駈足との間のチヨコ／＼走り、できるだけよくこの屋尻切りの盜賊の大股の速足へ躓いて行つた。二人はさういふ足取りでハイド・パーク近邊を通り、ケンシントンへと向つて行つたが、サイクスは少し足取りを緩めて、少し後の方からやつて來た空の荷馬車が追ひつくまで待ち合せた。それに「ハ

ウンスロー」と書いてあるのを見て、できるだけ丁寧なイルウォースまで乗せて行つてくれないかと馭者に頼んだ。

「乗りなさい。お前さんのお子さんかね？」

「さうだ、わたしの兒さ」

サイクスはさう答へて、オリヴァーを凝乎と見て、短銃の入つてゐる衣囊へ何んともしないやうな風で手を入れた。

「お父さんの足がお前にやア早やすきたなア。何うだい、兄さん」

オリヴァーが氣息を切らしてゐるのを見て、馭者はさう言つた。

「いや、ちつとも」

さうサイクスは言を挾れて、

「馴れてるんだ。さア、俺の手につかまれネッド。よウいしよ」

さうオリヴァーに聲をかけて馬車へ乗らせた。馭者は、積み重ねた袋を指して、そこへ臥て身體を憩すませると、オリヴァーに言つた。

いろ／＼な啤程石を過ぎて行くので、オリヴァーは、一體何所へ伴れて行かれるのだら／＼かと、だんだん怪しんだ。たうとう「馬車と馬」といふ看板の酒屋へと來た。その少し先に横に曲る路があるやうであつた。此所で馬車が止まつた。

サイクスは、オリヴァーの手を掴んで、非常な勢ひで飛び降りて直ぐ彼を抱き下し、恐ろしい顔で睨みつけ、如何にも意味あり氣に横衣囊を叩いた。

「左様なら、兄さん」

さう馬車の男が言つた。

「此兒は無愛想だ」

サイクスはさう答へて、オリヴァーを揺ぶつて、

「此兒は無愛想だ。犬め。此兒のことを氣にしねえでくだせえよ」

「いや、何うして」

男はさう應じて馬車へ戻つた。

「兎に角、いゝ天氣だね」

で、馬車を驅つて行つてしまつた。

サイクスは、その男がすつと遠くなるまで待つてゐた。そこで、周圍を見廻してもいゝと言つて、もう一度オリヴァーを引つ張つて出かけた。

酒屋の前を通つて少し行つて左へ曲つた。それから、右の道を取つて、道の兩側に大きな花園や、紳士の屋敷がある處を通つて長い間歩いて行つた。市へ着くまでに、少し麥酒を飲むために止まつたきりであつた。家の壁にオリヴァーは可なり大きな字で「ハムブトン」と書いてあるのを見た。二人

は何時間か煙の間をさまよつた。聽て市へ歸つて來て、消えかゝつた看板の出でゐる古い酒屋へ入つて行つて、厨房の火の側に掛けて晩飯を言ひつけた。

厨房は屋根の低い部屋で、天井の眞ん中をば大きい梁が渡つてゐた。高い脊のある腰架が火の側にあつて、それには野天着の粗野な男が五六人坐つて、酒を飲んだり、煙草を飲んだりしてゐた。その連中は、サイクスを一寸氣に留めたくらゐで、オリヴァーの方は少しも氣に留めなかつた。で、サイクスの方もさういふ連中を氣に留めなかつたので、サイクスと若い同伴者とは他の人たちには累はされずに坐つてゐた。

二人は晩飯に、コールド・ミートを食ひ、その後長く其所に坐つてゐて、サイクスはパイプの三四服も飲んでゐるので、オリヴァーは、もうきつとそれから先へは行かないのだらうと思ひだした。

朝早く起きたのではあるし、長く歩いてゐたので、オリヴァーは初めは居睡りした。それから、疲れと煙草の煙りにすつかり負けて、ぐつすり睡入つてしまつた。

サイクスに突つつかれて目を覺ました時には、もうすつかり暗くなつてゐた。坐つて周圍を見廻すことができるまでに眼を覺ましたオリヴァーは、サイクスが勞働者風の男とエールを酌み交してひどく心安く話しこんでゐるのを見た。

「ぢやア、お前さん、下ハリフォードへ行きなされるのかね、えゝ？」

さうサイクスが訊いた。

「さうでがすよ」

大分御機嫌の態の男はさう答へて、

「しかも直ぐ行きますでがすよ。馬が今朝来たでな。歸り荷がねえでがす。だから、暇はかゝらねえね。さアこれで馬の仕合せを祈りますだ。ヤア、彼奴はい、奴だからね」

「あすこまで、小童とわしを乗せてつてくんさらねえかね？」

サイクスはその新たな友だちの方へと、エールの徳利を押しやつて頼んだ。

「眞つ直ぐに行きなさるんなら承知でがす」

その男はさう答へて徳利から顔をあげた。

「ハリフォードへ行くのでがすか？」

「シェバートンまで行くんだがね」

「いや、何處までも引き受けたでがす」

男はさう答へて、

「勘定済んだかな、ベッキイ」

「え、此方の旦那から頂いたですよ」

さう娘が答へた。

「いや、こりやア」

男は酔漢の眞面目さで言つて、

「そりやア飛んでもねえ事だ、それぢやアわしらが済みましねえ、あんた」

「なアにさ」

サイクスは應じて、

「これから載せてつておくんさらうといふんぢやアねえかね、その代りに一杯や二杯此方から御馳走させておくんなすつても、済むも済まねえもあるもんですかい」

その外互に挨拶し合つてから、サイクスとオリヴァーはその男の荷馬車に乗つて出かけた。

夜は眞つ暗であつた。濕つた霧が川や周囲の沼地から立つて物寂しい野の上へと廣がつた。それは肌を劈くやうに寒かつた。何にも彼も陰々として黒かつた。馭者はコクリ／＼居眠りをするし、サイクスは馭者に話しをする氣などはなかつたので、一言も言ふ者はなかつた。オリヴァーは馬車の隅に圓くなつて、恐怖と心配で心を掻き亂され、さういふ夜の光景に不思議な喜びを持つてゐるかのやうに、枝を物凄くから／＼と動かしてゐる大きい瘦せた樹が、何か恐ろしい者のやうな氣がしてぞくぞくしてゐた。

サンベリーの教會堂の傍を通つてゐると、七時を打つた。彼方の渡船小屋の窓からの灯火が路を越えて此方へとさしてゐたが、それが下に幾つかの墓のある黒いユウの樹の蔭をば一層薄暗く見せた。餘り遠くないあたりで水の落る鈍い音が聞え、老樹の葉が夜風に戦いでゐた。さういふ音は死人を

常久に休ませるための音の低い静かな音楽であるかのやうな気がした。

サンベリイを通り越して、又寂しい路へと来たが、それからもう二三程で、馬車は止まった。

サイクスは下りて、オリヴァーの手を引いて、又歩きだした。

疲れたオリヴァーが待ち設うけてゐたシユバアトンではどの家へも入らなかつた。で、何處かの市の灯がさう遠くなく見えるところへ来るまで、泥濘と暗闇のなかを薄暗い横路や寒い廣野を通つて、歩き續けた。

凝乎とよく前の方を見ると、オリヴァーには、川水が自分の直ぐ下にあつて、今橋の袂へかゝつてあることが見えた。

サイクスは橋のもとまでは真直ぐに歩いて行つたが、不意に左へと土手を下りた。

「水だ」

オリヴァーはさう思つて、恐ろしさに慄然として、

「あたしを殺すために此所へ伴れて来たんだ」

オリヴァーはもうすこしで地面に跪いて、自分のまだ本當に若い生命を助けるために、もう一度骨折つてみようとするところであつたが、その途端に自分たちがまるで崩れ破れてゐる一軒家の前に立つてゐることに気が附いた。入口の兩側に窓があり、二階があつたが、燈光は見えなかつた。何處も暗く、破はしかけになつてゐて、何う見ても人の住んでゐる家ではなかつた。

サイクスはやはりオリヴァーの手を引いて、靜かに低い玄關へ近寄つて行つて、鑿を擧げた。戸はサイクスの押す儘に開いて、二人は内へ入つて行つた。

### 十八、銃 聲

「こらア」

サイクスたちが廊下へ足を入れるや否や高い皺唄れ聲が叫んだ。

「騒ぎやアがるな」

サイクスは戸締りをして、

「ピカを見せるよ、トビイ」

「あ、はア、兄いかい？」

さう同じ聲が叫んで、

「ピカだ、バアネエ、ピカだ。旦那を案内しろよ、やいてめえ、いゝ加減に起きろ」

靴脱ぎか何にかそんな物を、今呼んだ人間を起すために投げたと見え、ひどく落ちる木の物の音がし、續いて、半睡の人の聲らしいムニヤクいふ呟やきが聞えた。

「やい、やい」

同じ聲で叫んで、